

旧・東方神零録

異山 糸師

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

神様のミスというテンプレで死んだ主人公。転生したものの、暫くすると膨大な量の暇な時間ができたので神様のところでニート生活をしていたら何故か神々の頂点に立たされた。まあ、それでも気楽に行きましようかねえ。※知識不足なので駄文になると思いますが、よろしくお願いします。

目次

プロローグ	1
バレなきや犯罪じゃないんですよ……	
5	
神になっちゃったぜ	17
家族ができた	34
酔っ払いが苦手だ	52
天城家(?)の朝	60
旅仲間ゲットだぜ	71
お茶日和	82
シユワちゃん(笑)	89
やっぱ温泉でしょ	95
黒猫のなく頃に	102

さあ、説教を始めよう	111
覗き、ダメ、絶対www	119
森の中へ、ムラサキにく、出会ったく	
125	
ぼっち可哀想だよ	133
人体破壊は楽しいな	143
羽の魅力にて	154
貴族にまともな奴は居ないのか	163
月ってカジノか何かなのか?	170
のんびりと過ごす時間	180
酒の肴に	186
ロボットには危険がいつぱい?	190
愛の形は人それぞれ……うえッぷ!	

約束と責任と普段通り

――

206

山の頭と鬼との戦闘

――

218

サクツと終わるこの戦い

――

227

名前付けと宴会と

――

238

再び旅へ

――

250

迷子は俺達じゃない、断じてだ。

プロローグ

やあ、みんなこんにちは。もしくはこんばんわ？まあどっちでもいいんだけど話を聞いてくれないか？

いきなりだが…起きたら自室ではなく生活感あふれる大きな部屋にいた。なぜだろう？

周りを見渡すと、今俺がいるのは大きなベッドの上。その近くには大量のマンガと小説、ゲームが散乱している。俺が知ってるやつもかなりあるな……。ていうかこの部屋、凄く高校生には羨ましいようなモデルの部屋。こんな部屋で暮らしたかった……!! そんな思いを抱きながらここがどこだかもわからないし、暇つぶしにマンガを一冊読み始める。

だけど邪魔者登場。読み始めて三分で声をかけられた。

「お主……なぜ普通に過ごしておる？少しは戸惑わんのか？」

顔を上げると、そこにはダンブルド……ゴホンゴホン!!…長い白い髭と髪をもった爺さんがいた。

「爺さん……人の部屋に勝手にはいるな」

「あ、すみません……………って！ここ儂の部屋じゃよ!？」

「爺さん…………お昼ご飯はさつき食べたでしょ？」

「確かに食うたけども！儂はボケとらんぞ！」

「なんでやねん！」

「そっちのボケではないわ！」

「おお！この爺、できる！」

そして 俺はマンガをボタンと閉じて、さつきまでの雰囲気をぶちこわすように真面目な顔をして言った。

「……………()はど()？」

「いまさら!？」

この部屋が高校生の俺には快適すぎて忘れてた。

「ゴホン……………さて、天城零よ。まずは謝らせてもらう……………すまんかった!!」

え？ いやいや、何で名前知ってるの？

「実は儂は神様…………創造神というものをしておつての…………お主を手違えで死なせてしまったのじゃ」

「ああ…………この爺さん、頭が…………」

「違うぞい!？」

「剥げてるんだな」

「まさかの予想の遙か上を行くセリフ!!」

「こほん…仕切り直し…は!?!俺死んだの!?!ていうか、なにそのテンプレ!ここはどこ
の小説だ!?! よしOK。」

「……………死因は?」

「うむ…………高層ビルが崩壊するほどの雷じゃ」

「バカじゃないの?」

なにをどう間違えたら俺にそんなものがふつてくるんだよ。

「はあ…………で?生き返らせてくれるのか?」

「うむ。元の世界は無理じゃが、別の世界なら転生と言う形で生き返らせることが可能じゃ。そうじゃのう…………『東方Project』なんてどうじゃ?」

「東方?まあ好きだからいいけど…………能力くれるのか?」

「好きなのを言うが良い。儂くらいになれば余裕じゃからの!」
「だつたらまずはミス無くせよ馬鹿やろう。」

しかし能力か…………できれば万能型や生活なんかには便利なのがいいな…………。
しばらく考えてから爺、もとい糞神に言う。

「じゃあ【無限にする程度の能力】と【消す程度の能力】をくれ」

「ふむ、増やすのと消す能力か……他にはいいのか？」

「ん〜……なら、強靱な肉体をくれ。あと増やしたりしたものを収納できるようにできなかいかな？」

「わかった。これを腕に着けてみるのじゃ」

そういつて渡されたのはシンプルで邪魔にならないような銀の腕輪。これを右手首に着けてみると、手首の大きさにサイズが変わった。

「手に持ったものを収納したいと思えば腕輪に収納され、出したいと思えばその物が出てくる。収納される空間内は時間が進んでおらんから入れたときの状態で出てくるからの」

「おお、便利だな。」

「それではいいかのか？今回のことは本当にすまんかった。それでは送るぞい」

「おう。じゃ〜な〜」

そうして俺は光に包まれて異世界に送られた。

まさか自分が異世界転生するなんておもわなかったよ。

バレなきや犯罪じゃないんですよ……

目を開けるとそこには俺が見たことがないような世界が広がっていた。

………高度5000mという、まだ見ぬ世界が。

ちよつ、まつ、此処思いっきり空じゃん！

『ごめんごめん。間違えちった』

「てめえ！ミスりすぎだろうが！覚えてろよ！絶対泣かせてやるからな!!」

ヤバイヤバイヤバイよこれは!!地面が目の前にあるよ！

「くっそ！こうなったら！」

なんとか脚を下にして、着地の瞬間に衝撃を『消した』。

「し、死ぬかと思った……」

音もなく着地した俺は、疲れきって地面に倒れ込んだ。

まったく、何でいきなり疲れてるんだか……

この間に能力の確認をしておく。【無限にする程度の能力】は、霊力・体力・生命力を常時無限にしているらしい。所謂不老ですねわかります。あとは増やしたいもの、金や所持品なんかも含めていろんなものを増やしたいだけ増やせると。【消す程度の能力】

は文字通り、消したいものを何でも消せる。後々確認していこう。

「さて、そろそろ動きますか」

起き上がってあたりを見渡す。まあ周りは木しかないけど。

「糞神〜？」

『なんじゃ〜？というか糞神て……』

「今いつの時代？」

『今か？今は八意永琳が月に行く10年位前かの』

「へえ〜……昔過ぎじゃね？」

『まあ不老なんじゃから』

『そうだけでもさ……』

『これからどうするのじゃ？』

「ん〜……まあ適当にぶらつくよ。どうせ村とかそんなのも出来てないくらい昔だし。永琳達以外人間居ないんだろうしね」

『そうかの。一応近くに送っておいたから見つかるじやろう』

早く見つかればいいなあ……などと思いつつ歩き出した。



いやあ………なんだ？此処。

今、俺の目の前には異様な光景がある。

遙か昔なだけに美しい自然、綺麗な水が流れる川、美味しいと感じることができると澄んだ空気が周りにはある。

あるんだが、その中に明らかに不自然なものが存在していた。

自己主張の激しい壁は何かを物語っているね。何かは知らないが………

「とりあえず入るか」

『どうやってじゃ？』

「まあ任せなさい」

そうやって能力を使う。

此方の空間と壁の向こうの空間の境界を『消す』。なんかどこぞのスキマ妖怪みたいになったが境界を操るのではなく、消すといった一方通行なのでパクリでは断じて無い！

「お邪魔しま〜す」

『神は見た。犯罪を犯した瞬間を！』

ハハハ、ナニヲイツテイルノダイ？キミハ。

「神よ……バレなきや犯罪じゃないんですよ」

『儂にバレておるじやろう』

「あく、一人で話すとか悲しいことはもう止めよつと!!」

『ぬあつ!!卑怯な!!』

聞こえない聞こえない。

よくわからん老人は放っておいて中にはいると——

「なんだ？これ……」

中もなかで凄かった。

言うなれば、ドラ○ものの未来都市？俺がいた世界ではあり得ないようなものがわん

さかあった。

「兎に角、見て回りますか!!」

道路の端を目立たないように歩きながら見て回る。ステータス画面みたいなものが出てたり、バケツ型のロボットが街を徘徊してたりした。某禁書目録の学園都市にあるやつに、顔と武器を搭載したやつ。

しばらくの間、目をキラキラさせながら歩き回っていたんだが、どうしてか研究所みたいなどこの前を通り過ぎたあたりから街に戻ってきた今まで、なぜか誰かにつけられている。まだ金は持っていないからあげられませんかよー。あきらめて下さーい。

馬鹿なことを考えながらも誰かを確認する。近くの窓ガラスやロボットの目のレンズなんかに写っている姿をちらちらと確認した。

そしてストーカーが誰かが分かったのでお教えしよう。

なんと！ かの有名な永琳さんではありませんか！

あんたさ、有名な人だから気をつけなよ。周りの人が八意様だ。とか言ってるのが聞こえてくる訳よ。気づいてるんだか気づいてないんだか……………。

仕方ないので人通りの少ない道を行き、人がいないのを見計らい俺はその場から消えた。

今回は能力じゃなくてただの身体能力だけで。だけどまだ鍛えてないから霊力で肉体強化しながらだ。

一瞬で永琳の背後に回り込むと永琳が俺を見失いきよろきよろしでした。そろそろ気づかせてあげよう。さすが俺。優しいね。

「どうしたの？こんな暗いなか女性一人は危ないぞ？きよろきよろして、迷子？それ

とも……誰か人を捜しているのかな？」

さて、反応はいかに？

◇◇

side 永琳

私はいつものように仕事を終わらせて帰ろうとしたけど今日はいつもと違った。

帰り道、ふと目にした一人の男に目を奪われた。少し長めの黒髪と整った顔立ちに黒のYシャツとズボンの姿。その人から目が離せない。気付くとその人のことを追っていた。

なにかが他の人と違う……この人間じゃない……そんなことを私の感が告げていた。その人は暫くいろんなところを珍しそうに見て回り、最後に人通りの少ない道に入っていたので私も後を追った……次の瞬間、その人は目の前から消えてしまった。

訳が分からない……一体どこへ消えたのかしら？

きよろきよろとあたりを見渡していた次の瞬間、後ろから誰かに（……）話しかけられた。

急いで後ろを振り向くと、目の前で消えたはずの彼がいた。

なんで？何時の間に？どうやって？

そんな疑問ばかりが頭の中で浮かんでは消えていく。しかし、表面上は冷静にして対応する。

「ごめんなさい。あなたも分かっている通り尾行していたのは私よ」

「ふくん、なんで？」

「それはあなたのことが少し気になって……」

「ふくん、なんで？」

「……よく分からないのだけれど、あなたは他の人と違う雰囲気があるのよ」

「ふくん、なんで？」

「……馬鹿にしてるのかしら？」

「……もういいわ。あなた何者なの？」

「ふくん、なに………つて、これはもう良いか。答えるならば……ただのしがない旅人
キ」

「嘘。霊力が一般人位しかないのに外で生き残れるわけ無いじゃない」

私より少ないのに………絶対に妖怪にやられるわよ。

「あ………これでいい？」

「ッ!？」

彼が少し考えたあと、私は何か大きな力に当てられて気を失った。やはり彼は思った通り異質であった。そんな彼に興味を持ったところで……意識を闇に落とすとした。

side out



永琳と出会って質問責めを質問で返して遊んでいた。

段々不機嫌になっていくが、そんな顔も中々可愛いじゃないか。

「嘘。霊力が一般人位しかないのに外で生き残れるわけ無いじゃない」

この質問で俺はあることを思い出した。

俺はこの体の中に取り得ないほどの量の霊力が渦巻いている。さすがにそんなものを常時出しておくとは大変なので、此処にくる途中に抑えることを一生懸命したわけだ。糞神のアドバイスもあり、今では一般人レベルまで抑えられる。やろうと思えばすべて遮断する事だつて出来るし。

「あゝ……これでいい?」

「ツ!?!」

あつ! やばつ! 少し出し過ぎて永琳が倒れた!

急いで近寄り、地面にぶつかる前に抱きかかえる。触れ合う胸の柔らかさにどきどきするが、無理矢理やましい気持ちを消して平常心を回復させる。こんなことにも使える能力に敬礼！

しかしどうしようか……永琳の家知らないし、抱えたまま表に出るのはどうかと思うし。

とりあえず起きるまで壁にもたれ掛かって座った俺の脚を枕にして寝かせる。

あ、勿論地面の汚れやゴミや細菌なんかの類は全て消し去りましたよ？

——1時間後——

「あく……ゲームとかの中のカラに触れられるのは嬉しいが、そろそろ脚が痺れそうだな……」

脚の上の頭を何気なしに撫でながら呟く。その髪はさらさらで触っているだけでも気持ちよかった。

……ていうか、端から見れば俺変質者じゃね？

「う……んう……あれ？……は……？」

あ、やっとなら起きた。

「おはよう。早く起きてくれないかな？もう真夜中だよ」

「え？あ、ごめんなさい」

永琳が起き上がったので俺も立ち上がる。痺れてなくて良かった。

「さて、さつきは悪かったね。まさか気絶するとは思わなかったよ」

「私の方もごめんなさい。面倒見てくれてたのでしよう？」

「まあ俺のせいだし。さ、そろそろ帰りなよ」

「ええ、あなたは どうするの？」

「そういえば どうしよう。宿は……もう無理だろう。やっぱり野宿かね？」

「ああ……まあ気にしなくて良いよ。どうにかするさ」

少しあたりを見てみると段ボール発見。寒さは凌げるだろう。

「それ、どうするの？」

段ボールを拾った俺を見て永琳が聞いてきた。

「この時間帯は宿なんて無いだろうし……まあ寒さは凌げるだろうから」

「と、とりあえず今日は私の家に泊まりなさい。半分私のせいでもあるのだから……」

「え？いいの？」

「ええ。どうせ一人暮らしなのだし」

よっしや！寝床ゲット！

「それじゃあ行きましょうか」

そうして永琳について行くと、一つの豪邸に到着した。

とりあえず感想。

「デカイ……………」

「此処が私の家よ。一人暮らしだからこんな大ききくてもしょうがないのに……………」

中に入っても凄かった。家具はどれも最高級品で部屋の数も半端じゃないくらいあるよ。セキュリティもバッチリだから、空き巣に入ってきたやつはご愁傷様だね。

俺達はリビングとかわしきところでお茶を飲んでた。美味しいことは美味しいが、入れ方次第では更に美味しくなるんじゃない？さては永琳、料理とか出来ないな？

そんなことを考えていたら、永琳に話しかけられた。

「自己紹介でもしましょうか。私は八意永琳よ」

「天城零だ。零と呼んでくれたらいいよ。よろしくな」

「ええ、よろしく。それで？零は外から来たのでしょうか？行く宛はあるの？」
行く宛？外は人間がまだいないんでしょう？此処にいるしかないじゃん。

「ないな。とりあえず此処にいるかな」

「そう。ならこの家に住まない？どうせ私だけだし部屋は沢山あるのだから」

「それはかなりうれしいが……なんで？」

「原作キャラと一つ屋根の下で一緒に暮らせるのは嬉しい……けど永琳だ。なにかありそう。」

「特に理由はないわよ？あなたに興味があるのと気に入ったからかしら」

ふーむ……まあそれくらいなら……

「じゃあ好意に甘えようかな？暫くお世話になります」

「ええ、よろしくね」

綺麗な微笑みを見せる永琳を見て、俺も軽く微笑んだ。

神になつちやつたぜ

あれから十年の月日が流れた。

俺がやったことと言えば、能力を使いこなしたり身体を鍛えたりした。筋肉は全くなかったが、確かに身体は強くなっていった。武器は艶消しをした漆黒のナイフと己の肉体だね。

あとは家事スキルを鍛えに鍛えた。もう料理なんかは神レベル！永琳大絶賛！栄養満点で健康や美容にもいいのに滅茶苦茶低カロリー。どんだけ食べても太らずに健康になっていく。

そんな俺に永琳が付けた名前が『魅惑の料理人』。
少し恥ずかしいのは内緒だ。

今日も今日とて、この都市を守る軍隊にいる友達：馬鹿三人組に会いに行く。

永琳の用事について行ったときに仲良くなった。

「お、頑張ってるか？」

「お！零じゃねえか！」

「こんにちは、零さん」

「レイ〜！会いたかった〜！」

はい、人物紹介。

上から松岡源。通称ゲンだ。筋肉が凄い短い茶髪をツンツンにたてたワイルドなイケメン。友達思いのいいやつだ。武器は大剣。

次に佐藤修一。通称シユウ。眼鏡をかけた爽やかイケメン野郎。めんどくさいことはこいつに押しつける！自称バイ。変態。ホモ。這い寄る混沌。こっち見んな！！武器は直剣。

最後に水無月沙希。通称サキ。腰まである長い水色の髪に、抜群のスタイル。容姿はマジ恋のユキだと思ってくれたらいい。物凄く俺に懐いている。それは永琳が嫉妬するほど。よくくつついてくる。

武器は狙撃銃。

この三人はかなりモテている。それでいてかなり強い。ほかと比べるとな。

「零！模擬戦やろうぜ！」

「しゃーないなあ」

「ゲンはいつもこれ。勝てない癖にこれ。脳筋の癖にこれ。馬鹿これ。」

「おい！結局馬鹿ってことだよな!?!」

「ツッコミが甘い！大減点。」

「なんの評価だ!」

「知りません。」

「ゲンはよくやりますね。私なんか負けすぎて諦めてしまいましたよ」

「レイ、頑張つてね〜！そんな筋肉達磨なんて吹き飛ばしちやえ♪」

「サキが酷い!?!」

「おう！まかせとけ、こんな筋肉達磨………肉団子は俺が挽き肉にしてやる!」

「零もさつきから酷いぞ!?!言い換えても罵倒は罵倒じゃん！挽き肉って俺死んでない

か!?!」

「今夜はハンバーグだ♪」

「うわあああああッ!!!」

「いい感じに壊れてきたゲンを見てハイタッチをする、俺とサキ。そろそろ始めようかね。」

「ほら、起きろ。肉体的にもポロポロにしてやろう………挽き肉みたいに（ボソツ）」

「ぐっ……ドSめ……最後怖すぎだぞ」

「何のこと〜?」

大剣を構えるゲンを目の前に、俺はとくに型もないし基本は向かってくる相手を叩くので力を抜いた自然体のままでいる。ナイフは今回は使わない。

「行くぞ!」

「こいや〜」

ゲンは瞬時に間合いを詰め、大剣を上段から振り下ろす。受け止めても良いけど痛いから嫌。大剣の腹に手の平を当てるだけで逸らす。ゲンは直ぐに大剣を引き戻し、横に風払い。バックステップでかわして脚が地面についたと同時にゲンの懐に飛び込む。

「なっ…!?!」

「ふっ………!!」

顎に掌底を喰らわし、回し蹴りで吹き飛ばした。勿論手加減はした。

ゲンは地面をバウンドして気絶した。

「挽き肉は勘弁してやろう………」

振り返り様、飛びついてきたサキをキャッチ。暖かくて柔らかくていい匂い。普通の男なら我慢できないだろうが、不屈の精神でねじ伏せる。

「格好良かった〜!さすがレイだね!!」

「本当です。どうですか？今夜にでも一緒に……………」

「シヤラツプ!!」

ベシッ!つと、シユウの頭を叩く。

「やれやれ、ツンデレなんですから」

……………こいつヤバい…早く何とかしないと……………!!

見ろ、いつもにこのサキが無表情でいる。初めて見たわ。

「零、ここにいたのね」

「永琳?なんでここに?」

「いや、八意様!」

サキが吃驚し過ぎて、海老のようにシユウのとこまで跳び下がった。

今夜はハンバーグにしようと思っただけ、エビフライにしようかな?

永琳はこの都市で滅茶苦茶人気者。アイドルといっても過言じゃない。テレビにも出てたし、ファンクラブがあるとか……………テレビで俺のことが好きとか言わなかったらファンクラブからの襲撃もないのに……………

「なんでつて……………あなたに会いたかったからよ」

そう言つて腕を絡めてくつついてきた。

年頃の少女少女が一つ屋根の下で生活……………わかるよね?ただ……………永琳から来たと

言っておこう。

それ以来永琳は俺にゾツコン……ゲフンゲフン!!

ふう……まあいいや。それより永琳。巷で俺達なんて呼ばれてるか知ってる？おしどり夫婦だよ？いつの間にか戸籍が天城永琳だぞ？誰だこんなことしたやつ！出てこい！説教をしてやる！結婚なんかしてないぞ！

「知ってるわよ？これで妻ね」

「頭の中を読むな。ていうかあり得んだろ……」

なんてこつたい……。

はあ……つと、ため息をついていると今度は反対の腕に柔らかい感触。

「八意様、離れて下さい。レイは私のです」

サキが腕を絡めて今までにないくらい真剣にいつていた。

お前も真剣（マジ）でなにしてんの……。

「あら？悔しかったら世間に認められなさい」

なんかバチバチいつてる……幻聴だといいな。

「羨ましい限りですね。お二人が」

「黙れやホモが」

こうして俺の日常は過ぎていく。ゲンが空気のまま。



ある日、永琳から月移住計画の話聞いた。

「へえ、凄いな。まさか月に住むとはねえ」

「ええ。月は時間の流れが遅いとか噂されてるわ。あと、この地は穢れで汚れているとか言ってたわね」

「なるほどなるほど。大変だねえ」

俺は呑気にお茶を啜りながら聞いている。

「で、いつ出発？」

「三日後よ」

「はやつ!? あ、たしか人妖大戦なんかがあつたはず……しょうがない。永琳には悪いが、俺がくい止めるか。」

計画の当日、ロケットの前に俺たちはいた。案の定妖怪は都市を攻めてきた。

「零? 何で乗らないの?」

「そうだなあ……妖怪たちをどうにかしないと永琳達は無事月に行けないだろ? まあ……妖怪は任せろ」

「なに馬鹿なこと言ってるの!!そんなことしたら零が死んじゃうじゃないツ!!」

「死なないさ。またな、永琳」

永琳が何かを言う前に首の後ろを叩き、気絶させる。

倒れてくる永琳をいつかのように抱き留める。永琳の顔を見てみると目から一筋、涙が流れていた。永琳の頭を優しく撫でながら三人に向き合う。この三人には予め話しておいた。

サキなんてもう泣きじやくっていた。

「じゃ、悪いな三人共。永琳を頼むな」

「ああ…まかせろ。元気でな」

ゲンに永琳を渡すと、ゲンは一人早くロケットに乗り込んだ。

「生き残って下さいね?」

「当たり前だろ?」

シユウも別れを告げ、乗り込んだ。

最後にサキだ。

「ほら、サキ。早く乗りなよ。置いてかれるぞ」

俯いて震えていたサキに近付きながら言う。近づいた次の瞬間：俺の唇には温かくて柔らかい感触と、視界はサキの顔で埋め尽くされていた。十秒をすぎた頃にはサキは

離れた。

「初めてだったんだから……責任とって……」

「サキ……」

「絶対に死なないで……再会したときに責任とってね♪」

涙に濡れた顔でいつも通り笑い、最後にもう一度だけ俺にキスをしてロケットに乗り込んだ。

「やれやれ……さして、片づけますか!」

振り向くと、数百メートル先に土煙をたてながらこちらに向かう妖怪の大群。軽く万は越えてるんじゃないかね?ま、余裕余裕。

俺は腕輪の中から永琳特製爆裂投擲槍を一本出す。

それを無造作に……しかし的確に大群の真上に投擲。丁度真上に行つたときに能力発動!

槍をおよそ十億に増やす。その時、ロケットは月に向かって発射した。

それを見送りながら槍を見ると、丁度妖怪どもに接触したところだった。この槍は貫通力は無いが、槍全体が爆弾であるためかなりの威力になる。

地を轟かせ大気を震わす。爆炎が妖怪を包み、煙が立ち上る。

爆心地を見てみると、そこだけ更地になっていた。

「やつべ……オーバーキルだ」

そんな俺の心情を無視して今度は都市に仕掛けられたら爆発が俺を襲う。

「うつそー……」

光で目をやられ、音で耳をやられた。でもなんとか衝撃やなんかは消した。

回復してあたりを見渡すと、何にもない。そう……木一本すらない。

「これから俺にどうしろと……」

呆然としていたとき、なんと糞神から連絡が。

『零よ、聞こえておるか？』

「おう、久しぶりだな。どうした？」

『いやのう？これからそちらは人間が生まれるまでにかなり時間があるじゃろう？』

そういえばそうだな。

『じゃから暫くはこちらで過ごさんか？』

なるほど……一人孤独なのよりは良いな。

「是非頼む」

『了解じゃ』

次の瞬間には、目の前にジジイがいたのでとりあえず殴つとく。

「そおい」

「ぐぼらっ!?」

吹き飛ばし飛ばし。

飛ばないジジイは、ただの老いぼれだ……。

「いきなりなにをするんじゃ!」

「いや、つつい……」

「ついで殴るな。まったく……」

いや、ねえ?目の前にいきなりジジイがいたら嫌でしょう?

「さて、こちらの時間はあちらと比べて進みが随分違う。まあ、人間が生まれるまでや

りたいことを好きだけやるが良い」

「なに!?そんな夢みたいなのができるのか!ならば遠慮はしない!!」

まず………

——100億年後——

気付いたら100億歳……あまりにも此処の居心地が良すぎた。人間も妖怪も神も既にまれていた。

俺がやってたことと叫びたら、あらゆるマンガ・小説・ゲーム・アニメ・映画 e t c e t c ……………。

すべてコンプリート!! エロ系もしたから枯れなかった。

あとは料理の研究とか。いろんな世界の神様に試食してもらった。女性に大人気な俺がいる。甘いものを食べても太らない!

戦闘面では、いろんな軍神とやり合い鍛えた。タケミカツチやスサノオなんかだね。全世界の軍神 V S 俺の大乱闘。数え切れないほどの神々を倒して圧勝。光速以上の速度が出せる俺がいる。衝撃が出るが消せばいい。空なんかも走っちゃうぜ? ワイルドだろお〜?

もしかしたら八坂神奈子もいたかも……………知らないけど。

そろそろ東方の世界に帰ろうと考えていたある日、ジジイに話しかけられた。

「お主、神力が出ておるぞ?」

「はあ?」

「確認してみろ」

言われたとおり、確認してみる。

すると霊力のほかにさらに強い力発見。

「のう?」

「(。D。)」

「……………はっ!」

「え!?なんでさ!」

「大方、月に移住した者たちに信仰されておるのだろう」

「あいつらが…?」

「まじでか……………」

「折角じゃ。濃くらい凄い神にしてやろう!」

「どういふこと?」

「聞いた俺を無視して何故かハイテンションなジジイ。」

「月神だからついでに太陽神なんかも……………月と太陽とかなんかかっこいいじゃろ?」

「……………そう言えば軍神全てに勝っておったの……………ならば軍神としても……………ブツブツ

……………」

「な、なんかやばくないか?更に俺がチート化してない?」

「よし!決めたぞい!」

「な、なにを?」

「お主にはありとあらゆる、存在している世界の月と太陽の神と軍神のトップ……………」

まり儂みたいな存在になつてもらう！」

「な、なんだとおおおおお!!?!!」

ドヤ顔で言うジジイ……や、ヤバい……

「じゃ、じゃあ俺は……」

「種族・神じゃな！これからは月神・太陽神・軍神と名乗るがよい！それらの神々は全てお主の言うことを聞くじやろう。あとそれらに関することも何でもできるしの。能力も追加かの？【思ったことを現実にする程度の能力】じゃ。儂みたいなことができるぞ。あとは顔合わせじゃ。ほい！」

すると俺とジジイはデカイ白い場所において、少し丘みたいな所に立っていた。

「皆の者！聞くがよい！儂の隣にいる天城零はこれよりお主等の主じゃ！儂位偉いからしかと言ふことを聞くように！」

ちよつ、待てや！

とりあえず目の前の、俺から見て右は軍神の方々。真ん中は太陽神の方々。左が月神の方々。果てしなく続くこの空間に果てしなく並んでいる神々。

アルテミスやツクヨミ、天照大神やアポロンやラー、アテナやウルスラグナやオーデインやスサノオ……皆が知つてるような神がたくさんいる。

雄叫びを上げて賛同する軍神のみなさんと太陽と月の神は知り合いからは賛同の声

と知らない方の声。

あとは……………

「創造神様！納得行きません！なぜこのようなガキなんかに！」

という多数の声。

「なあ、ジジイ。神っていうのはお前以外人間から作られたようなもんだよな？」

「そうじゃな」

「なら生きてる年数は億に行くか行かないかだよな？」

「そうじゃな」

「なら100億歳生きた…………俺から言わせれば赤ん坊のようなものだよな？」

「そうじゃな」

「だよなく。ならばちよつとカチンときたかも…………」

「言つてやれ言つてやれ！」

ノリノリだなジジイ。

まだ文句を言う奴らに向かって一言放つ。

「黙れ」

たったこれだけ…言葉に殺気をのせ、神力を爆発させる。なんせ無限にあるから。

この一言で静まりかえり、文句を言う奴らは耐えきれず地面に這いつくばり汗を滝の

ように流す。

「俺に文句があるなら、俺くらい強くなり、100億生きて俺と同等の存在になつてか
ら来いや、クソガキ共」

目を細め、ゆらりと笑う。

「これからおまえ等は俺の物。わかったな？」

そう言った後、雰囲気を変えに戻す。文句言ったやつだけに狙ってやったので、ほかの
奴らは無事。

「ということだ！皆、これからよろしくな！」

大喝采を浴び、やがて解散となった。

そんな中、俺は四つん這いになり叫んでいた。

「うあああああああッ!!!なんてことしたんだ俺の馬鹿!!これでマジで神々の一番
上じゃん！やってしまった。俺的にも作者的にも……orz」

「まあまあ、これからは全世界からアマギ神として信仰されるからの。頑張れ！」

このやろう………とりあえず、神力と新しい能力は封印した。危なすぎるもん。

「というか！アマギ神とか恥ずかしいイイイイ!!」

「堂々とすれば良かろう」

もういや………東方の世界に帰ろう………。

「ジジイ、俺帰るわ……送ってくれ」

「うむ、またの」

「ああ、じゃくなく」

そうして転生したときのように再び送られた。

家族ができた

送られた先はよく分からないが山の中？

きよろきよろしていると誰かに話しかけられてしまった。

「おい、そこのお前」

「ん？なんだ？」

「なんだ？じゃない。此処で何をしている」

振り向くと幼女が………ンンツ！………諏訪子がいた。

どうやら此処は洩矢神社の近くだったらしい。

「俺は旅人の天城零と言う。道に迷ったらここに行き着いたんだよ。君は？」

「私か？私は洩矢諏訪子だ。近くの神社で神をしている」

「ごくろーさまです。」

「霊力が殆ど無いようなお前がいるのはおかしいぞ」

「一般人レベルなのに無いようなとか………」

「とりあえず永琳の時みたいに出す。」

「これでいい?」

今回はさつきのこともあり少し出し過ぎてしまった。木が……爆ぜた!? やべ、クレイターが……鳥が落ちてきた?……死んでる!?

急いで元に戻す。諏訪子を見てみると、やはり気絶。

永琳みたいに頭を脚に乗せて起きるまで待機だ。

—— 一時間後 ——

「ひくまくだ」

まだ起きない。なんだ? 徹夜明けか? 夜更かしは美容の大敵だぞ?

あ、幼女だから関係ないか(笑)。

「誰が幼女さ!! これでも大人の女性だもん!!」

いきなりガバツと起き上がる諏訪子。

「大人の女性は「くもん」とか言わないぞ?」

「ふぐつ……!!」

「河豚? 流石に持っていないな……ごめんな?」

「あ、いいよいよ、食べたかったけど我慢……つて! 誰も魚のことは言っていないよ

！」

「諏訪トノ！君に決めた！」

「ニヨ〇トノだよね!? 違うよ!? ていうか、カエルだし無理矢理すぎる！」
なんでニヨ〇トノ知ってるの? ある意味凄いな。

「なんかね、突然頭の中に浮かんできたよ」

ああ、頭が残念な子なんだね……………。

慈愛に満ちた目で諏訪子を見つめて抱き上げる。

「何考えてるかわかんないけど違うから! あと降ろしてよ!」

「お嬢ちゃん、お家はどこだい?」

「あーうー……………子供じゃないもん……………」

そうして俺はしよぼんとした諏訪子を抱えたまま神社へとのんびり歩いていった。

少し歩くと立派な神社についた。鳥居をくぐり諏訪子を下ろす。

「さあ着いたぞ。森へお帰り。また捕まったりするんじゃないぞ」

「動物じゃないよ! 捕まえたのは君だし!」

野生の動物を自然に帰すように優しく下ろしてあげたのに、なぜか叫ばれた。

こ、こんなの初めて……っ！！！！

流し込まれる醤油を口いっばいに感じて顔を真っ青にしながら、意識を落とした……。

◇◇◇

………はっ!?

い、いったい何が………

そうか………諏訪子に醤油一瓶飲まされたんだ。

しかし、なんであんなとこにあっただんだ？

起き上がろうとしたら、いつもと違い体の上になにか温かくて柔らかい存在………
上に酒臭い存在があった。

首だけ動かして見てみると、諏訪子が俺の体の上で寝ていた。しかも帽子が無い。

まあいいや。このまま寝てしまおう。

お休み。



「ん……ふあゝあ……朝か……」

翌朝、朝日が昇ると共に目が覚めた。体の上を見てみると諏訪子は既におらず、数メートル離れた部屋の壁まで移動していた。寝相が悪いにも程があるだろ。

「朝食でも作りますか」

顔を手早く洗い、勝手ながら台所を借りる。

メニューは簡単に焼き魚と大根おろしにお浸し。あとはご飯と味噌汁かな？

一見普通に見えるが味は違う！………はず！

『魅惑の料理人』なめんなよ！

「さ、できたできた。あとは諏訪子でも起こしますか」

朝食を昨日と同じ机に並べて諏訪子を起こしにかかると。

「諏訪子。朝だ起きろ。このつるぺたロリ幼女（ボソツ）」

「誰が幼女かツ！！………つてあれ？レイ？」

「それ以外に何に見える？」

「すげえ………本当に小さく眩いたのに聞き取りやがった。

「いいから顔洗ってこい」

「え？う、うん……………」

その間、俺はお茶を入れてまったり飲んでいた。

「おまたせー。朝ご飯作ってくれたんだ。ありがと」

「いいさ。食べようか」

「いただきます」

挨拶をして魚を一口食べる。うん、焼き加減もばつちりで大根おろしによく合う。

「な、何これ!?物凄く美味しい!!!」

「俺の数ある特技の一つの料理だ」

味噌汁を啜りながら勢い良くご飯を食べる諏訪子を見る。

「そう言えば諏訪子。お前昨夜醬油を一瓶丸々俺に飲ませたんだぞ」

「うっ…………ごめんなさい…よく覚えてないや」

「まったく…これからは気をつけろよ?」

そう言つて諏訪子の頬に付いている米粒を取つてやり、自分で食べた。

「あっ…………!!!」

「ん?どうした?」

「な、なんでもない…………。そ、そうだ!レイつてこれから予定とかあるの?」

「予定…………?」

ん〜…宛もない旅だからな〜……………

「特にないけど？」

「ならば、ここで一緒に暮らさない？レイのこと気に入った！「これからは気をつけろ」ってことは、これからも一緒に居るってことだよな？」

「あ〜…………ナルホドネ。分かった。しばらく世話になるよ」

「うん！よろしく！」

それから数十年位は一緒に過ごした。

その間は特に何もなく、諏訪子と平和に過ごしていた。

それもそろそろ終わりが近づいてきた。大和の神々が此方に来だした。

もしかしたら俺のこと知ってる奴が居るかもしれないから、交渉みたいな真似事でもしてこようかねえ？

縁側で寝ころんでいた俺は起き上がり、枕代わりに丸めていた黒のロングコートを手に取る。このコートは燃えないし濡れないし刃を通さないという優れもの。まあ、達人レベルなら斬られるだろうけど俺の肉体は強靱なので傷は付かないだろう。ちなみに

永琳が作ってくれた。

コートを着て、諏訪子のとこにいくと諏訪子は煎餅をバリバリ食べながらお茶を飲んでた。俺も向かいに座り煎餅に手を伸ばす。

「なあ諏訪子。最近なんか来てるだろ？」

「あゝ……ぱりぱりごくんっ……大和の神だよ？そろそろこの神社にも来ると思うよ」

「やつぱり？そこでさ、俺の平和ライフをそんな奴に奪われるのは嫌なのよ。だからすぐに終わるように交渉というものをしてくる」

「え〜？無駄だと思うな〜」

「ま、いいからいいから。本当のことという暇だからそいつら見てこようとおもってさ」

お茶を飲み、立ち上がる。

「あはははっ、レイらしいね！行ってきなよ！」

「ん、行ってくるわ」

通りすがりに諏訪子の頭を人なでしてから外に出る。

あ、そう言えば大和の神どもの場所知らねえや。



「ちよいとそこの猫さん。最近来た神どもってどこにいるか知ってる？」

「にや〜…ミラー！」

ピシツと前足で方向を教えてくださいれる猫。ちなみに俺は動物や妖精なんか滅茶苦茶好かれるし話ができたりできなかつたり……………。

「ふむふむ…………サンキューな〜」

「にやあー！」



やって参りました、大和の神々の砦！

途中、道が分かんなかったから猫に教えてもらった。ありがとう猫。今度マタタビあげよ！

しつかし、いろんな神力があるねえ…………量的には俺の足元にも及ばないけどな。

「止まれ!! 貴様、何者だ!!」

おっと、モブキャラ（門番）か。

「ワタシハ諏訪大国カラ来マシタ。交渉ニキタ交渉人ノマイケルデース。トリアツテ貰エマスカ？」

「ふんっ、人間か…ついて来い」

見下したように笑い、歩いていく。

……あれ？ ツツコミなし？ なんか凄く悲しい……

ついていくこと数分……明らかに他とは違う作りの扉の前に来た。ここが偉い人が集まるところなのかね。

コンコンツ

「諏訪大国から来たという交渉人を連れてきました！」

『入って下さい』

中から聞き惚れるような綺麗な声が聞こえてきた。現にこの門番が声を聞いて惚けている……ていうか仕事しろよ。

ハッと意識を復活させた門番は扉を開け、俺だけが中に入る。

中は机が「コ」の字に置かれていて、「コ」の空いている場所に椅子が一つ置かれていた。とりあえずそこに座る。

腰を下ろし前を見ると、驚愕の顔をして顔を真っ青を通り越して真っ白になっている美人さんと八坂神奈子がいた。

俺は二人に向かってにつこり（実はニヤリと）笑いかけ名前を言う。

「ワタシハ交渉ニキタ、マイケルトイイマス。以後才見知りオキヲ」

「はい？」

その時の2人のアホ面を見て心の中で大爆笑しておいた。

◇◇◇

「デハ貴女タチノ……あゝ、もうめんどいからいいや。……名前聞いても？」

「面倒くさくなったのでやめた。反応無いからつまんないし。」

「は、はい！私は天照大神です！」

「わ、私は八坂神奈子です!!よ、よろしくお願いします！」

「私はトヨウケビメ。………というか、なんでそんなに畏まつてるのよ？特に神奈子。」

相手はただの人間よ？」

確かに、周りの奴らも神奈子を見てかなり驚いているように見える。

「ば、馬鹿！なんて口の効き方を……ッ!!このお方は………ひっ!!」

べらべら喋り出しそうだったので少しだけ睨んだら怯えちゃった。

俺としてはだいたいここの戦力なんかも把握できたし、言うこと言ってさっさと帰り

たい。

「どうしたのよ？」

「な、なんでもない！」

「あゝ、コホンツ……そろそろ本題に移ろう」

「は、はい………」

「それもそうね。それじゃあ、その紙を見て頂戴」

そうして近くにいた弱そうな神が渡してきた。受け取って一度トヨウケビメなどを見てみると、天照大神と神奈子以外の奴らがニヤニヤしていた。はつきり言って気持ち悪い。

さてさて、それじゃあ見てみますかね。

内容は、

1, 洩矢神の消滅

「……………」

「(か、神奈子。なんて書いてあったのでしょうか？トヨウケビメ達が勝手に決めたので知らないのですよ)」

「さ、さあねえ？でもやばそうです……アマギ様のお顔が少し動きましたから」

2, 諏訪の無条件降伏

……1と2逆じゃね？

いや、そんなことはどうでもいい。諏訪子側に俺が居る限りこんなことは許されな
い。

だってイラつくじゃん？

「さて……これ、誰が決めたんだ？」

「トヨウケビメと左右にいる方々です……。い、如何なさったのでしょうか？」

天照がびくびくしながら聞いてきた。ついでに隣の神奈子もビクついている。二人
からしたら俺はボスだからな。

「これを見ろ」

そう言つて書状を渡す。

「なっ、こ、これはッ!!？」

「な、なんてことを書いてるんだッ!!!」

「分かったか？出来の悪い部下を持つと大変だな」

俺のどこも居るだろうが、居たら殺すわ。

「貴様ツ！人間のくせに何を言う!!」

「生きて帰れると思うなツ!!」

周りに居た幹部つばい奴らが刀に手をかけた。

俺が一瞬で殺そうかと立ち上がりかけたとき、

「やめなさい！何をするつもりですか!!」

天照大神が止めに入りやがった。ちっ、残念。

「トヨウケビメ！どういうことですか!!」

「いいじゃない、別に。大体、人間がこの場において交渉してこようなんてことがおこがましいのよ」

こいつはまだ俺が人間だと思っているのか。まあ、気づかれないようにしているのは俺なんだが。

「立場が分かって無いのよ。しかも相手は崇り神らしいじゃない。死んで当然よ」

「た、立場が分かってないのは…「お前がな」…え？」

次の瞬間、俺の左右にいた雑魚共の首が血の梯子を綺麗に作りながら宙を舞っていた。

いきなりの事でここに居る全員が固まった。どうやら何故このようになったかが理

解出来ないらしい。本当に頭の出来が残念なことで。

俺は血が付いていない漆黒のナイフを両手で一本ずつ弄ぶ。「無限にする程度の能力」で大量に増やしたナイフを右手の銀の腕輪に収納していたので、両手に出したのだ。指に挟むように四本ずつ増やして持つ。

「こんなときに動かないのは自殺行為だぜ？」

腕を振るい、ナイフを投擲する。

狙い変わらず雑魚共の頭に刺さった……と思ったのだが、力が強かったのか、頭が爆ぜた。ナイフはそのまま進んで壁に轟音を立てながら、クレーターを作りながら激突した。

残りは動かない天照大神と神奈子とトヨウケビメだけだな。狙いはトヨウケビメだけだが。

「さてと……次はお前だ」

「ひっ……………!!!」

俺が前に来たことで漸く意識が戻ったらしく、めちやくちや脅えていた。

「あ、ああ……………」

涙を流し、失禁しやがった。汚いなあ…。

「ア、アマギ様……………この度は真に申し訳ありませんでした！部下の管理を真面目にしな

かった私の責任です…。私が全て責任をとりまます。なので…どうか許して頂けないでしようか!!」

「わ、私からもお願いします！すみませんでした!!」

天照大神と神奈子が謝罪し、頭を下げてくる。別にそこまでしなくともいいんだが。

「天照大神…長いな、アマテラス、本当だろうな?」

「は、はい!!如何様な事でもお申し付けください!!」

「ふむ…まあいいよ。よかったな、トヨウケビメ。二人に感謝しろよ」

ナイフをしまい、トヨウケビメから離れる。臭いし。

「……………」

声も出なくなつたが、大丈夫かねえ。

「あ、そうだ。諏訪に侵攻してくるのはかまわないから。兵たちは俺のところに来させてもいいが、代表対代表の一騎打ちな。まあ破らないと思うが…:一対一に邪魔者が来たとき、お前らは今まで得てきた国ごと消し去る。分かったな?」

「は、はい!!」

「ならよし。一応、戦の形だけでも作つときたいからな。静かに終われば民が納得しないだろうし。じゃあな、また何時かとか」

「このこと家の空間の距離を消し、空間が開いたところでくぐって帰宅。」

「ただいまー」

「お帰りー。どうだった？」

「んあく…諏訪子はあっちの代表と一対一だ。俺は多分来るであろう軍隊と遊んでくるから」

「えっ!?!レイって戦えるの!?!」

「当たり前だろう？ 諏訪子よりは強く、酔っ払った諏訪子よりは弱い」

「……それは強いのかなあ」

首を傾げる諏訪子。たとえを分からない感じに言ったからな。

「醤油を飲ませないでくれ」

「うっ…!! 覚えてないもん………」

「子供の記憶力（笑）」

「誰が幼女だっ!?」

「そんなことは言っつてない。お前は次に『私は大人だもん!』と言う」

「私は大人だもん!………はっ!?!」

こうして諏訪子を弄りながら過ぐすこと三日目。大和の神（笑）が攻めてきた。

酔っ払いが苦手だ

「お〜お〜、結構来ましたねえ…」

「今はミシヤグジ達を向かわせて応戦してるよ」

「そうか、俺も行きますかね。代表との戦い、頑張れよ」

「勿論!!絶対勝つよ」

「これが、諏訪子の最後の言葉だった……………」

「ちよつ!!縁起でもない!!」

「うう……諏訪子……あんなに子供みたいにはしゃいでいたのに……もうあの笑顔ww
は見えないんだな」

「おい、ちよつと待て。色々言いたいけど私だって大きくなれるもん!!帰ってきたら吃驚するからね!!」

「はいはい」

「適当な!!大人な私に惚れても知らないからね!!」

「大人(笑)」

「ムキイ……………!!!」

さんざん諏訪子をからかってから、空間を戦場の少し手前に繋いだ。

大体、三万ぐらいか？よくもまあこんな集まったことだ。

「さて、やりますか」

ミシヤグジ達に下がってもらい、神力と共に【思ったことを現実にする程度の能力】を解放する。

この能力は、思ったことを何でも、本当に何でも叶う。例えばたいやき（好きだから）が欲しいと思うとたいやきが創造される。何万何億という雷を降らせたいと思えばその事象がかなう。人間だって作り出せる。故に、危ないからいつもは封印している。

「つて、あれ？」

説明を終え、目の前を見ると何も無かった。いや、穴ぼこだらけの土地以外何も無かった…と、言ったほうが正しいか。

「あれ？…なんでだ…つて、あ！」

解放した状態で説明したからか!! 一つの間にかたいやきが手に乗ってるし、なんかまぶしいなあ…とか、うるさいなあ…とか思ってたけど、あれは雷が降り注いでいたからか!!

「ま、いいや。結果オーライ」

人間のことは明確な個人のことを考えなかったから大丈夫だったのだろう。慣れれ

ば特定の思いだけが叶うようになるさ。

封印封印と。

そうして俺は神力の籠ったこれぞ天罰、といった雷でできた穴だらけな場所から去った。

「ただいまー」

「レ、レイ!!物凄い音と光がしたけど、大丈夫なの!？」

「こ、こら!アマギ様に向かつてなんて口の利き方をツ!!」

帰ったら神奈子と、諏訪子が被っていた帽子を被った俺より少し低いくらいの女性が来た。

「大丈夫だが…神奈子、これは誰？」

「は、はい。これは諏訪子ですけど……」

what?こいつがああ幼女だと？

見てみると、なんかドヤ顔していた。

「ふふくん。どう?大人になった私は!!これで幼女なんて言わせない!!」

そこまで言われたくなかったのか……。

すらりと伸びている手足。胸も十分に大きくなり、顔も大人っぽくなっている。身長は神奈子と同じくらいか？

「私だって神様なんだからこれくらい出来るよ!!」

「そうだねそうだね大人だね。すごいね諏訪子さん素敵ー」

「凄く棒読み!!!」

「戻らないのか?」

「戻ったら幼女とか言うでしょ?」

「うん」

「即答!? 絶対に戻らないもん!! 背が高い方が便利だし。レイのことも誘惑できるでしょ?」

あ、弄りすぎたせいで変な方向に育っちゃった。俺のせいで原作変わった。すまん皆………ロリキャラが一人減ってしまった!!

「そうか、まあ頑張れよ。ところで結果は?」

「あ、ごめんレイ……負けちゃった」

「そうか。お疲れ。信仰の方はどうなった?」

「えっと、神奈子にも私にも信仰が行くようにした。だから神奈子はこれからここに住むからね」

ふん、やっぱりか。というか諏訪子が大人すぎて違和感が凄い。元々美少女だったからやばいね。毎日一緒に寝てた(諏訪子が勝手に入ってくる)けど、どうにかしなきゃ

な。

「そうか。じゃあこれからよろしくな、神奈子」

「は、はい。よろしくお願ひ致します」

「敬語無し。これ命令」

「で、ですが……………」

「これから長いこと一緒に居るんだからいいじゃないか。俺は小さいことで怒るような奴じゃない。なあ？」

と、諏訪子に問いかける。

「うん。レイは凄く優しいよ？一緒に居ると安心するし、癒される!!」

え、なにそれ怖い…………。そんな自分に得が無い性質いらぬ。

何時も通り抱きついてくる諏訪子。普段は感じられない胸の感触と目の前にある髪から漂ってくるいい匂い。だけど行動は今まで通りだから…………。そういえばサキもこんなだったから大丈夫か。

「ガキ」

「何か言つた？」

「別に〜？」

「む、ていうか神奈子はなんでレイに畏まつてるのさ」

「まあまあ、どうでもいいだろう？もう家族なんだからな」
そう言つて神奈子を見る。

「そうですn……いや、そうだな。これからよろしくな、零」
「よし、よろしく」

何時までも外に居るわけにはいかないので家の中に入る。

腕輪からお神酒と俺が作つては収納していた料理を出す。湯気が出ているから熱い
ままである。

「さて、今日は双方お疲れ様ということ！飲みますか！」

「待つてました〜！」

「私もいいのか？」

「当たり前だろう？」

それぞれがコップを持つ。

「んじゃあ、乾杯！」

「乾杯!!」

——二時間後

「にやつはつはつはく!!もっひよひやけをもつてこ〜い!」

「おい零!わらひのさけがのめなひつていうのか!」

ちっ!やつかいな!!まさか神奈子もとはな!!

酔っ払い二匹はめんどくさいぜ!!三十六計逃げるに如かず!!

ダツシユで逃げようとしたところで、諏訪子(大人)に捕まった。

「離せ!いくら俺が強くとも酔っ払いは嫌だ!!」

「なんらと〜!これでもくらえ!!うむっ……………!!」

「むぐっ!?!む〜!!」

「……………あむ……………びちゃ……………んう……………」

諏訪子が口移ししやがった。舌入れて絡めてきたと思つたら酒を流し込まれた。子供状態なら冷静に対処できたのに無駄に大人になりおつて!!

くそっ!神奈子まで来た!なんで俺はこんなに追い込まれているんだ!?

「むぐぐぐぐっ……………!!」 訳・くらえ神奈子!!

べしっ!!

「あべしっ!」

デコピンで神奈子を沈めた。後はさつきから離れない諏訪子だけ……………!!

「むうう!!むぐぐぐぐっ……………!!」 訳・くそっ!!いい加減に口を離せ!!

ばっしーんツ!!

「みおぎやつ?!」

どさっ

「ぜえ……ぜえ……」

やつと離れた。このくそガキめ。

「ふう……やつと静かに飲めるぜ」

性質が悪いな、こいつら。こいつらを見てると酔わない俺に感謝だ。

絶対明日は二日酔いだな。

天城家(?)の朝

縁側で料理をつまみながら月見酒。俺は月神なので月を美しく輝かせることなぞ、造作でもない。

暫く飲んでいると、暗闇から人の気配がした。

「誰だ、出て来い。大人しくするなら殺さないでやろう」

「は、はい!すみません!!」

暗闇から出てきたのはアマテラスだった。

「どうしてここに居る?」

「あ、はい。えっと、家出?してきました」

.....は?

「今回のことでトヨウケビメとは考えが合わないと思い、愛想をつかせてでてきました」

「いいのか...?」

「はい!こっそり出てきたので大丈夫です!」

そういう問題じゃない気がする。

「後ろの二人には言わないでください。何かの拍子でバレたらいけませんから」

なんかこいつ楽しんでないか？初めてののお遣いならぬ、初めての家出？

「それで…アマギ様にお願いがありませんか…」

「なんだ？」

「はい。私をあなた様の護り神にしてくださいませんか？」

「いや、俺が神だから」

何を言っているのだろうか。

「な、なら！従者でいいですから!!」

アマテラスが必死にそう言ってくる。…なるほど、家出したから行く場所がなく
て、

「責任をとると言いました。何でも言うことを聞くと言いました。それならあなた様の
近くに居たほうがいいと思ひまして！」

と言うことか。でもこれは本気だと分かるし、俺の近くに居たいと分かる。

「私達太陽神はあなた様のものなんですよ？好きにしてくださいから！そばに居させ
てください!!」

「はあく、わかったわかった。上とか下とか関係なく親しくしよう。それでいいならい
いぞ」

「はい!!」

しかし、こいつは周りにばれたくは無いのだろうか？それなら俺の中に精神世界を作つてそこに住めるようにしておくか。

「よし、アマテラス。俺の中に精神世界を作つたから俺に触れながら入りたいでも思つてくれ」

「わ、わかりました……し、失礼します……／＼／＼」

何故か顔を赤くしながら俺にそつと触れる。すると、アマテラスは少し光つた後、消えた。

「どうだ？」

『凄いです！外の事も分かりますし、快適です！』

「出たいと思えば出られるぞ」

今度は消えたときと同じように光り、姿が現れた。

「これからよろしくお願い致します、零様」

「様無し。よろしく」

「なら零さん、と。では早速ですが、頑張りますね！」

「ん？何を……つてうわっ!!」

そのまま押し倒され、服を脱がされ……

「初めてですが、一生懸命しますから！」

襲われた。アマテラスはどうやら空回りをしているそうです。



おはよう、皆。

昨日の夜テンションがおかしかったアマテラスに襲われた零です。

初めてとか言ってたくせに物凄く激しかった。

終わったあと、ちゃんと叱っておいた。そしたら「反省はしてますけど後悔はしてません」とか言ってた。もう放っておくことにした。

ま、怖がっていないどころか懐いている？のでいいか。どうせこれから一緒に過ごして行く中でこんなこともあるだろうし。

今俺は昨日の片付けしてから朝食を作っている。

「次の旅までいろいろな我慢してくれ。俺は精神世界に入れるからいつでも会えるし」
『はい。大丈夫です』

今更だが、アマテラスの容姿は、着ている着物から零れ落ちそうなくらい豊かな胸を持ち、桜色の髪を背中まで伸ばした十人中十五人が振り返るとてもない美人だ。

オーバーしてるって？例えだよ。それくらいなんだ。あらゆるゲームや漫画を制覇

した俺があらゆるキャラの中でトップクラスだと宣言しよう。

男女関係無く何時までも見惚れているくらい。俺は大丈夫だが。

こんな奴が居るとは思わなかった。

おっと、諏訪子たちが起きてきた。

「レイ、おはよう……あ……あ……頭痛いよ」

「おはようさん。まあ、あれだけ飲めばなあ……」

「零、諏訪子、おはよう……頭痛い……どうにかしてくれ」

「自業自得さ。ほら、顔洗って来い。飯にするぞ」

「はあ……」

二人を見送ってから机に並べていく。

『ふふっ……お母さんみたいです』

「手のかかる子供だよ」

少しは大人しくして欲しいね。

お、戻ってきたか。

「じゃ、食べますか」

「うん」

「いただきます」

三人で挨拶してから食べ始める。うん、今日もいい出来だな。サケの焼き加減がパーフェクト。

「うーん、相変わらず美味しいね」

「……なんだこれは！ 凄く美味しいじゃないか！ って、痛たた……」

神奈子が頭を押さえて顔をしかめた。

「大声だすからだ」

「うう……そうだな」

やれやれ、こいつもか。

「レイ、あーん」

「ん？ なにしてるんだ？ 諏訪子」

「なにつて……あーん」

振り向くと諏訪子が玉子焼きを箸で口元に差し出していた。食べるけど。

「むぐ」

「美味しい？」

「ごくつ……そりゃあ、俺が作ったからな。当たり前だ」

「そういう意味じゃないのに」

なんかふてくされた。意味が分からん。

「ていうか、元の姿に戻らないのか？」

諏訪子は未だに大人バージョンのまま。そろそろ戻ってくれないと諏訪子好きの読者の方々に怒られる。

「幼女言わない？」

「言わない言わない」

「ん、じゃあ、はい」

ポンツ、という音を立てて小さな諏訪子になった。

それを見て俺は、

「幼女(笑)」

笑ってやった。

「あゝ！嘘つき!!やっぱり言ったじゃん!!やっぱり戻らない!!どっちも私だし！」

ポンツ、とまた大きくなった。

いかんいかん、小さい諏訪子を見るとからかいたくなってしまう。

俺が旅に出れば戻るでしょう、きつと。

「なあ、零。何時もこんな感じなのか？」

神奈子がサケをつつきながら聞き、俺は諏訪子(大人)にあくんされながら答えた。

「もぐつ……そうだが、騒がしいか？嫌なら静かにさせるが」

「それって私のこと？」

「そうだ。大きくなっても中身は子供じゃないか」

「むっ！体は立派になったからそれはからかわれないもん！」

「ほんとにな。体だけは立派に育ちやがって」

「ふふん…ほれほれ、柔らかいでしょ？」

「やめんか、痴女が」

「言うに事欠いてそれ!?あんまりだよ！」

「大人（笑）」

「またか!!またこれか!!」

「大人www」

「ムキイーーーーー!!!」

こいつは変わらないなあ。だから安心するんだけどな。

「クククツ」

「ん？」

なんか神奈子に笑われていた。

「どうした？」

「そうだよ。笑うならレイを笑ってやりなよ!!」

「諏訪子の馬鹿めー」

「棒読みムカつく!!」

「あははっ」

また笑われた。なんなんだ。

「いや、悪い悪い…ククツ…こんなに楽しい朝は初めてでな」

ん…まあ、あそこは楽しみが無さそうだしな。

「よく分からないけど、毎日がこの調子だぞ?」

「そうか、楽しみだな」

そう言つて神奈子はにっこり笑つた。

『こんな笑顔の神奈子は初めて見ました』

そうなのか?

『はい。本当に楽しそうです。零さんたちのおかげですね』

そうか……

「何時も通りなんだけどな……」

「ん?なんか言つた?レイ」

「いや、そろそろ諏訪子に酒飲ませるのはやめようと思つてな」

「えっ!?!な、なんで!?!」

「昨日俺にしたことを思い出せ」

「……………覚えてない」

「じゃあだめだな」

「えく!!レイの意地悪っ!鬼!悪魔!ドS!変態!」

「なんだと!?!変態はお前だ!毎晩のように一緒に寝ているが、お前先月の夜なにしてた?」

「えっ?!いいいや、なにもく?」

「嘘つけ。俺もお前も裸だったんだが?濡れてたし」

「びふく、びふく……………」

明後日の方向を向き、下手糞な口笛を吹いている。

このやろう……………知らない間に襲われてるとか最悪だろうが。

「いいか?この小説はそういう要素はいりません。いくら変態だからといっても容易にそのような行為を主人公にするのは止めてください」

「え……………レイ、何言ってるの……………」

『またメタな発言を…………』

「分からないならいいが、頭の隅においておけ」

「う、うん……………」

「やれやれ、これなら楽しく暮らせそうだよ」

最後にポツリと神奈子が呟いた。

「しかし…そういつた行為はありなのか」

ねえよ。あっても書かないよ、書かせないよ。

旅仲間ゲツトだぜ

こういった日常が数百年は続いた。

えっ？端折りすぎ？いや、別に聞きたく無いでしょ、俺のザ・日常生活譚なんてさ。

しいて言えば、アマテラスはばれていなくて神奈子があのもやり取りに入ってきたことくらいかな？

出て行くときなんかは、諏訪子（大人）が大泣きして神奈子が抱きついたまま離してくれなかった。条件付でやつと解放してもらえたけど。

その条件は定期的に帰ってくること。ま、あそこは俺の実家と言っていいから帰るさ。

ちなみに俺は今森の中。

「どっだ？ハハハは」

迷っちゃった。

『どっでしよっつ？』

しようがない、うろつきますかねえ……。

と言っても、木以外は何も無いがな。あと妖怪が襲ってくるくらいだ。

昼寝しているときに襲ってきたやつには、体にナイフが刺さるのは限界何本？という実験を笑いながらしていたらしい。らしい、というのは俺が寝ぼけていたからであり、アマテラスが止めるまでしていたからだ。

それを機に「落とし穴を作る程度の能力」を作って、野外で寝るときは周りに落とし穴を作って寝ている。深さ、大きさを決めれるので便利。飛んで出れないように落ちたらずぐに格子状の蓋ができるようにもしておいた。あらゆる落とし穴を作れるからな。「飽きた。もう夜だから寝てしまおう」

そうして木の下で寝転がり、落とし穴を周りに作り出す。一々起きたくないもん。

「おやすみ〜」

『おやすみなさい、零さん』

アマテラスの声を最後に、意識を闇に落とした。

——ズドオンツ！ ガシヤンツ！——

あ、誰かが落ちたな。



翌朝、朝日が眩しくなってきたから起きる。

「ふあく……さて、落ちた獲物は何かねえ」

『あ、おはようございます、零さん』

「ん、おはよう」

アマテラスも起きていたらしい。床が固いから体が少し痛い。

体を伸ばすとポキポキと骨が鳴る。頭を掻きながら落とし穴を覗くと、

「うう……ぐすつ……」

「………何やってんだ？」

穴の底でEXルーミアが膝を抱えて泣いていた。

俺の声を聞き、ルーミアが上を向いた。…なんか体中が土まみれなんだけど。

多分、出ようとしたら格子があつたからそのまま激突して再び落ちた時に汚れたのだろう。

「……あなたがこの穴を作った張本人かしら？」

「そうだけど？俺の近くにあるからな。何か用か？」

「あなたを食べようとしたら落ちたのよ……。出してくれない？」

「出したら襲ってくるだろう？」

「勿論よ」

即答か。馬鹿じゃないの？

「なら断る。相手するのがめんどくさい。じゃあな」

顔を上げて落とし穴をから去ろうとする。飢え死にでもしてろ。

『いいのですか？』

「いいのいいの。めんどくさいのは嫌だろう？」

『それもそうですね』

結構アマテラスも俺に毒されてきているよな。考えが似てきた。

「ま、待つて！待ちなさい！」

後ろから声が聞こえるが無視。命令とか何様だ。

「待つて！……もう、待つてください！お願いします！」

……仕方ない。原作キャラだしな。

渋々落とし穴までもどつて穴を覗く。

「何か用かね？」

「何でもするからここから出して！」

「……………」

「出してください！お願いします！」

「……はあ、襲うなよ？」

「ええ」

「あと、人間を食うな」

「……………分かったわ」

「これでも一応神様だからな。目の前で罪もない関係のない人が食われるのは見過ごせない。死ぬなら俺の居ない所で死ぬ。」

『零さん…それもどうかと……』

まあまあ。

「ほら、出てこい引きこもり」

格子を無くして出口を作る。この格子は所謂「幻想殺し」みたいな感じだから異能の類は聞かないからどうしようもないのである。耐久も半端ないしな。

「あなたが引きこもらせたのでしように……ふう、外が久しぶりに思えるわ」

「引きこもり（笑）」

「もう違うわよ!!」

「そーなのかー」

「（イラッ）」

ルーミアのネタでかえしてやった。本人は知らないだろうが。お前もいずれ自分で

言うようになるさ。

「まあ落ち着け。そしてさっさと何処かへ行け」

「あら？何もしなくていいの？人間を食べるかもしれないわよ？」

「そうだったらその程度の奴だということだ。そんな奴に何か言うつもりは無い」

「……………いいわ。それならあなたの近くにいて食べないことを証明するわ」

「いやいいです。邪魔なんで」

「はっ!？」

ルーミア無視してスタスタ歩く。自由気ままに動きたいのに、ルーミアがいたら一人旅が出来なくなる。アマテラスはいるけど。

「ま、待ちなさいよ！そんな馬鹿にされて私のプライドが許さない！」

「俺が許そう」

「意味わかんないから！無理やりにも着いていくから！」

そうしてルーミアが隣に来た。結局旅仲間が増えるのだった。

「ていうか、いいのか？人喰い妖怪だから人食べなくなったら消滅するんじゃないや……」

「うっ!？」

……………今更気づいたのか。でも食べない宣言したばかりだからな。

「はあ……………しようがない、俺の式になるか？」

「……………え？」

「俺の式になれば食べなくて済む。それ程に力が増すからな」

「……………分かったわ。お願い」

「あいよ。ついでに襲ってくる馬鹿（妖怪）共を始末してくれ」

「了解よ。御主人様？」

諏訪子のところにいた時に知り合った陰陽師に貰った札だ。適当にルーミアの体にペイっと貼り付ける。

「適当ね……………」

「気にスンナ。俺は天城零な」

「私はルーミアよ。よろしくお願いするわ、御主人様？」

クスクスと笑うルーミア。手綱を握られて喜ぶとか、マゾか。

「マゾじゃないわよ」

「読心術？」

「声に出てたわよ」

「さいですか」

それからは歩きながら食べられるようにおにぎりや腕輪から出して食べながらぶらつく。ルーミアにもあげた。初めて俺の作ったものを食べたときの人が必ずする反応

をしたよ。ごちそうさま。

「けれど……物凄く力が増えてるわ……大妖怪なんて軽く超えてるわね」

「ま、俺ですから」

最強の神だからな。そんな奴の力が行くんだろう？そりゃあ、やばいつて。負けなしになるぜ。

「御主人様に戦いを挑まなくてよかったわ」

「……なあ、その御主人様っていうの止めないか？」

なんかむず痒いんだが……。様付けは普通にあつたが。

「いいじゃない。私が零様って言うの……何か変じゃない？」

「んんんん……」

確かに、こいつには合わないような。

「なら呼び捨てでいいだろうに」

「それは主従関係にならないじゃない」

「え〜」

ああ言えばこういう……俺みたいだな。

『自覚あつたんですね』

まあな。諏訪子とのやり取りで見つけたんだよ。

もうめんどくさいから呼び方など放っておくことにした。取りあえずこのでかい山から抜ける。

そろそろ麓だ、と思ったとき……………

「その人間、止まれ!!」

鴉…じゃない、天狗がやってきた。団体で。

「…なんなんだよ」

「天狗ね。ここは縄張りだったのね」

上を見上げるルーミアを見て、俺もつられて見上げる。

「なんか多くないか……………」

ひい、ふう、みい……………大体二十くらいか？

そのうちの一人が目の前に降りてきた。

「なんだ？トイレなら向こうだぞ」

そう言つて一本の木の下の根元を指差す。

「貴様ア……………!!」

「おいおい、あまり怒るな。素敵な鳥顔が台無しだぞ？」

「クスツ……………」

隣でルーミアが笑っている。目の前の鴉は顔をクシャクシャにしているが。

「頭から湯気が出てるぞ。今なら頭で湯が沸かせるんじゃないか？ 焼き鳥に……いや、茹で鳥？ になるぞ〜」

もわもわ〜。あ、刀抜いた。

「殺せツツ!!!」

この一声で鴉どもが突っ込んできた。ルーミアを見て戦力の差が分からないのか？

「やれやれ……ルーミアよろしく」

「クスクス……もう、しょうがないわね」

笑うのを止めて、ルーミアは背中中の黒剣を手に取り鴉を一振りで大量に吹き飛ばす。

「おお〜、凄い凄い」

力が増したからか顔が生き生きしてる気がする。あと、俺の背後に誰か居る気がする。敵意は無いが。

放つて置いたら、いきなり背中から羽交い絞めをされて体が宙を舞う。

どうやら拉致られたらしい。

「今のうちに貴方を天魔様の下へ連行させて貰います」

「あくれ〜た〜す〜け〜て〜」

『完璧に遊んでますね……』

いいじゃないか。木以外のものが見えるんだぞ？

『それもそうですけど……』

「ちよつと、御主人様!？」

「そいつら片付けたらルーミアもゆつくり来いよ〜」

俺を見て驚くルーミアを最後に、空を飛んでいった。

「ていうか、誰？」

「射命丸文と言います。どう見てもお二人には勝てないと見たので戦う事は止めました」

お〜文じゃないか。少し幼いけど。敬語だし。

「特にあの妖怪はおかしいですよ。大妖怪以上の強さなんて」

「だろう?ま、それより安全運転で頼む」

「勿論です」

「あと、胸が押し付けられてるぞ」

結構大きいのな。

「ノーコメントで……／＼／＼」

チラツと振り向くと、顔を真っ赤にしていた。案外初心だねえ。

お茶日和

「着きましたよ」

「ご苦労さん」

あれから少しして、大きな屋敷の庭に丁寧に降ろされた。飛んでいる間に少し話していたら結構文との仲が良くなった。友達レベルで。

庭は綺麗に整っており、屋敷の縁側には一人の女性が腰掛けてお茶を飲んでいた。

「あら？文、そちらの人間は？」

「山の麓に居た人間です、天魔様」

どうやら天魔らしい。文はそのまま俺のことを詳しく説明するために天魔に近づいて行った。俺も付いて行くがな！

天魔とやらは、見た目二十歳位の黒髪を腰まで長く伸ばしたスタイルのいい美女だった。あと、他の天狗とは違い妖力が桁違いにある。

話し合ってる二人の横を何気なく通り過ぎ、天魔の横に座る。

『どうしたんですか？零さん』

いや、喉が渴いたなあと思つてさ。お茶を貰いにね。

『いいですねえ……』

アマテラスも出れば？こいつらなら大丈夫じゃない？後はルーミアだけだし。

『それもそうですね。出ます』

すると、俺の体からアマテラスが出てきた。

「ふう、久しぶりですう」

気の抜けた声を出して伸びをした。でも止めなさい。着物から胸が零れ落ちます。

急須の横には天魔が使っていた湯飲みしかないの俺はそれを使い、アマテラスには収納の腕輪から出した湯飲みを使っもらう。

お茶を入れ、腕輪から更に出したお茶請けの俺が作った饅頭と共にお茶をアマテラスに渡す。

「ありがとうございます。これ、零さんが作っていたお菓子ですか？」

「おう、多分美味しいはず」

「絶対ですよ。もぐもぐ……はふう、美味しいです」

「それは何よりだ」

俺も饅頭を食べ、お茶を飲む。うむ、美味しい。

天気もいいし、最高のお茶日和だねえ……。

暫く二人で寄り添いながらお茶を飲んでいると、三つの視線を感じた。そちらに振り

向くと、

「あのく、何してるんですか？」

「隣の方は一体……？」

「御主人様……心配してたのに何してるのよ」

天魔と文とルーミアがいた。

「ん？ルーミア来たのか。お疲れ様、はいお茶」

新しくお茶のセットを出してルーミアに渡す。

「ありがとう……それより隣の物凄い美人な人は誰かしら？」

アマテラスか。そういえばまだ紹介してなかったな。

「アマテラス」

「はい。私は天照大神と言います。零さんの……んく、ルーミアさんみたいな感じでしよ

うか？よろしくお願い致します」

「「……………」」

アマテラスが挨拶したら三人が顔をほんのり赤く染めて惚けた。ていうか、女までいくのか。

どうせ声と笑顔にやられたのだろう。

「おい、起きろ」

「「はっ?!」」

ルーミアまでとはな。起きた三人は口々に騒ぎ出す。

「綺麗な人ですねぇ…」

「とうか天照大神?」

「神様じゃないの?」

……

「「えっ?!天照大神様?!」」

もうなんなんだよ。うるさい。

「アマテラス、説明して来い。俺は寝てるから」

「わかりました。膝枕でもしますね。そのまま話をしますから」

「じゃ、お言葉に甘えて」

全てをアマテラスに任せて俺は頭をアマテラスの太ももに乗せる。やばい、かなり心地いいんだけど。今度からしてもらおうかな。



sideアマテラス

寝ちやいました。零さんの寝顔は最高に可愛いです♪

私そのまま零さんの頭を撫でながら皆さんに向かいます。

「では改めまして。私は天照大神です。アマテラスとでも呼んでください」

「天照大神つて、あの神様のかしら？」

ルーミアさんが恐る恐るといった感じで聞いてきました。

「はい。私とはある理由で零さんのお側にいることになりました。かなり昔から一緒にいますね。普段は他の神々にばれない様に零さんの精神世界で暮らしています。零さんがそうできるようにしてくださいました」

零さんの精神世界は凄く落ち着くんですよねえ…間近で零さんを感じていることができますし。

「へえ…そうなの。なら、これからは一緒に居ることが多くなるのだから気楽にいかせて貰うわ」

「はい、そうしてもらえると嬉しいです。そちらのお二人もお願いしますね」

「は、はい！」

そんなに緊張しなくてもいいのですが……。でも、私が零さんに始めてあつた時もこんな感じでしたから大丈夫でしょう。

「文さんが零さんがここに居た理由を話してくれましたよね？」

「は、はい。天魔様に零さんが敵意も無く迷い込んだだけだとお伝えしました。零さんに教えてもらいましたから」

そういうえば、ここに来る途中に言っていましたね。あの短時間でもう仲良くなるなんて…さすがです。

「そのことでしたら、貴女方を客人としておきます。これで他の人たちも手を出さないでしょう」

「ありがとうございます、天魔さん。……それから、ルーミアさんはなにしているのですか？」

「え？何って、御主人様の顔を突いているのよ」

そう、ルーミアさんは零さんのほつぺたをぶにぶにしています。少しうなされているのがさらに可愛いです！あ！ルーミアさんの人差し指が食べられた！

「きやつ！……寝ぼけてるのかしら？」

「寝ている姿は癒されますね……」

「こちらに来るまで話をしてましたけど、中々面白い方でした」
「寝ている顔は普段とは違うのね……」

ほう!!皆さんも気づきましたか！これで零さんの虜ですね！

「でしょう!! 普段の格好いいお顔とは違い、寝顔はどこかあどけない! 偶にする仕草がまたいいんですよ! これがギャップ萌えってものですね!」

「ほうほう」

「零さんが寝た後にこっさり出てきてお顔を見ているのが私の密かな楽しみです。教えてあげましょう……零さんの魅力と今までの物語をツ!!」

「(ゴクツ……)」

そうして私達四人は零さんの寝顔を見ながらおしゃべりをし、打ち解けました。

side out

シユワちゃん（笑）

そろそろお腹が減ってきたので起きると、何故か皆の態度が変わり好意的になっていた。

アマテラスに聞くと、「皆さんが零さんを好きになったんですよ。LikeじゃなくてLoveの方です」なんてことを言っていた。

お前はなにを話したんだ、と聞き直すと「零さんの魅力を語りつくしました！」……なにそれこわい。

文はともかく、天魔なんて録に話してないのにかなり接してくるんだが……まあいや、考えてもどうにもならん。それよりも腹減ったー。

「なあ天魔、台所借りるぞ。ついでにお前ら二人の分も作るがいるか？」

「あ、お願いしてもいいですか!? アマテラスさんのお話を聞く限り、零さんの作られる料理はこの世の真理が見えるほどの美味しさらしいので!!」

「どんな美味しさだ！ アマテラスも変な風に話すな！」

「すみません。でも本当のことですからね」

ダメだこれは……。まあ確かに永琳もそんなこと言っていたいな。

ていうかどうでもいいけど、天魔って、言いにくくないか？

「ということで、天魔…お前の名前は？」

「な、何がということなんでしょうか？ え？名前…ですか？……ありません。天魔
としか言われてませんから」

やつぱり無いのか。面倒な奴だな。

「零さん、名前付けてあげたらどうでしょうか？」

「お、奇遇だな。俺もそうしようかと思った所だ。だから名前付けるぞ、拒否権はない」
しかし、名前かあ……なににするかな。

「きよ、拒否何てしません!!ぜひお願いします！」

言質も取ったし…ポチ?タマ?……これは犬猫か。

さすがに顔を赤くして目をキラキラさせてこつちを見てるやつにそんな名前は不味
いか……。

良いと思ったんだけどなあ……アー○ルド・シュワルツェ○ツガー。略称はシュワ
ちゃん。

「零さん……さすがにそれは……女ですよ」

「………一体どんな名前を考えていたんですか」

さすがアマテラス、以心伝心だな。声に出していないのに考えが分かるなんて。でも

シユワちゃんとか、強そうじゃないか？

「そうだな、これはさすがになあ……天魔はこんなに美人で可愛いのに」

「ふえっ!!? な、なにをいって……／＼／＼」

「むー………」

そんなに睨むな、文とルーミアよ。

「よし、これからお前は『暮羽くれば』な。決定！」

理由は何となくだ！

「暮羽……暮羽ですか……えへへ／＼……ありがとうございます、零さん!!これから私は暮羽ですから!!」

「はいはい、よかったね。俺はこれから夕食作ってくるからな、『暮羽』」

顔を真っ赤に涙目でぐいぐい迫ってくる暮羽の頭をポンツと一撫でしてから台所に向かう。

「「むー………」」

おいおい、アマテラスまで加わったのか。お前も名前付けるとか言ったじゃないか。

何故か不貞腐れているアマテラスとルーミアと文、それと物凄く幸せオーラを出している暮羽……あの部屋はカオスだ。

しかし、何を作ろうか。俺の気分的にはハンバーグだな。チーズinハンバーグ、これ最高。

だが材料が無い……だからどうしたというのかね！

俺のは便利かつ最強の能力があるじゃないか！【思ったことが現実になる程度の能力】がな！

封印を今解き放つ……こんな時に使わなくて何時使う？

———今でしょッ!!!

さあ、すべての材料を創造し………完成！チーズinハンバーグ！

ハンバーグ自体を創造すればよくね？……とかは言いつこ無しだ！作って食べるのがいいんじゃないか！

「みんなく、できたぞ〜」

がやがやと集まってくる美女美少女たち。傍から見ると物凄い豪華メンバーだな。アマテラス曰く、俺はそれを独り占めしているらしいが。お前が全世界でトップクラスの容姿だけだな。

「んじゃ、食うか〜。いただきます」

「いただきます！」

一口サイズに切り、もきゅもきゅと頬張る。……うん、溢れ出る肉汁とチーズが奏で

るハーモニーが堪らない！

「うん、良い出来だ」

「相変わらず物凄く美味しいです」

アマテラスもご機嫌だな。飯を食う時だけはふざけたり出来ないよなあ…諏訪子は別だが。あいつは弄ってなんぼでしょうに。今頃あーうー言ってるさ。

「どうした？三人とも」

三人が口を押さえて震えていた。

「あ、口に合わなかったのか？」

おかしいなあ…ルーミアは一回食べたことがあるはずなのに。

やっぱり妖怪らしく人間の肉のほうがいいのだろうか……。

すると、三人はいきなり顔を上げて叫んできた。

「「そんなことないです／わッッ!!!!」」

「お、おう……」

怖いんだけど……。しかし何回も見たことあるぞ、神界に居たころにあつた女の神々だ。初めて食べたときはこんな感じだったから。

「こんな物は食べたことはありません……」

「この世の真理が見えました……」

「おにぎりであれだったから相当覚悟してたのに……それよりなにより……」

三人はorz状態になり一言だけ呟いた。

「女として負けた………」

そこまでシヨックかなあ？家事全般は完璧です、とか言ったらやばそうだな。

「家事全般は完璧だ」

「グフツ………!!」

「さすがです、零さん。追い討ちをかけるなんて……」

いい反応だ。

俺は落ち込んでいて尚且つキラキラしながら食べる三人を見ながらお茶を飲んでい
た。

あ、ちなみにもう食べ終わった。三人が死んでいる間にな。

やっぱ温泉でしよ

食後は山に俺が温泉を見つけ出し、掘り出してやった。能力を使い一瞬で設備を整え、男湯と女湯に分けた。

露天風呂だから満点の星空を見ながら浸かっていられる。大きさはかなり広いしな。

「ふい〜…いい湯だな〜」

「ホントだぜ。疲れが吹き飛ぶな」

既に色んな天狗どもが入ってきている。周りはガヤガヤ騒がしいが、これもまた一興だろう。

「人間だつてのに妖怪を物ともしないとはな」

「ああ、しかもこんな温泉なんか作ってくれたしよ」

「ありがてえ……この兄ちゃんに感謝だ!!乾杯ッ!!」

「!!!乾杯ッ!!!」

酒を持ち込んでいる。皆が杯を掲げて叫ぶ。賑やかだなあ……。

こいつ等を誘ったことで俺はすっかり歓迎されて仲間状態。襲われないだけいいか。宴会みたいなのは大好きだしな。

「ほら！兄ちゃんも飲めよ!!」

「ん…おつとと、ありがとよ」

酒を杯に注がれ、零れそうになったところを一気に煽る。

ふう、美味い。しかし、天狗の羽は案外抜けないもんなんだな…風呂場に羽が全然落ちていない。

酒を飲みながら周りの声に耳を傾ける。

「しかし疲れたな〜」

「だなく。近頃は人間が………」

なんかや、

「おい、誰がいい？」

「やっぱり天魔様だな！」

「いやいや、射命丸なんかも良い女だぞ」

「「なるほど」」

こんな話が多いな。恋せよ若者…爺は見守っているぞよ。

しかし、やっぱり天魔…いや、暮羽も文も男の天狗からは人気なんだな。確かに美人だしなく。それと、文はまだ若いんだな。偉くなるのは何時ごろかな？

「文〜！そつちはどうだ〜？」

隣は女湯だからな。よくある竹で作られた壁越しに話しかける。

一応、天狗どもには飛ばないように言つてあるが。

飛んで覗こうとしたら二度と入れないようにする、と規則を決めた。

『快適です！ただ、少し血だらけですが……』

ああ、アマテラスのせいか……。他の女天狗達のせいだな。

「おい！兄ちゃん、射命丸の奴と仲いいのか!？」

こいつ……文狙いの奴か。

「まあ、それなりにな。結構話すほうだな……ま、今日会つたばかりだがな」

「「「なあにいく!!」」」

うるせえ……

「そういえば天魔様とも仲良さそうに話していたな!」

「天魔様が嬉しそうに話していた……」

「「「お、男の敵めくく!!!」」」

鬼気迫る勢いで来た。むき苦しいから来るな。

「うるさいぞ。それよりも……いいのか?」

「なにがだ……?」

俺が質問するように言うと、天狗共は不思議そうな顔をしだした。

「だから、覗かなくていいのわ？」

「だ、だが飛ぶなど……」

「だから飛ばなければいいだろう？」

「「「「ツツ」」」」

そんな、その手があつたか!! みたいな顔せんでも……

「覗き穴を見つけるなり、物を重ねて上つて覗くなり……いろいろあるだろう？」

この一言で男達は動き出した。桶を積み重ねたり、穴探しをしたり……せいぜい楽しい。

杯に酒を注ぎ、一息に飲んで夜空を見上げる。空には宝石の如く輝く星達に大きな満月が昇っている。

月を見上げ、馬鹿三人と……永琳を思う。三人には無理させたし、永琳は無理やり行かせたし……怒ってるんじゃないだろうか。

「皆元気がねえ……」

そろそろだろうか？三……二……一……

「「「「きやあああああああツツ」」」」

「「「「ぐふあああああああツツ」」」」

ほらな？男共が後ろから飛んできてド！ポンドボンと温泉に落ちていく。

俺がわざと穴を作ったからだ。こちらから見やすく、しかし女湯からは即発見出来るように。

「あくあ……壁が……」

男共は一人残らず気絶し、壁は大きく壊れて向こう側が見える。合法的な覗きですな。

「よう、暮羽に文にルーミアにアマテラス……それと女天狗の皆さん」

「「「「「きゃっ!!」」」」」

暮羽や文とかは急いでタオルで隠したり、温泉に浸かったりして体を隠す。ちなみに俺も温泉に浸かっているので見えない。

だが……

「アマテラスは分かるが……なぜルーミアも恥ずかしい気も無く晒している?」

そう、ルーミアは隠していないのだ。アマテラスはそういう関係なのでいいが。

長い金髪はお湯に濡れて肌に張り付き、白い肌はほんのり朱に染まって妖艶さがさらに増している。

胸は大きく腰は折れそうなほど細いしスラッと長く形の整った足は、温泉に浸けて岩に座っていた。

「いいじゃない。別に見せて恥ずかしい身体はしてないわ。どう?御主人様?」

そう言つてルーミアは俺に見せ付けるようにしてくる。

「確かにな。いい身体はしてるぜ？誇つていいさ」

「そ、そう？ありがとう……／＼／＼」

……お前から聞いたいてなぜ恥ずかしがるし。

「それより、そろそろ浸かれ。冷えるから」

「…そうね。そうするわ」

ルーミアはお湯に浸かり、気の抜けた顔になる。

「相変わらずお母さんしてますね」

「うるさいぞ、アマテラス。お前も浸かれ」

「はい。わかりました」

アマテラスはくすくす笑いながら入った。というか、俺つてそんなにお母さんしてるか？そんなことは無いんだが。

改めて酒を注ぎ、飲みなおす。そろそろ湯あたりしそうなので気絶している天狗だけは脱衣所に転移させておいた。

俺は元々長湯派なのでまだまだ問題ない。

「ん〜、いい湯だねえ〜」

もたれていた岩に身体を預け、顎を置く。目の前は女性陣が見えるが気にしない。

「くあ〜〜……」

平和だ：大きなあくびが漏れる。だけど何故だろうか：警戒していたような天狗たちやアマテラスたちがこちらを見てふにやつとしたような、可愛いものを見て和むような顔を一齐にした。

頭をこてんと傾けどうかしたのか？と聞くと、さらに顔を蕩けさせた。

「……そろそろ上がるか」

なんか身の危険を感じたし。顎を岩から離して上半身を起こす。

「壁は直しておく。ごゆっくり」

一瞬だけ能力を解放して壁を元通りにする。転移させたりしたのもこうしたからだ。

『あ〜〜〜！！！！』

なんか残念そうな叫びが聞こえるが、無視して上がる。

脱衣所にはまだ男達が寝ていた。そいつらを踏みつけながら着替えて、俺に宛がわれた大きな和室に入って、湯冷めしないうちに布団に入って寝た。

風呂での一件で女天狗の皆からの零に対する好感度が上がったのは言うまでも無い。

黒猫のなく頃に

翌朝、いつもはアマテラスに起こしてもらおうが昨日は早めに寝たので早く起きた。

ちなみにアマテラスとルーミア、暮羽と文が俺の布団に入り込んでいた。仲のいい奴らだな。俺のそこじやなくてもいいんじゃないか？

寝間着の浴衣からいつもの黒ワイシャツとズボンに着替える。

そのまま台所へ出向き、朝食を作る。この屋敷には今は俺達しか居ないので五人分だな。

「ふあ〜……いい朝だ。しかし、山なのになぜ魚が……あ、川か」

立派な鮭を。パパツと調理し、焼いている間に米を炊く。お浸しにできそうな野菜をゴマで和え、山菜で味噌汁を作る。鮭が焼けたので皿に料理全てを盛り付け、最後に大根おろしを鮭の隣に付け加えたら完成だ。

「よし、後は皆が……っと、起きてきたか」

匂いに釣られてか、四人とも起きてきた。暮羽は眠そうに、文とアマテラスはしっかりとっているが、ルーミアは寝てないか？ あれは。

「おはようございます」

「おはよう……ごきい、ます…」

「zzz……」

「おはよう、朝ご飯出来てるから食べていいぞ」

「ありがとうごきいます」

「暮羽はこつちに来い」

「…何でしょうか？」

ふらふらと暮羽が近寄ってきたので気になっていたことを言う。

「浴衣が大変な事になってるぞ。しっかりしろ」

そう言つて暮羽のギリギリまではだけた浴衣を整えてやる。

「ふえっ……!!／＼／」

真つ赤になり、漸く自分がされたことに気づいたらしい。

「おく、目が覚めたらしいな。朝ご飯はそこだ。二人が既に食べているから一緒に食べ

よ」

「は、はい！ありがとうごきいます！」

一人終わり。あとは……

「zzz……」

「こいつだけか…」

現在進行形で俺に抱き付きながら寝ているルーミアだけだ。

普段の大人びた言動や妖艶さを醸し出す雰囲気は全くない。なんだろう……俺と二人きりの時の永琳と誰かがいる時の永琳位違う。

「さっさと起きて貰わないと冷めてしまう」

とりあえず引つ張つても離れないので腹の方に移動させる。…寝顔は可愛いんだな。

「つたく、ほら起きろ。朝だぞ」

「zzz……」

「……起きたら、そうだな…食べさせてやろう」

「(バツ!) おはよう御主人様? 早速お願いするわ?」(・ω・) キリッ

「……何て奴だ」

瞬時に起き上がり、無駄にキリッとした顔でお願いをし席に既に着いている。

ん、しかしいつもの黒い服じゃなくて浴衣姿も似合ってるな。

「俺も食べながらだからな?」

「ええ」

「まったく、どいつもこいつもガキか……ほら、あくん」

「あくん……」

箸で大根おろしと醤油を付けた鮭を摘み、目を瞑りながら小さく口を開けたルーミア

に食べさせる。

「「あゝゝゝ!!!?」

「はむっ……普通に見えるのに味は格別に美味しいわね……どうなってるのよ」

「俺だから」

「こちらを見てなぜか叫ぶ他三人。さらにそれを横目で見て微笑むルーミア。またまたそれを見て悔しがる三人。

……なんだろう、俺には分からないがこいつ等は目ですべてを語り合っていた。

「馬鹿やってないでさっさと食べ。ほら」

「あゝん」

「「またッ!!」」

こうして騒がしくも賑やかな朝の時間が過ぎていく。

朝食を済ませると、俺は天狗の里を歩き回り山を探索した。

里では妙に天狗（女）から話しかけられるし、川では河童にもであった。後は釣り。

川が綺麗なため、魚は大きく沢山いたため大量である。

そんなことを三十年位して過ごしていた。

年が立つとやることもなくなってきたので俺は……『文観察、密着24時!』 企画
を実行した。

なに、やることは簡単：俺は目の前にいても全く分からないほどに気配を、姿を完璧
に消せるので消して、文に一日中くっついていられるだけ。

仕事時も休憩時も：お風呂の時もトイレの時もだ。変態でもないしストーカーでも
ない。盗撮でもないぞ？堂々と目の前でカメラを構えて撮っているからな！

こうしてカメラとメモ帳を片手に人間観察ならぬ文観察を始めた。

案外楽しいものだ。文はドンマイだが。

「14時25分…文が仕事をサボる、と。激写！」

カシャツ！つと、カメラに証拠を収める。なんだこれ！楽しいな！人の知られたくな
いことをこっそり知るなんて！

——二日目——

文は寝相が悪いらしい。夜中何回も涎を垂らしながら大の字で寝ていた。ちなみに
俺は寝なくても全然大丈夫。下手すれば数年単位で我慢できる。

「10時…同僚の天狗に告られるが、好きな人が居るからと断る、と」

へく、文にも好きな人居たんだ。意外だ。

あ、俺は文が一人になるときは観察しているが、一緒に皆で飯を食ったり談笑したりするときは居るから怪しまれてないということを書いておく。

「13時11分…ほかの天狗と模擬戦を始める、と」

ふむふむ…天狗の中では頭一つ飛びぬけて強いと。でもまだまだだな、俺に氣づいていないし。

まあ、一生無理だろうが。

「21時30分…一人で風呂に入る、と。んく激写☆しときますかね〜」

裸姿の文を数枚取めておく。何時かの未来とかに何かに使えるだろう。脅しとか。

「しかし一人風呂とか、悲しっ」

——三日目——

今日は文とアマテラスとルーミアと暮羽で夜まで一緒にいたので観察は夜から。

「20時…トイレ、と。…なんか俺やばい人だな。止めないけど」

でも目の前で意気込むのは止めて欲しいんだ。

「21時45分…刀の手入れ、と」

これは毎日しているな。中々の業物なのだろう。

「23時21分……とうとう来たか……文が自慰行為をする、と」

この子も年頃の娘さん。こういつたことの一つや二つ、するでしょう。

目の前で布団の上で荒い息遣いで自分の胸や秘所を触っている。小さな水音を出し、布団を濡らす。

そろそろ文のためにも後ろを向いて耳を塞いでおこう。匂いだけはどうにもならないが。零さん、とか聞こえたのは気のせいだ。気のせい。

——四日目——

自分の下着と布団を始末した文は朝の鍛錬に向かった。その間に俺は朝ご飯を作っておく。

一通りの事が過ぎ、再び文の観察を始める。

「9時52分……猫に近寄り顔を盛大に引っかかれる、と」

勿論激写☆

ちなみにその猫は黒猫で今現在俺の肩の上に居る。撫でたら懐いた。

「にゃあー」

「そうだな、あの傷は妖怪だろうと中々消えないだろう」

涙目で顔の傷を撫でている文を見ながら黒猫と話す。

夜、飯を食うときに文は顔に包帯をぐるぐる巻きにしてきた。

「ふむふむ、18時30分…傷を包帯で隠す、と。激写な」

こつそり馬鹿面を大量に撮りまくる。

「あ、文…貴女その顔はどうしたのです?」

「気にしないでください、天魔様。些細な事です」

確かに傍から見ていれば些細な事…むしろ馬鹿な事だよな。

「じゃあ!」

と、文を見て黒猫が一鳴きした。

「ツ!」

「ん?文、どうしたんだ?」

「い、いえ…零さん、その黒猫どうしたんですか?」

「ああ、なんか懐かれた」

黒猫を見て挙動不審になる文。

「なんだ?知っているのか?」

「い、いえ………」

「そうだよな。まさか猫に触れようとして逃げられたから追いかけたら乱れ引つ掻きにあつた…なんて、馬鹿な事ないよなあ〜」

「な!?!何でそれを…!!」

「ん、どうしたんだ?」

「……………」

「ま、賢い文は無いよな。猫に引つ掻かれて泣くなんて…くすくす」

「う、うわああんツ!!!」

あらあら、ダッシュで逃げられた。予想通りの反応、ありがとうございましたあ〜。

さあ、説教を始めよう

それから五日六日七日……と続けていき、五年目位で飽きたので止めた。

写真は何千何万とあり、メモ帳は何千冊にも及んだ文の観察企画は大成？に終わった。

将来とかに脅しやネタで使おうつと。

んで、時は戦国……じゃなくて夕食時。

「そうだ、里帰りしよう」

「「はい？」」

俺は夕食のトンカツを頬張りながら唐突にそういった。

「いや、そろそろあいつ等が馬鹿みたいに酒を消費しているような気がするんだよ」

「ああ、確かにそうですね……かなり飲みますもんね、二人は」

そう、鬼位飲むぞあいつ等。一応、量は決めていたんだがな。

俺がいない事により物足りなくなり、その分酒を飲んでる筈。俺に依存している傾向が強かったし。

「と言う訳で、明日の朝早くには帰るよ。また来るな」

「はい。寂しくなりますね…いつでも来て下さいね。天狗勢総出で歓迎致します」

「ああ。文も黒猫頼むな」

「はい、任せてください」

「にや〜……」

俺の膝の上で悲しそうに鳴く。別に連れて行ってもいいが諏訪子あたりにめっちゃくちゃにされそうだから。

そうそう、黒猫は猫又になった。つい最近だから人化はまだ出来ないがな。

夜中、俺の部屋にはルーミアとアマテラスが居る。

「ということ、アマテラスは精神世界に居てくれな」

「はい」

「口出さなかつたけれど、里帰りって何よ」

ルーミアが知リたそうに聞いてくる。

そういうえばルーミアどうしようか。妖怪だから神社は流石になあ……。

「実家にな、ん？実家？ まあいいや。家族が二人居るんだよ。そいつらの様子を見に」

「へえ、家族なんて居たのね」

「血縁関係ではないがな。そこでルーミアにはアマテラスと精神世界に居て欲しいんだ」

「あら、なんでよ」

「だつて行き先神社だし」

「この一言を聞いたルーミアは端整な顔を少し歪めた。

「成る程………分かったわ。そうする」

「ん、サンキュ」

これで話す事は終わり、二人はもう俺の中に入ってしまった。

中が気になるのと、朝は早く起きれないからだとき。

確かに朝のルーミアは妖艶さの欠片も無いからな。

ではでは、お休み。

「よし、行くか」

朝早く暮羽と文に見送られ、出発した。

俺も朝はルーミア並みに弱いが、目覚ましのおかげで起きれた。

空間を跳べばいいと思うだろうが、ここ最近は全く身体を動かしていないから走って

いくつもりだ。

……空を。

ノーモーションで空にジャンプして空気を踏むようにして走り出す。

『は、速いッ!?』

『ルーミアさんは初体験でしたね』

そーだな。普段は歩いてたもんな、俺。

『飛ぶんじゃなくて走るなんて…御主人様は規格外ね』

今更過ぎるわ。

暫く空の散歩（超高速で）を楽しみ、神社に着いた。

「よつと」

音もなく石畳の上に着地したら、境内を掃除していた巫女さんが驚いて腰を抜かしていた。

まあ、空から人が猛スピードで落ちてきたらびびるよな。

「すまん、大丈夫か？」

「は、はい…ありがとうございます」

巫女さんを立たせて、さっさと二人を怒るために探す。

とりあえず家の中に入り、気配がある場所に歩いていく。果たして諏訪子は小さく

なっているのだろうか……それとも大きいままなのだろうか……真実は何時も一つ!!

ガラツと襖を開ける。そこには……

「ただいま。帰ったぞミニ諏訪子に神奈子」

「零ツ／＼レイツ!!」

今言つたとおりにミニ、だ。小さくなっていた。

「遅すぎるよ!それとミニ二つてなにさ!!」

瞬時に立ち上がり突進してくる諏訪子。俺はそれを何時もみたいに抱き留めた。

「そうだぞ、零。帰ってくるのが遅いから私が何していたかわかるか?」

「そんなに遅いか?対して時間経っていないような気がするんだが……それで?何してたんだ?ふて寝?」

「違うね!毎晩酒飲んで暴れて寝ていたのさ!!」

「性質悪いな。迷惑極まりないわ」

ふて寝何て言う可愛い物じゃなかった。こいつらが酔うとかなり面倒くさい。特に諏訪子のスキンシップ率アップ(零にだけ)と神奈子の絡み酒(誰に対しても)。

前者はキスですむからいいが、後者は酔いつぶれるまで何時までも絡んでくる。時たま、抱き付きながら飲まれて頭の上から酒をどぼどぼ溢されるのはたまったもんじやない。

「ちなみに諏訪子もだぞ」

「お前もかい！」

ゴツン！

「ミギャツ!!!何すんのさ！レイが遅いからいけないんじゃないか！」

「ほう？俺のせいにするとか？チビカエルが」

「うっ……!!はっ!!?そういうえば忘れてた！変ッ身ッ!!」

俺に抱き付いたままパツと少し光ってから大人化した諏訪子がドヤ顔をした。いや、それよりも……大人化つて変身だったのか!?

お前実は仮面ライダーとかそんなものの類じゃあないだろうな！

「new諏訪子！どう!?!」

「いや、何がnew?」

少し離れて目の前に立つが…別に変わりはない。

「ふふん！実は胸が大きくなり、スタイルがさらに良くなったのさ！修行の成果だよ!!」

「すまん、全然わからない」

「ガーン……orz」

さて馬鹿はは放っておこう。

「そうそう、それよりも零、ちよつと来てもらえないかい？」

そういった神奈子に崩れ落ちたままの諏訪子の足を掴んで引きずり、着いていく。

「ちよ、ちよつと！スカート捲れるからお姫様抱っこにしてよ！」

図々しい奴だな、そんな元気があるなら一人で歩きやがれ。そういうことで足を離す。

「痛ッ!？」

渋々立ち上がりながら俺の後ろに着いてくる。どうせ説教なのにこのこ着いてくるとは……馬鹿な奴だぜ。

連れて来られたのは一軒家位の大きさを持つ蔵。ここは俺が趣味で作った酒を始めとした、買って来たもの、貰ったものの酒を保管していた酒蔵なのである。

この蔵一杯の酒があつたはずだ。

「此処の酒がね……あとあれだけなのさ」

神奈子が指差した先には……俺の酒が数瓶と樽がいくつか。あんなに一杯あつた酒がもうこんだけだと？

冗談もほどほどにしてくれ。

「……諏訪子？どこに行く気だ？」

「……ッ!?え、えつと……お花を摘みに行こうかと……」

「そうか。どっちの摘みには知らないが後にしろ」

ここそそと逃げ出そうとした諏訪子を掴み、連れ戻す。ついでに大人しかつたが神奈子も一緒に掴んでぶら下げる。

二人を目の前に下ろした。

「二人とも、ここに正座しろ」

「えっ、でもここ地面……」

「いいからしやがれ」

「は、はいっ!!!」

俺の圧力に負けて即座に正座する。

「いいか? お前ら。酒というのは本来……」

さあ、説教を始めよう。

覗き、ダメ、絶対 W W W

説教を初めて結構経った。

——三時間後——

「……………分かったか？つて、限界っぽいな」

二人の精神をガリガリ削るような事も含めて言ったので、言い過ぎたのか、二人ともレイプ目になっていた。ヤバい、なんかエロい……………じゃなくて、

「起きろ、馬鹿ども」

「ふぐうつ?!」

頭にチョップを入れて強制的に起こす。消えていたハイライトが蘇った。

「涎拭け」

「あ、あれ？なんで私は……………確かお酒のことで怒られていたような……………」

仲良いな。息ピッタリだぞ。あと、説教の部分はしっかり聞いていたようだな。なら

いいか。

「そう、その酒だ。今回は特別にどうにかしてやるから。今度からは嗜む程度にしなさい」

「はい……………」

こいつら鬼より飲むんじゃないか？

『この二人、鬼より飲むんじゃないですか？』

アマテラスも同じこと考えてるよ……

『随分と個性的な神様ね』

なんせ俺の家族だからな。さて、やりますか。

「二人とも、蔵から出てくれ」

「なにするんだい？」

「え？神奈子は酒要らないのか？ならいいか……」

「いや！要るさ！……けれどどうやって……」

「お前、俺が誰だか忘れてないか？」

「零が？……………あっ!？」

案の定、忘れていやがったか。これでもお前らの主ですよ。

「まあ見てろ。それと諏訪子も首から離れろ」

「え〜…いいじゃんか〜…どう?昔の私とは色々違うでしょ?柔らかさとか」
「知らん。鬱陶しい」

無理やり剥がし、適当に投げ捨てる。今回は多めに酒を増やそうと思う。一々増やしに来たくないからな。

「よっ……………」

【無限にする程度の能力】であつという間に増やす。

酒樽は床一面に増やしてさらに何段にも積み上げる。一升瓶は壁に天井まである棚にぎっしりと置き、酒樽の上にも置けるだけ増やした。蔵は酒で飽和状態。

こいつ等は飛べるし、問題ないだろう。

「……………」

「終わったぞ……………どうしたんだ?」

2人が固まっていた。

とりあえず肩を揺すってみた

「どうした?2人とも?起きろ〜」

「……………はっ!?!」

「これはどういうことだ!?!」

「一瞬にしてお酒が沢山に……………」

神奈子に諏訪子が驚いていた。

「俺の能力だよ。【無限にする程度の能力】って言って、意味はそのままだよ」

「めちやくちやな能力だね……………」

諏訪子なんて、まだ呆然と突っ立っている。

「2人とも」

「……………」

「次俺が帰ってきた時にさつきみたいにな数になってたら……………どうなるかわかるよな？」

最高に爽やかな笑顔で2人に言い放った。しかし目は笑っていないが…………

「は、はい…自重します……………」

2人は産まれたての子馬みたいに震えながら約束してくれた。

「わかってくれたならいいよ。さあ、戻ろうか」

飯作らなきや。

『思考が完璧に主婦ね』

せめて主夫だろ。

「相変わらずレイの作るご飯は美味しいね」

「本当だよ。…あ、そうだ。零」

「なんだい？」

夕食の煮物をつつきながら神奈子が聞いてきた。

「大和の砦のほうで天照様が居なくなったらしいんだよ。しかもかなり昔に」

「へえ…それはまたなんで？」

「なんかね、諏訪ここの交渉のことで愛想を尽かされたとかなんとか……だってさ。はい、あゝん」

「あむっ…ん…知らないな、見かけたら連絡するよ」

「ああ、頼む」

『なかなかのポーカークーフエイスですね』

嘘は得意だからな。呼吸をするように吐ける。鬼に聞かれたら殺されるね。

それから一年ぐらいぐだぐだしていた。

外の話とか俺が居ないときの話とかして。

酒は自重してくれてたし、毎晩一緒に寝てたし、朝になるとくつつかれて暑かったし。そんな生活もそろそろ終わり。理由はルーミアがそろそろ外に出て一緒に居たいと

言い出したからだ。

「という事でじゃあな」

「なにがという事で、なんだい……」

「もう行っちゃうの?!? 早いよ」

「まあまあ、また帰ってくるから」

「うゝゝわかった、絶対だからね!」

「いつでも帰ってくるんだよ?」

「分かっているって。じゃあな」

そう言つて神社を出て現在山の中。あれ?こんな事前にもなかったつけ?

『それで?御主人様、もう出てもいいのかしら?』

「ああいいぞ……いや、ちよつと待て」

『どうしたのよ……って、誰かに見られてるわね』

『姿はありませんから……能力でしょうか』

一つ、思い当たるぞ。それはかの有名なムラサキバアとか。その可能性が高いな。神社では無かった……山に入って暫くしてからだったけど、俺を観察する理由はなんだ?

今までは見られていなかったのに……。なんかどうせくだらなそうなる理由の気がする。

森の中へ、ムラサキにく、出会ったく

ムラサキさんに見られて一時間。

けどま、気にしない。このまま素通りさせてもらう。噂で都に絶世の美女が居るらしいから見に行きますか。

「その貴方」

どうせ輝夜だろうなあ…。てことは、永琳が月から来るんじゃないや？

「ちよつと？ねえ？」

服の下にマガジンでも隠しておこう。身の危険を感じた。……まさか、未来予知!?

「ちよつと!?!待って下さらないかしら!?!」

ああもう、五月蠅いな。せつかく無視していたのに。

目の前に目玉だらけのスキマからずりりと出てきたのはやっぱり紫。うっわ、胡散臭い。あ、紫で思い出したけど、髪を紫色に染めるお婆さんは気持ち悪いと思うのは俺だけか？キャラなんかの髪の色は素敵なのに。

え？どうでもいい？まあそうだけどき…赤に染める若者はいいけどお婆さんはやっぱり嫌じゃん？それが言いたかっただけ。心底どうでもいいけどな。

ゆかりん忘れてた。

「ワオ、アンビリバボー」

驚いた振りして通り過ぎ……

「逃がしませんわッ!!」

れなかった。右腕をダイビングキャッチされた。

「……なんなんだよ? いい加減にしないとぶち込むぞ?」

「なにを?」

「お前をブタ箱に」

「まさかの牢屋!?!……慈悲は?」

ふむ……

「ほら、チロ○チョコをやろう」

そう言っただけからともなく、例の小さくて美味しいチョコを掌にチョココンと乗せてあげた。

「いらないわよっ!」

お前、チョコ馬鹿にすんなよ!この時代にはまだない貴重な一品だぞ!

「つて、懐に仕舞った!やっぱり欲しいんじゃん」

「う、うるさいわね……いいじゃないの」

別にいいけど。なんか案外扱いやすそうだ。

『零さんなら誰でもこんな感じに出来るじゃないですか』

違う。

「ふう…じゃあ自己紹介を。私は八雲紫、スキマ妖怪よ」

「なんだ？脳みそスキマだらけとかか？」

「酷くないかしらッ!？」

「まあまあ…じゃあ紫よ、さらばだ」

「ええ……つて！貴方は名乗らないの!？」

「この時代の都は臭いというし、都から離れたところで暮らそう」

「聞いちやいない!？」

用事があるときだけ都に入り、輝夜に会うなりしましよつかねえ。サキ達は来るかな

？神様にしてくれてありがとう（怒）。とても便利だよ（激）。つて言いたい。

「いい加減にしなさい!!」

……面倒だ。

「要件を三行で説明しろ」

「え!?!えつと……、たまたま貴方を見つけた。

神社で神様と居るくらいなら強いはず。

式にしようと思った。……かしら？」

ちつ……こいつ分かってない。普通何かしら要らないことを言う事で四行にする、とかがお約束だろうが。ニヤル子さんシリーズ読んでから出直して来い。

「不合格」

「え……？」

何を言われたのかわからないって顔をしている。大体理由もくだらなかつたし。俺自身に美人な式いるし、紫如きじやあ俺を式になんて絶対に出来ない。

『そんな……美人なんて……照れるじゃない／＼／』

『む……』

事実だし。

「だから、不合格。大体お前如きじや俺を式に何て出来やしないさ。出直して来い」
「……貴方、誰にもものを言っているのか分かっていないのかしら？」

瞬間、紫がかなりの量の妖力を噴出させた。周りが若干重くなり、妖怪が逃げ出し、鳥が飛び立つ。確かに妖怪としてならこれほどの妖力量なら黙らせられるだろう。

だが、相手が悪い。

「分かっているさ。そこまでボケてないぜ？もう一回言おう……出直して来な？お嬢ちゃん？」

「……………死ね」

さらに妖力量が上がり、大量の弾幕が作り出される。それを俺に向けて撃ってくる。

……………これぐらいなら避けなくてもいいか。敢えて当たってあげて勝利を勝ち取った風に見せてあげようじゃないか。

俺は大人だから。やつさしー。

妖力弾が俺に当たり、爆発と同時に煙で辺りが包まれる。そんな中、紫の声だけが静まり返ったこの場に響いた。

「ふん……………この程度のようなね。期待外れだわ」

「おっと……………目で見ていないのにその発言は軽率だぞ?」

「……………な!」

ブンっと、軽く腕を振るい視野を確保する。それだけで暴風が吹き荒れたが。煙が晴れた場所には未だ、紫が信じられないものを見たかのような顔で突っ立っていた。

「貴方……………なんで生きて……………」

「足りない」

「え……………?」

「だから、妖力も威力も全然足りない。だから避けなくても傷一つ付けられないんだ。

せめて———これ位出してくれないとなあ」

そう言つて俺は靈力を放出させた。

「な……………あ……………え……………?」

紫の妖力は一瞬で俺の靈力に塗りつぶされ、あまりの量に俺を中心に土が吹き飛びクレーターを作り上げる。木々は吹き飛び、大気が掻き乱されて荒れ狂う。

俺はゆっくり紫に近づいた。さすがだ…氣絶はしていない。だが恐怖による、滝のような汗と体の異常な震えはどうにもならなかつたらしい。

「……………あ……………あ……………ひい……………」

涙目で濡れた紫可愛いかも。

『何言つてるんですか……………』

いや、ねえ?こんなの滅多に見られないぞ?

すぐさま腕輪からカメラを取り出して激写しておいた。そしてしまう。レアものだぜ。

ついでに、世の中にはまだまだ強者が居るといふ事を教えてあげようじゃないか。

人差し指で紫の顎をクイツと持ち上げて、目を合わせる。

「さて、実力の差が分かつたろう?お嬢ちゃん。まあ安心しろ、チャンスをやろう。これを機に態度を改めなおす、つて言うなら、此方も相応に接することくらい各かじやない

ぜ?」

目をじつくり見てから離し、靈力も抑える。

「ハッ……ハッ……ハッ……」

息するのもやつとか。ていうか都と離れていてよかった。

ふと、荒い息遣いが聞こえなくなったので振り返ってみると既に紫は居なかった。

「ふむ……逃げたか」

『当り前よ!! あんなに出されたら怖いに決まってるじゃない!!』

『そうですかね?』

『……あんたも大分、御主人様に毒されてるわね』

『嬉しいことです』

アマテラスも俺にすっかり似てきたよな。

『でも、また御主人様の事が知れたのは嬉しいわね』

お前も何て言うか……良い女だよな。

『……………//』

『零さん……』

おっと、アマテラスがむくれてるからそろそろ出発しますか。

そうだ、ルーミアは出てきてもいいぞ。アマテラスはすまんが、もしかすると紫が覗き見してくるかもしれないから今まで通りで。

『はい。慣れてますからいいですよ』

『じゃあ、私は出るわね』

俺が歩みを進めると、出てきたルーミアが腕を絡めてくる。

「久しぶりに触れられるわ。やっぱり良いものね」

「そうか？よくわからんが」

俺とルーミアはこうしてのんびりと山を越えて都へ向かった。

ぼつち可哀想だよね

さて、大分都に近づいてきたがここで問題がある。

そう、ルーミアの事だ。別に精神世界に居ればいいんじゃないやね？と思うが、ルーミアにも偶には外で自由にさせてやりたいしさ。見た目は妖艶な美女なので妖力をどうにかしてやろう。

「という事で、妖力をどうにかするか」

「それもそうね。妖怪とばれると直ぐに陰陽師どもが来るし。別に負けないけれども」
ま、俺にかかれれば簡単に解決するけどな。

【消す程度の能力】で、ルーミアの身体から出る妖力だけを消すようにする。漏れ出す妖力だけであり、体内の妖力は消してないから大丈夫。

「ほい、解決」

「……早いわね。ありがとう」

「いえいえ」

再び腕を絡めたまま都に行く。森を出て、街道を歩いて都に近づくにつれて人が多く

なり騒がしくなってくる。多分、輝夜のことを一目見ようと来た奴らばかりだろう。

人ごみを抜け、少し休憩するために茶屋に立ち寄った。

「いらつしやい」

「団子を二皿くれないか？」

「はいよ、ちよつと待つておくれ」

恰幅の良い優しそうなおばさんが返事をした。店の外にある椅子にルーミアと一緒に座っている。

「人が多いな」

「ええ。前の私なら餌だらけに見えたのだけれど、今は全然食べたいと思わないわ」

「それは重畳」

「ふふ…御主人様のおかげよ？御主人様に会わなければ美味しすぎるご飯も食べられなかったし、普段では味わえない楽しさが毎日味わえるのなもの」

俺を見て微笑みながら足を組み換え、長い金髪を耳にかけた。ルーミアを見ていた、前の道を歩く男どもが立ち止って顔を赤くしながらポーツと惚けている。

お前ら、輝夜狙いだらうが。さっさと失せな。

「熱々だね。若いつていいわねえ。はいよ、お待ちどおさん」

おばさんが俺達を茶化しながら団子とお茶を持ってきた。

若いって言うが、おばさん…あんたの方が若いぞ？赤子と老人並に差があるから。

「あら、ありがとうおばさん。そう見えるかしら？」

「勿論さ。絶対離しちゃうダメだよ？」

「それこそ勿論よ」

あんた等は何を話しているんだ。

団子の串を持ち、一つ頬張る。程よい柔らかさと、団子の上に乗った餡子の甘さが口の中で混ざり合う。普通に美味しい。

お茶を啜り、一息つく。

団子かあ……暇があれば絶対に作ろう。レパートリーは沢山あるし。

「ん…美味しいわね」

「そうかいそうかい。たんとお食べよ。それより、あんた達…旅の者かい？」

「ああ、そうだが…最近なんかいい話題がないか？」

「そうだね……最近鬼がよく出るらしいさね。気をつけなよ」

へえ……鬼、ねえ…。

「他にはないの？」

と、ルーミアが聞いた。

「ん…ああ！そうだよ、一番の話があるじゃないか」

「何かしら?」

「なんでも、貴族様方が長い行列を作ってるらしいねえ。あと、男どもが貴族様方のお目当ての家の周りをうろちよろしてるらしいし」

「貴族が? 目的は何なのよ?」

あゝ、ルーミアは輝夜のこと知らないもんな。話してないし。

「噂じゃあ、かぐや姫に求婚する為だとかなんとかなんとか……」

当たりか。俺も求婚して来ようかね?

「そうなの。ありがとう。ご馳走様」

「お粗末さま。また来ておくれよ、おまけを付けてあげるからね!」

おばさんにいろいろ聞いてから、店を後にする。

次は拠点の確保だな。幸い、空き家が沢山在るのだから使わせてもらおうじゃないか。

場所は都の外れ、空き家が立ち並ぶ住宅街らしき所へと来た。比較的綺麗な家を選び、そこを【消す程度の能力】で綺麗にした。

家具や布団の類は腕輪から出せば問題ない。

ここに来る途中に少し見に行ったのだが、行列の長さが凄いのなんのつて……翌日に再び行くことにした。

さて、拠点も確保したし情報も得たし……後は紫を引きずり出しましょうかね。都に入ってからずっと見られていた。スキマって便利だな。

スキマがある所の空間を手刀で切り裂き、無理やりこじ開けてから紫の腕を掴んで引き摺り出す。

「きゃっ!!」

「やあ、覗き見犯さん？」

「ひい……!!」

目の前に居るのが俺だと分かると、一瞬で端正な顔を恐怖で歪め、逃げ出そうとする。「待て、落ち着いて俺が言っていたことを思い出せ」

「え?……あつ」

どうやら思い出したようだ。ていうかちやんと聞いていたんだな。

紫が落ち着いたので、腕を離してお茶を差し出す。それを紫は受け取り、一口飲んでから気を落ち着かせた。

「さて、それじゃあ聞かせてもらおうか。なぜ俺のことを盗み見ていた？」

「……それよりも、貴方の隣に居る女と貴方の名前を教えて貰えないでしょうか？」

そういえば言っただけだったな。

「仕方ないな、お前のスキマだらけの脳ミソでもわかるように言っただろう」

「誰の脳ミソがスキマだらけですって?!?!」

「お前だ愉快頭。最初にスキマって言ったろ?」

「それは能力の話ですわ!!」

「へえ、まあいいや」

「流されたツ!?!」

五月蠅いなあ。お前、俺の事怖いんじゃないかってつけ?

「俺の名前は天城零だ。で、こつちが……」

「御主人様の式のルーミアよ」

ルーミアが自己紹介した瞬間に紫が驚愕したような顔をした。

「ルーミアですって? いえ、それよりも式っ!?!」

「なんだ? ルーミアを知ってるのか?」

「ええ……と言っても、噂程度ですわ。他の妖怪が言うには、とても強いとしか……」

え? なんなの? ルーミア、お前って意外に有名人?

ルーミアを見てみると分からないようで、こてんと可愛らしく傾げていた。

でもなあ、落とし穴に嵌って出られずに泣くような娘だぞ? 俺には噂になるほどには見えないが……大方、妖怪を食べていたらこうなったんじゃないか? 知らんしどうでもいいが。

「それより、式つてなによ。大体妖力が……」

吃驚し過ぎて素に戻っている。

能力を解除してルーミアの本来の力を出す。

「ツ!?こ、これは……」

「これが私の普通のときの力よ」

「普通のととき?」

「ええ。妖力を抑えているのよ」

「これで抑えているですつて!?なら、抑えるのを止めれば大妖怪……いいえ、それ以上の力を持つ妖怪に……」

「ちなみに、この力は御主人様の式になってから得た力よ?」

「えツ!?わ、私は一体どれだけ強い相手に挑んでいたのよ……」

改めて青くなる紫。ていうか、さっきから俺が置いてけぼり状態。おくい、話の続きは?

「おくい、そろそろ話しの続きの、何で俺をずっと見ていたのかを教えろよ」

「あ!そうでしたわね。貴方を……「零でいい」……零をずっと見ていたのはあれほどの力を見せられて興味が湧いてきたからよ。それと、話がしてみたかったこともあるわ」

「話?」

「ええ。今、私はとても大きな計画を練っているの」

計画？……ああ、幻想郷のことか。

「人と妖怪が共存する理想郷。それを作ろうとしてるのよ」

「ふむ…それで？」

「それでね、掟みたいなのを作るのよ。お互いが必要以上に殺し合わないっていう…」

「……いや、無理だろう」

「どうしてかしら？」

「妖怪は人を食って、人間はそれを排除しようとする。俺に言わせれば、妖怪は自己中で人間は傲慢だ。妖怪はやりたいことをして、人間は自分たち以外の強い存在を許さずに淘汰しようとする。いくらお前の案に…掟に従う奴が居ても、馬鹿な奴らは自分勝手に行動するだろうさ」

人を食わない妖怪や、ルーミアのように食わなくなった妖怪が居たとしても、それらは限りなく少ない。後者はゼロと言ってもいい。絶対に襲う妖怪が居れば、人間は対抗する。

ならば、一定の場所では襲ってはいけない、妖怪が恐れを抱く人間、人間がこの人が居れば安心だと思ひむやみやたらに妖怪を排除しようとする者を出さなくするほどの人間を設置すればいい。

そう……博麗の巫女のような人間を。

「なるほど……そう考えれば穴だらけね。考え直すわ」

「そうしろ。ただ、特定の場所、強い人間、調停、これだけは言っておく。あとは自分で考えろ」

「……ありがとう。本当に助かるわ。これでかなり前に進めることができるわ。それと、妖怪のルーミアさんはこの話、どう思うかしら？」

「ルーミアでいいわ。私は御主人様が居ればどうでもいいわ」

「だとさ。こいつに聞くな」

「この答えは言うと思っていた。」

「そうね。……それと最後に」

「なんだ？」

最後に、と言ってから少し顔を赤くしてモジモジしました。

「その……う人に……」

「聞こえないんだが」

いや、実はぼつちり俺には聞こえているがな。敢えて大きな声で言ってもらおうと思っでさ。

「だから……人に……もう！友人になって貰えないかしら!!？」

顔を真っ赤にして俺を睨むようにして言い放ってきた。隣でルーミアが少し吹き出し、さらに紫は顔を赤くした。

「全く……別にいいぞ」

「本当にツ!？」

「ああ。よろしくな、紫」

「え、ええ!よろしく!」

「計画でもそれ以外でも気軽に会いに来ればいいし、話しかけて来ればいい。あ、でも俺が都に居るときは控えてくれ。再び旅に出たときに会おう」

「わかったわ。また必ず会いましょう!」

こうして、紫は実に嬉しそうに帰って行った。

紫が寂しがりやなのは知ってるし。実は甘えん坊。

「なんか可愛かったわね」

「そうですね。凄く嬉しかったです」

「ま、これから長い付き合いになるだろうし、いいだろう」

紫が居なくなつたことで、アマテラスが出てきてくつついてくる。そのあとはいつも通り過ごして、翌日に輝夜に会いに行くのだった。

人体破壊は楽しいな

翌朝、都を少しぶらつきながら貴族たちの後ろに並ぶ。

アマテラスとルーミアに求婚の事を言ったら、何故か涙目で迫られ、怒られた。

どうやら捨てられるのかと思っただけらしい。

ただ顔を見に行くだけだと言ったら、何故かさらに怒られ、夜に襲われて散々搾り取られた。そういえば、ルーミアとは初めてだったな。

「あ、貢物はどうするか……」

ん〜……酒でいいか。俺特製のお神酒。比較的アルコール度数は少し高いもの、飲みやすくして万人受けしやすい俺特製のお神酒……その名も【神命酒】。

これでいいか。

やっと来た俺の番に酒を渡す。

そして、屋敷に招かれ貴族達と輝夜の前に座っているのだが、顔が見えない……くそつたれだ。

あと、貴族達が熱心にプロポーズしている。スongoイ気持ち悪い。

一通り終わり、輝夜が良く通る声で喋り、声が部屋に不思議と響く。アマテラスとは

程遠いが。

「皆様の気持ちはわかりました。しかし、本当に私の事を愛しているのでしたら、これから私が出す条件を満たしてください」

おお、これがかの有名なかくや姫のミッション。

「では、藤原不比等様には……………」

本来ならば居ないはずの俺は何なんだろうな……………少しわくわくするね。

「……………」と、それぞれの品をお願いいたします。最後に……………貴方は？」

名前か……………本名を言えば必ずばれるだろうし、偽名にするか。しかし何の名前に……………あ、

「マイケルでございます」

そう、大和の砦に行ったときやアマテラス達とのファーストコンタクト時に使った適当に考えた名前である。

「そうですか……………貴方は何ができるのです？」

「ん……………妖怪退治とか？」

「では、貴方には太陽の畑と呼ばれる所に居る大妖怪、風見幽香の討伐及びその証拠の提示をお願いします」

幽香だと？面白い……………倒さずに逆に仲良くなつてきてやんよ、馬鹿娘め。

そうして貴族達がぞろぞろ帰っていく中、俺は幽香についてずっと考えていた。

「ということで、明日風見幽香と仲良くなってくるわ」

「いやいや、風見幽香って言えば今のところ最も強いと言われてる妖怪よ?」

「しかも仲良くですか……」

「(紫(さん)に続き、一体何人の女を落とせば気が済むのか……)」

なんか二人が考え出した。予想では俺が色々と夜危ないことに繋がりそうなことなので、話を逸らそう。二日連続は嫌だからな。

「それで、お前らも一緒に来るのか?」

「ええ、私は行くわ」

「私は精神世界に居ますね。外は紫さんが見てますし」

そう、紫は家の中は覗かないが外に居るときは暇さえあれば俺のことを盗み見ている。別に気にしなければ気にならないから放っているが。

俺なんかずっと見ていて何が楽しいのか……不思議だ。

「そうか。じゃあ、明日適当なときに行くか」

「ええ／＼はい」

はい、翌日の昼過ぎ。俺は家を出た。ちなみに二人には精神世界に居てもらっている。これから空の散歩だからね。

トンツと、軽く地面を蹴って大空に舞い上がる。

うくん：『翼をください』を思い出すね。翼が俺にも欲しいわ。

という事で：『翼を作ろう in 現在空に居ます☆』を開催する！

用意する物：俺の身体

すること：気合で翼を作る。出来れば文か暮羽並以上の翼。

『またくだらない事するのね』

『翼を生やした零さん：見てみたいです！』

おい、ルーミア。くだらないとか言うな。確かに普通に飛べばいいだろうけど、翼は

男にとってロマンだぞ？一度はバサバサと飛んでみたいものなんだ。

さて、気合で作れるわけが無いので封印していた能力を解放する。神力はルーミアにしたみたいに周りに漏れないようにした。

早速翼よ生えろ、と思う。すると次の瞬間には背中に大きくて立派な漆黒の翼があった。

ちなみに現在落下中。急いで翼を羽ばたくと、黒い羽を散らしながら大きく上昇した。

「やっべ……これは嵌まるな」

天狗たちが飛んでいたみたいに、悠々と羽ばたきながら空を飛ぶ。

なんか不思議な感覚だ……背中にもう一つの手が出来たみたいだ。自由に動かせる。

『私も闇で翼作ろうかしら？』

『素敵です！零さん!!』

「だろう？中々楽しいぞ。暫くはこれで行こう」

都では能力使つて翼の姿だけ見えない様に消せばいい。姿が見えないだけだからぶつからない様に気を付けないとだが。

暫くはのんびり飛んでいたが、ふと、限界の速度はどのくらいか気になった。

力を溜め、一気に開放する！

—— イイインツツ
!!!!!!

衝撃波と羽を撒き散らしながら超高速で飛んでいく。速さ的には走っているときの何歩か手前位の速さか？ということは、丁度光速位だな。

速さも分かったので直ぐに停止する。

『一体何してるのよ？』

「いや、速さはどれ位出せるのかと……走ってる時より遅かった」

『ふくん……翼でも速いのね』

あ、もうルーミアも驚くことを止めてやがる。俺に慣れたのか。

その後は、ゆっくり飛んで太陽の畑の手前の森の中に着地した。

「よつと」

翼を畳むと、横幅がやっぱり広くなるな……ま、いいか。

翼を触ってみたらしつかりと感触があり、手触りは羽毛布団が作りたくなるような感じだ。はつきり言って気持ちいい。

俺の羽だが。暮羽や文はこんな感じじゃなかったな、鳥みたいな感じ？

森を抜けると、そこは黄金に輝く立派な向日葵が咲き誇っていた。

「これは……………」

綺麗だ……綺麗な景色好きの俺から言わせれば堪らないな。今まで見てきた向日葵はどれも小さくひよろひよろしていた。

しかしこの向日葵はどうだろうか。一本一本が見事に太陽に向けて立ち聳えている。

これはもう、太陽神の俺から生命力や太陽の加護なんかを含んだ日光をあげたくなくなる。

——— 実際にあげてみた ———

一本の向日葵に近づき、花に手を添えながら聞いてみる。

「どうだ？ 普段とは違う太陽の光……美味いだろ？」

俺は元々動物や精霊や妖精……普通なら聞いても分からない言葉が分かる……ようになつていた。つまりは動物と話せるのだ。

それで、少し頑張れば木や草と言った植物の声も聞き取ることができ、話し合うことができる。いつの間にかいい意味でチートになつていた。

ちなみに向日葵は、肯定し、ありがとう、と実に嬉しそうな声で言ってきた。

「そうか……喜んでもらえて何よりだ。良いものを見せてもらったお礼だ」

『そうね……私でも綺麗と素直に思うわ……』

『そうですね……何時までも見ていたくなります。零さんなら声を掛けない限り動かないのではないのでしょうか？』

まったくだ。まあ、今日はそうも言つてられないがな。後ろに怖いお姉さんが睨んでいる……というか驚いているし。

顔だけ動かし、翼越しに幽香を見てから振り向く。

「よお、管理人さん？よほどこいつ等に愛を注ぎながら育てているみたいだな？お前が来てから嬉しいそうな声が聞こえてくるんだよ」

「……………貴方……花たちの声が聞こえるの……………」

「ああ。それがどうした？」

「いえ……私以外に聞こえる人なんていないと思つてたから……凄く驚いているのよ」
「だろうな。普通は聞こえんだろうし、能力かなんかじゃないとな。」

「もしかして……能力かしら？」

「いや、違うね。純粹に聞こえるだけさ」

「それは……………」

幽香がさらに話し出そうとした瞬間、ドオオンツ!!、と畑の一面で爆発音と火柱が上

がる。

「なっ!?!」

「ちっ、馬鹿どもが……」

それと同時に、痛いよー、助けてー、と声も聞こえてくる。

「オラア! 風見幽香ア! 見てるかあ!?!」

「てめえの大事な花がポロポロだぜえ?」

「てめえを倒せないなら大事なものを根こそぎぶつ壊してやる!!」

その三匹の妖怪は殴る蹴るなどで向日葵を折っていた。あとは能力だろうか、炎を出している。

……ゲスが……お前ら、地獄を見せてやる……。

一瞬で妖怪共の背後に回り込み、体を引き裂く……いや、切り裂くように足刀で真つ二つにする。

「な、なんだッ!?!」

「どうした!!」

はいはい、遅いから。お前らも向日葵達にしてきたようにボツキボキにしてやろう。

右の翼に霊力を流し込み、振るって羽を飛ばす。刃のようになった羽は、屑共の体中に突き刺さる。

?

ポイツと死体を放り投げ、泣いている向日葵達とさつきまで俺を見ていたが向日葵の方に急いで行き、どうにかしようとしている幽香の元に向かう。

「どけ、幽香」

「ちよつと!?!貴方を……」

能力で『向日葵達が傷つき焼かれた』という事実を『消し』て、何事も無かったかのように復活させた。

「うそ……」

呆然とする幽香と喜び札を言う花たちを見て、

「どういたしました」

静かに笑った。

羽の魅力にて

「ん、いい香りだな……」

カップを手に取り、少し匂いを嗅いでから一口飲む。口に入ってから来た瞬間、ふわりと甘い花のような風味が広がる。自家製だろう。

「美味しいな」

「ありがとう」

小さな事件が終わり、あれから幽香に家へ誘われて今に至る。

幽香も紅茶を飲み、それから俺を見つめて話してきた。

「まず最初に、お礼を言うわ。花たちを救ってくれてありがとう」

「いやいや、俺もあれは許せなかっただけだ。気にするな」

「そう言ってくれると助かるわ。私は風見幽香、花妖怪よ」

「俺は天城零、ただの長生きな旅人だ。ちなみに妖怪ではないからな」

「え？ならその翼は何なのよ」

「これか？能力で生やしてみた。いいだろう？」

そう言って片方の翼を少し折り曲げて動かして見せる。

「……変わってるわね。ここへは何しに来たの？」

「風見幽香を討伐に……」

「……………」

言葉を聞いた瞬間に殺気を出して睨み付けてくる。

「という名目で仲良くなりに来た。要は友達になりに来たんだよ」

「は？」

今度はその端正に整った顔を驚いたように崩れさせた。

忙しいな、百面相か？

再び紅茶を飲み、幽香の再起動を待つ。

「……………え!?!と、ととと友達に?」

「……………なぜそんなに動揺する?」

「え? い、いや、だって…ねえ? ……私は今まで一人ぼっちだったし……それは友人には憧れてたけど……初めての……」

なんか顔赤くして俯いてごによごによ言い出した。

そうか……今までぼっちだったのか……

「遠慮するな。俺は花は襲わないし幽香のことも(友人として)大切にしたいと思ってる

ぞ?」

「ふえっ!? た、大切にっ!」

さらに急速に赤くなつた。なるほど、今まで異性と…他人とこんなに話したこと無かつたから緊張しているのか。

『(また増えたのね……)』

『(こんな短時間で二人も……)』

「(花達も嬉しそうにしてたし、声も聞こえるみたいだし……そ、それに私の事を大切にしたいって……!!) ……そ、そう! な、ならお願いするわっ!! よ、よろしくお願いしますっ!!」

「はいよ、これからよろしくな。気軽に俺のどこにでも来たらいい。都の外れの家に住んでるから」

「え、ええー! ぜひ行かせてもらうわ、れ、れれ、れれれ零ツ!!」

なんでこんなにテンパっているのか……まあ、可愛いから良しとしよう。

それからは落ち着いた幽香が嬉しさのあまり泣き出して、それを慰めたりしていたが、概ね順調に事が進んだ。幽香に日傘も借りたし、少し戦いたいと言ってきたから戦つてあげたし。

勿論、勝つたぞ?



二日後、ルーミアとアマテラスとのんびりしていたら紫の気配がした。

「では、私は戻りますね」

「ああ」

アマテラスが俺の中に入り、少し経ってから紫が家の中にスキマから出てきた。なんか可哀想だったので家の中はあってもいいことにしたんだよ。

「はあい、零、ルーミア。お邪魔するわね」

「また来たのか」

「暇人ねえ、貴女も」

「いいじゃないの」

まあ、別にいいが……つと、今度は幽香の気配がするな。

丁度いい、紫にも紹介しておくか。

「紫、これから俺の友人が来るから紹介するわ」

「……？友人？」

「ああ……お、来たぞ」

ドアを開けて玄関から来たであろう幽香が居間に顔を出した。

「こ、こんにちは?…零。早速来たわよ……つて、誰よ。その女二人は」

おっと、幽香が無表情に。ついでに紫も。

「紹介するよ。こつちが俺の式のルーミアでこつちが友人の紫だ。仲良くしろよ」

一瞬、三人の視線が交差した……気がする。

「「こいつ等……零が好きね……ならばライバル、負けるわけにはいかない!!少しキャラが被ってそうだし!!」」

あれ?なんだろうか……三人の視線の間にバチバチと火花が……?

そんなことを考えていると、幽香が動き出した。

「そうなの。私は零の友人の風見幽香よ。よろしく?お二人さん?」

そう言つて俺の隣まで来て座ると、腕を絡めてきた。

「あー……!!」

「ふふ……」

なんなんだ、一体。今度は紫が物凄く顔を真っ赤にしながら反対側にくつついてきたし……恥ずかしいならやるなよ。

「む……いいわよ、私はここにやるから!!」

ルーミアが背中から抱きついてきた。なんかもう、甘い匂いやら女性特有の柔らかさやら押し付けられる胸やら……今日は何なんだ?

しかも実行しているのが普通以上の妖艶な美女達だけにさすがの俺でも少しドキマギするんだが……。

「……はっ!? こ、これは……!?」

突如、ルーミアが背中から驚いたような声を出した。

「どうした? ていうか、離れやがれ。暑苦しい」

とりあえず二人を引き剥がす。

「もう、少しくらいいいじゃないの」

「そうよ」

「黙れ、スキマ娘。そのスキマうざいから埋めるぞ」

「どこのスキマよ!? 心のスキマなら、もう零で埋まつてるわよ?」

「何を馬鹿なことを……頭……さらに言うとな脳ミソに決まつてるだろうが」

「あれ!? そのネタまだ生きてたのツ!」

「若いうちからそれだと、将来困るぞ。主にボケてくる方面で」

「それは嫌ね、とうか若い何て初めて言われたわ……」

そりゃ長生きしてるだろうが、俺と比べるとなあ……。

「んで? どうしたよ、ルーミア」

「……気持ちいい……文達とは根本的に違う手触りの羽だわ」

そうやって、羽に抱き付いて頬擦りしてくる。少しくすぐったいから止めて欲しいんだが。

あ、こら。引つ張るな、痛いだろうが。

「そうだろう」

なにせ、俺が意識してこうした訳ではないのだから。初めて触ったときは俺すら驚いたし。

寝る時に、痛くならない程度に身体の下に敷いたり上に掛けたりしている。

天然羽毛布団。グッジョブ、俺。

「ええ。今日の夜からこれに埋もれながら寝させてもらおうわ」

まあ、別に二枚あるから一枚くらい構わないが。

『私も零さんの羽に触ってみたいです…』

幽香たちが帰ったら幾らでも触らせてやるから、それまで我慢してくれ。

「そんなに気持ちいいの？私も触らせてもらおうわね」

今度は幽香が反対の羽をさわさわと触ってくる。くすぐったい。

「……………本当ね。これは気持ちいいわ」

「そんなにかしら？それなら私も…………」

隣に居た紫が羽に手を伸ばした瞬間、絶妙なタイミングで翼を動かして避ける。

紫の手は虚しく宙を切る。

「なんで避けるのよ……」

「別に？何となくだ」

「……………」

再び触ろうとしてくるが、また避ける。

手を伸ばしては避ける、伸ばして避ける……これを反対の羽に抱き付いているルーミアと幽香の隣で繰り返し広げていた。

翼は中々の大きさなので、二人くらいならなんとか大丈夫。

「……………うう、なんで私にだけいじわるするのよお……」

あらあら、涙目上目使いで見えてきやがった。子供みたい。

仕方ないのでバサッと翼を器用に曲げて紫を包み込む。

「ふえ……？」

「触りたいんだらう？」

「うん……」

今度はふにやつと顔を崩れさせながら触って来た。

「柔らかい……………」

おう……………なんだ、この可愛い生物は。このままずっと抱えていたくなる。普段大人つ

ぼい奴がこうなると凄いな……ギャツプが。

精神的に強くて何時も冷静かと思えば、意外と子供っぽいんだな。まあ、俺がこいつ等より達観していて大人なだけかもしれないが。微笑ましいねえ……おっと、これじゃあ完璧に孫を見る年寄りだ。まだ若く在りたい。

貴族にまともな奴は居ないのか

こうして輝夜が出した無理難題の締め切り当日が来た。

幽香から借りた日傘を持って家を出る。ルーミアとアマテラスは留守番だ。

屋敷に着いたのだが、あれほどいた大勢の人は今はもういない。

なぜに？あの貴族どももまだいないし……屋敷の周りでも回ってみるかな……

この屋敷はとても大きいとは言えないが、綺麗で清潔感がある。お爺さんたちに輝夜が大切にされているというのが一目でわかる。

うろちよろしている、人を発見した。

つて、あれは妹紅じゃん。髪がまだ黒いな。

なんか、屋敷を覗きながらぶつぶつと呟いている。正直気味悪いね……黒いオーラが見えるような気もするし。

……声でもかけてみるかな？

「ちよいと、そこのお前さん」

「!?誰だ！輝夜の回し者か!?私を誰だと思ってるの!」

今の妹紅は警戒心剥き出しにしてガルルルツ！つて唸る犬みたいだ。

「知ってるよ。藤原妹紅だろ？俺は怪しいものじゃないよ」

俺を見ていた妹紅が何かに気付いたように声を上げた。

「あなた、お父様と一緒にいた奴じゃない！お願い！お父様に輝夜を諦めるように言つて！」

えく…見た目は同い年位何だからそろそろ親離れしようぜ、このファザコンめ。

「無理だよ。俺みたいな庶民の言うことなんて聞くわけ無いだろ？」

「……そう、分かったわ。ごめんさい、変なことを頼んでしまつて」

「悪いな。役に立てなくてさ。俺は天城零だ、よろしく」

「いいわよ。藤原妹紅よ、よろしく。それにしても零、あなたも輝夜に求婚しにきたの？」

ああく…そういえば。

まあ、妹紅にならないかな。

「別にそういう訳じゃない。ただ顔でも拝ませて貰おうかな…と思つてな」

原作キャラだもん。

そりゃあみたいでしょ。

「へえ…輝夜に靡かないなんて……まさかあなた、男にしか……」

「いや、俺は輝夜より妹紅、お前のほうがいい」
「えっ!?!」

心底驚いたような顔になり、次いで意味を理解したのか顔を急速に真っ赤にして慌て出した。

俺を出し抜こうなんてそうは行かない。会話の主導権は俺が握らせてもらう。

「そ、それは一体どういう……………」

「そのままの意味だ。輝夜は美しいと騒がれているが、正直お前のほうが可愛いから好きだ、と言って置こうと思う。輝夜実際に見た事ないし」

上げて落とすとはまさにこの事。だが、妹紅は後半を聞いていなかったらしくパニックになっている。

これは面倒くさい事になりそうだ。今からでもあやふやにしておこう。耳元に近づき暗示を掛けるように囁く。これぞ悪魔の囁き。

「だから……………(こ)によ(こ)によ……………」

「……………ふえっ!?!」

何を言ったかは内緒だ。

「れ、れれれれれれ零さんッ!!用事を思い出したので失礼しますねッ!!」

妹紅が敬語になりダツシユで去って行く位の衝撃を与えたとだけ言っておく。

いやあ、楽しかった。いい暇つぶしになったな。そろそろいい時間帯だし、行きましか。

再び壁沿いを歩いていき玄関まで行く。お爺さんに出迎えて貰い以前と同じ部屋に通された。

そこには既に貴族共が居り、俺が最後。一番端つこに座り幽香の日傘を隣に置く。さて、貴族様とやらの出来を見せて貰いましょうかね。無様に悔しがるといい。どうぞ全部偽物だ。

「皆様、この度は再び集まっていたいてありがとうございます。早速ですが、私が出した依頼の品をそれぞれ見せて貰います」

簾の向こう側から輝夜の声が聞こえる。言い終わった後、同時にお婆さんが立ち上がり品を集めて輝夜に渡した。

輝夜が鑑定している間、暇なので隣の貴族を見てみた。隣には丸々と太った豚がブヒブヒ言いながら溢れ出る汗を手拭いで拭いていた。

見ていたらこつちを見られ目が合った。あ、いや、何でもありません……どうぞ豚小屋にお帰り下さい。

「……………ブヒッ！」

こつち見んなッ！気持ち悪い！この腐れ「ピッー！」が！「ピッー！」して

「ピッー！」 すんぞ、人面豚！

ふう……おかしいな、これでも有名な貴族だったよな？名前忘れたけどな。

あゝ、臭つ……気持ち悪くなってきた。もうさっさと終わらないかな。

「お待ちせいたしました」

お、やつとか。これで豚と相席する時間の終わりが来た。

「残念なことに皆さんに持つてきてもらったものは偽物でした。そうですね？」

それを聞いた貴族共は目に見えて落ち込んだ。ざまあみやがれ。

でもおかしいな、俺のは本物のはずなんだけど……幽香の妖力も感じ取れるはず。

「ただ……マイケル様のだけは本物でした。私は今まで風見幽香を倒すほどの実力を持つた陰陽師を聞いたことがありません。一体何者なのですか？」

んゝ、そうだなあ……

「流れの妖怪退治する人って感じ？」

「そうですか……ですが、私は討伐を依頼したはずですよ。聞いた話だと、未だ風見幽香は健在……どういうことですか？」

「ああ、それなら話し合いで解決だ。あちらさんも手出しされない限り何もしないと云っていた。歴史を辿っても幽香から攻撃したことが無い。だからこれからも放っておくことを進言するよ」

まったく、幽香も大変だよな。名を上げたっていう雑魚陰陽師たちにちよつかい掛けられるんだから。

ま、幽香も暇つぶしになっていたみたいだし、結果オーライ？

「ですが依頼は達成ではありません。貴方も不合格です」

「あつそ。まあ、お前と結婚なんてする気は無かったし、丁度いいさ」

さつさと立ち上がって輝夜の下まで行く。簾の横からお邪魔します。

「なっ!?!」

「おう、これが輝夜か……別に何も思わないな」

以前から知っている顔と同じだった。これで目的は達成したな。

「これは返してもらうぞ。借り物だからな」

ひよいつと傘を拾い上げる。

「そう睨むなつて。夜、また会いに来るよ」

「……………どうしてよ。貴方みたいな不愛想で礼儀知らずなやつはもう会いたくないのだから」

睨みながらそう言ってくる輝夜。ちなみに会話は小声のため貴族共には聞こえない。

「じゃあ、絶対に会って話したくなるようなことを教えてあげよう」

「なこよっ」

「天城零」

「ッ!？」

俺の名前を呟いただけで、輝夜は目を大きく見開いて驚いた。

「八意永琳」

「そ、それって……………」

「という訳で、また夜にな。起きてろよ?」

最後にこれだけ言って帰ろうとする。

「あ、ちよつと……………」

はい、無視無視。貴族共の横を通り過ぎてさつさと家に帰る。家のある方から幽香の気配がするってことは来ているのだろう。

アマテラスが居るけど大丈夫か? まあ、幽香はぼつちだしいいか。

月ってカジノか何かなのか？

「ただいま〜」

「あ、零さんお帰りなさい。どうでしたか？」

「お邪魔してるわよ、零」

「す〜…す〜…」

家の中に入るとルーミアが寝ていて、幽香とアマテラスが話していた。

「ああ、幽香、これ返すわ。サンキューな」

「別にいいわよ。それよりアマテラスの事なのだけれど」

「アマテラスか？話は聞いた？」

「ええ、本人から聞いたわ。それにしてもこんな美人がこの世に居るなんてね…驚いたわ」

傘を幽香に返してから寝ているルーミアの頭付近に座る。その際スカートが盛大に捲れていたの戻してやる。

ドロワーズじゃなくて普通の下着だからな。危ない。

ていうかなんで寝てるの？

「私が幽香さんに説明している間に寝ちやっただんです」

「なるほど」

長い話は嫌いだもんな。しょうがない。

「んう〜……………」

ルーミアが小さく唸りながら頭を動かして俺の膝に乗せてくる。そこで落ち着いてまた寝だした。

凄いな、起きてもないのに無意識で俺を感知して的確に膝枕になる様にしてくるとは。

あどけない寝顔をみて苦笑しながら頭を撫でてやる。心なしか、顔がふにやつと弛んだ。

「いいなあ〜……………」

「ん？なんか言ったか？」

「なにも」

「ふうん、それでだな、アマテラス。今夜輝夜と話をするから着いて来るか？」

「ええ、勿論行きます！」

じゃ、決まりだな。今夜にでも再び会いに行きますか。

それより、俺ってやつぱり死んだことになってるのか？でもあの三馬鹿が俺を結果的

には神にしようとしたんだよな？もし生きていたら神になったことで不老不死となり、何れまた会う事が出来るでも思ってたのだろうか。

元々不老なんだけどね。なら輝夜はさぞ驚いたことだろう。

会いに行つた時の反応が楽しみだ。

あと、アマテラスは幽香にも教えたし別に神にばれない限り気にしなくてもいいか。

「そろそろ飯でも作ろうかね。幽香も食べていくだろう？」

「ええ、お願いするわ。零のご飯は物凄く美味しいものね」

何度か来ているときに食べて帰っていた。ん、みんなでつつける鍋にでもしますか。

その後、ルーミアも起こして鍋を食べた。途中で紫が来てアマテラスの事を説明しておいた。ただ、アマテラスを見てフリーズしていたな。初対面はいつもこうだから仕方ない。

そんな感じで時間を過ごして行くうちにとつぷりと日が暮れた。二人は既に帰ったけど。

「早速行きますか」

『ええ！行きましょう！』

『テンション高いわね。まあ、私も気になるけど』

二人は俺の中から見てるってさ。別にそれでいいならいいけど。今回は空間と空間の距離を消して直接輝夜の所に行く。余計な心配をしなくて済むしな。

目の前の空間が裂け、人一人が通れるくらいの広さになる。裂け目の向こうは既に輝夜が見える。驚いてる驚いてる。

庭に下り立って空間を閉じる。

「こんばんわ、輝夜。ご機嫌いかが？…なんてな」

「ええ、こんばんわアマギ様。驚きの連続で心臓がどうにかなりそうです」

「くはは、そいつは重畳。そんな刺激も偶には必要だろう」

「本当に偶にでいいですよ」

静かに笑いながら、輝夜が腰かけている縁側の隣に座らせてもらう。近くで見ると確かに美人という事がよくわかる。月明かりに照らされた艶のある黒髪が輝いて見える。

「さて、自己紹介と行こうか。ああ、お前はいいよ、知ってるから」

「それもそうですね」

「さて、改めて…俺の名前は天城零だ」

名前を言うと、輝夜は小さく、やっぱり…と呟いた。これを見るから俺の事は知ってるらしい。

「俺の事をどこまで知っている？」

「えっと……月神様で永琳の旦那様という位しか。あと、月に移住する際に妖怪に襲われたのを一人で食い止めた……位です」

「まあ、それだけ知っていたら十分か」

「ていうか、永琳の旦那様って！まだその話生きてたんだ。もうこの話無しに出来なさそうだし指輪でもあげてみるか？」

「それより敬語使いにくいだろ？普通に話してくれて構わないぞ」

「え？ですが神様ですし……」

「いいから。命令な」

「そうですk……そう。分かったわ」

よし。親しい者に敬語とか使われたくないな。

『御主人様って神様だったの!？』

『そうですよ。ちなみに私の主に値します。太陽神の長ですかね?』

『それよりも!!旦那ってどういうことなのよ!結婚してたの!？』

『はっ!?!そうですよ!私の知らない話が多々あります!というか結婚ってなんですか!!!』

え?いやまあ……お前らに会う遥か昔に住んでいたところでちよつとな……気づい

たらそうなっていた。

月にも人が住んでいるんだが……その移住するときに妖怪がかなり邪魔してきてだなあ……俺が一人残って食い止めた。人妖大戦と呼ばれているぞ。

暇なときに詳しく話してやるよ。

『絶対です／よ!!』

あ、ああ……………。

「どうしたの?」

「いや、何でもないさ。それよりなんで地球にきたんだ?」

「ああ、そのことね……………」

「月は居心地が悪いのか?」

「いえ、すごくいいわよ? 貴方の事を皆が信仰していて治安も良く、犯罪が一切ない。それに貴方の事を信仰し初めたとある三人と永琳が……アマギ神様はつまらないことが嫌いだ。これからは面白おかしく暮らそう!! って言い出したから娯楽が凄いのよ」

「へ、へえ……それは凄いな……うん」

何だろう、心当たりがありすぎて困る! 絶対ゲンとかシユウだろ! しかも皆さん信仰しすぎじゃない?

「ただ、どこにでも腐った連中は居てね。私が不老不死になったのをいいことに実験を

しようとする輩がいるのよ。私はそれから逃げてきたの」

なんか知っていた知識と結構違うんだな。俺が神になったことで大幅に物語が変わったのだろう。

追放が逃げてきた、になってるし。犯罪が一切なく、娯楽が日々進化して楽しく暮らせているようだし。結構いい方向に行っていないか？

「まあ、私が此処に居る間に一掃されているでしょう。近いうちに迎えが来るらしいし」「ふくん……帰るのか？」

「帰らないわ。ここが気に入ったのよ。住む宛でもあるし、のんびり暮らすわ」

ああ……ここから蓬莱ニートになるんだな。ま、別にいいが。

「それにしても驚いたわ。まさか死んでるかも知らなかった貴方に会えるなんて！永琳に話聞かされてからずっと思ってたのよ、実際に会ってみたって」

んくつ、と伸びをしている輝夜。俺の知らなかった物語、変わってしまった物語……それがこんないい感じの話になっているとは、中々どうして面白い。俺でも知らないことは星の数以上にあるのだ。

全知使えば分かるけど、それは味気ないだろう？

事実、月でそのようなことになっているなんて知らなかったし、身近なようで身近じゃない話は聞いていて面白かった。

「ずっと暇だったのよ。来るのは気持ち悪い貴族ばかり。気が滅入る一方で、ホント面白くないわ」

「そうか……何て言うか、お疲れさん」

隣でぐでーつとしていた輝夜の頭をよしよしと撫でて慰める。気持ちは分からんでもない。あの気持ち悪い貴族共の相手をするんだ、ストレスも溜まってくるだろう。

「ッ!？」

「どうした？嫌だったか？」

「そんなことない！」

「おおう、いきなりどうした？」

「……／＼／＼（永琳の話を聞いていて会ってみたいという思いは募る一方だったけど、実際に会って話してみたら凄くいいわね……）」

「お〜い？」

「（凄く落ち着くし、兄って感じかしら？）」

あつれ〜？返事が無い、ただの屍のようだ。

でも顔が赤いし、上目遣いでじつと見てくるから生きてるんだらうね。

「あ、あのさ………」

「ん？」

やはり生きてたみたいだ。不老不死だから死にはしないだろうけどね。

「また…会いに来て話し相手になつてくれるかしら?」

「なんだ、そんなことか。勿論いいぞ。じゃあ、今夜はもう遅いし帰ろうかね」

「ええ、待つてるわ。お休みなさい」

「ああ、お休み」

どうやら暇つぶしに話し相手が欲しかったようだ。言われなくてもまた来るさ。

そうして来た時と同じように空間をいじくり家に帰った。部屋に入ると二人が出てきてすかさずくっついてくる。

「どうした?」

「結婚していたなんて知らなかったわ……………」

「そうですよ……………」

ああ、そういう事か。この二人俺の事本当に大好きだもんなあ…………嫉妬か。

「細かく言うと結婚した訳じゃないがな」

「それでもです…………この気持ちを抑えるためにも今夜は付き合ってもらいますから!」

「寝取りつてやつね?ふふ…………御主人様?今夜は寝かせないわよ?」

「え?ちよつ、待つ……………」

何時の間にか布団が敷いてあり、問答無用で押し倒された。

寝る時間が無い？大丈夫、どうせ気絶させられるから寝られるさ。

まあ、結論——女の嫉妬って怖い。

ちよっ！激しッ……アッ——！！

のんびりと過ごす時間

あの後、何回か気絶して目を覚ましたら朝でした。朝になっても続けていたので快感という感覚を能力で底上げして一瞬でイかせて強制終了。

まさか俺が寝てもお構いなしにやり続けるとか予想外。ナンテコツタイ。身体や布団がべたべたなので、汚れを消し去る。

まあ、こんだけ思われてるんだし、悪い気はしないさ。

そんなことを思いながら朝食を作る。軽めにサンドイッチにした。材料は腕輪から出している。

丁度作り終った時に二人が起床。ん？様子が変だ…………。

「どうしたんだ？二人とも」

「……………腰が」

「え？」

「腰が痛くて動けない……………」

「……………」

いや、もう…………飽きれてものも言えない。こればっかしは自業自得だろう。痛くなる

ほど腰振るから……。

「はあ……自重しろよ。今日はゆっくり休んでろ」

サンドイッチの乗った皿を二人の前に出す。うつ伏せ状態だから大丈夫だろう。俺はさつさと食べ終わり、外にでも散歩に行く。

あ、翼？もう消しましたよ。

さてさて、散歩に出た俺だが、今隣にはとある少女が団子を頬張っている。それを見ながら俺も団子を食う。

「この団子は美味しいですね、零さん」

「ああ……そうね……」

その団子を頬張っている少女……藤原妹紅はいい笑顔で話しかけてきた。

いやね？散歩してたらばったり会ってき、この前の仕返しだか何だか知らないけどギャンギャン喚き散らしてきてだな……あまりにも五月蠅かったので縄でぐるぐる巻きに縛って近くの木に吊るしたんだよ。

ブランブランと暫く揺らして遊び、精神的に弱らせてから怖い話をしてあげた。百物語みたいに。態々辺りを暗くして蝋燭一本で話してやったんだぞ？

そしたらあまりにも怖かったらしくて、泣くわ漏らすわ大惨事。仕方ないから【消す

程度の能力」で綺麗にしてやってから縄を解くと、抱き付いて来て更に大泣き。

それをあやしてお詫びに団子でも……という事で、今に至る。久しぶりに疲れたわ……。

「妹紅……」

「はい？」

「……お手」

ポスっ

「おかわり」

ポスっ

躊躇いなく手を置いてくる。忠犬妹紅、此処に現る!!

多分、無意識に……というか、反射的にやってるんだろ。逆らったら恐怖のどん底に突き落とされる……みたいなの？

良く出来ました、と言わんばかりに頭を撫でてやりながらお茶を啜る。嬉しそうに頬を緩める妹紅……どうしてこうなった？

ま、面白かったしいいか。そう言えば、ふと思ったんだが、月が平和であるならば戦争は起きないよな？じゃあ鈴仙はどうするのだろうか？というかどうなるのだろうか？戦争が嫌で逃げてきて永琳に匿ってもらうんだろ？

あ！あれは紫が仕掛けた月面戦争か！じゃあ逃げてくるじゃん。ま、いつか。面白そうだし、紫には黙つとこう。月の神としては如何なものか…ゲン達に頑張ってもらおう。俺とずっとやりあつてたんだ、妖怪なんざゴミ同然だ。

「(ゴ)馳走さん」

「(ゴ)馳走様でした」

食べ終わった後は解散した。妹紅が用事があるらしい。貴族は大変だねえ…。

俺は幽香の所にも行きませんか。

都から離れて走ることに。猛スピードで走り出した俺は器用に木々を避け、土を蹴り、撒き散らしながら進んでいく。速さが速さなだけに直ぐに着いた。どうやら花の世話は今はしてないみたいだな。

家の方から気配………行ってみませんか。

話しかけてくる花達に挨拶を適当に返しながら進んでいく。家の前に来たら幽香が丁度開けてくれた。花の音が聞こえていたらしいな。

「よ、幽香。暇だから来たぞ」

「いらつしやい、零。丁度花の蜜などを使ってお菓子を作っていたのよ。さ、上がってちょうだい」

ふん…確かに甘い香りがするな。これは期待できそうだ。

「お邪魔しますつと、幽香……また土が落ちてるぞ」

床にちよこちよこ土が落ちている。掃除してないな？

「あつ！／＼／＼」

「まったく、花の世話に夢中になるのはいいけど、自分の身の回りの事もちゃんとしろよ？土で汚れた幽香も綺麗だが、お前も女なんだから綺麗にしてなさい。ほら、こつち向いて」

世話をした後にお菓子でも作っていたのだろう。こつちを向かせてタオルを取り出して汚れた顔を拭いてやる。汚れが取れたら髪についている土も手櫛で落とす。

顔を真っ赤にして恥ずかしさに耐えている幽香は可愛いが、こんなお節介ばかりしてからのアマテラスとかにお母さんって言われるんだらうなあ……こればっかしは仕方ないさ。癖だ。頭を撫でる位の癖。

気が付いたらしてらるんだよ。

「ほら、綺麗になった。もういいぞ」

「あ、ありがとう……／＼／＼」

小さくお礼を言ってからパタパタと小走りで逃げるように走って行った。それを見届けながら床の方の土も消しておいた。

俺の能力って便利すぎ。まあ、これを見越して選んでいたんだが。

家に入り、いつも座っている場所に座る。ていつても、ベッドなんだけどな。それと同時に幽香が皿とカップが乗ったお盆を持ってやってきた。

お菓子の正体はクッキー。紅茶はいつもの自家製の紅茶。かなりうまい。

「お待たせ」

「待つてないさ、サンキュー」

紅茶を受け取り、一口飲む。幽香はおずおずと言った感じで隣に座つて来た。何時もなら遠慮せずに腕を絡めてくるんだが、今日はさっきの事があるから恥ずかしいのだから。

幽香と二人、より添いながらお茶を飲む。花に見守られながらの、静かなお茶会。

こんな静かで安らかな時間も、悪くはない。

酒の肴に

時間と言うのはあつという間に過ぎるもので、すでに夕方。そろそろ帰って二人の様子を見なくちゃだな。輝夜とのこともあるし。

「じゃ、そろそろ帰るな」

「ええ、またね、零。今日は楽しかったわ」

「俺もだ。またな」

木々の方に軽く跳躍し、そこからは来た時と同じように走って帰る。途中、邪魔な妖怪がいたから手刀で斬り裂いておいた。邪魔するから悪い。

都が見えてきたらスピードを落とす。さすがにこのスピードで突っ込んだら大惨事になる。さて、家に着いたし、二人は治ってるかな？

「ただいま。二人とも、どうだ？」

「あ、お帰りなさい零さん。もう大丈夫ですよ」

「あら、御主人様。どこに行ってたのかしら？」

二人とも普通に座っていた。

「ああ、幽香の所にな。お茶してきた」

ルーミアに答えながら台所に行く。今日は何にしようかね……。

「む…私を放つて楽しい事してくるなんて」

「何言つてんだよ。お前らは夜に勝手に楽しんだろうが」

「……………それもそうね」

今日は中華にするか。そんな気分だ。

辛めの味付けにしよう。

「零さん、手伝いますね」

「おう、頼む。今日は中華な」

「はい。分かりました」

アマテラスはこう見えて俺の料理を見てたりするし、手伝ったりするからかなり上手だ。

髪を後ろに纏めてエプロンをする。着物にエプロンはすごく合っていて、アマテラスに滅茶苦茶似合う。

「なんか……………夫婦みたいね」

「え？そですか？えへへ……………／／／／」

後ろでポソツとルーミアが言ったのに対して、アマテラスが嬉しそうにはにかんでい

る。ま、付き合いが一番長いんだ、そう見られても仕方ないさ。

それから終始ご機嫌のアマテラスと、やけに絡んでくるルーミアをあしらいつつながら夜中まで過ごした。んじゃ、そろそろ行きますかね。

昨日と同じように輝夜の所まで行く。

「あ、零じゃない。遅いわよ、待ちくたびれたわ」

「そんなに遅いか？ そうでもないって」

ちなみに二人は俺の中に居る。どうやら昔話が聞きたいらしく、着いてきた。話す内容は月に永琳が行く前の話だから誰も知らないことだ。好きな男の知らない過去は気になるのだろう。

ま、聞かれて困る話じゃないしいんだけどな。

縁側で月見酒と洒落込もうじゃないか。その肴が俺の昔話とか美味しくないけどな。腕輪から「神命酒」と杯を取り出す。

「飲むだろう？」

「お酒？ 頂くわ」

杯に酒を注ぎ、二つある内の一つを輝夜に渡す。精神世界で二人が羨ましそうにぶつぶつ言っていたが、気にせず一気に煽る。

「あ、このお酒って貢物にあったような……?」

「それ、俺だな」

「やっぱり! 凄く美味しいわね……」

口にあつたようでも何よりだ。輝夜をしてみると嬉しそうに飲んでいる。無くなったので再び注いでやる。

「ふう……じゃあ、早速昔話でもして頂戴?」

「しようがないなあ……あれは永琳と友人の三馬鹿で訓練所にいた時のことだ……」

酒を飲みながら記憶を、思い出を、楽しかった一時を頭の本棚から引つ張りだして話し始めた。

ロボットには危険がいっぱい？

昔の零 side

「出来たな……」

「ええ、完成ね……」

「こいつは凄えな……」

「そうですね……」

「凄いねえ……」

三者三様、訓練所にあるモノを見上げながら呟く。俺達が何を見上げているか、それはガンダム……ゲフンゲフン！それは『ガンダム』だ。決してガンダムではない。

どこことなく姿がフリーダムガンダムに似ているとか、そんなことは無い。フリーダム最大の特徴のウイングバインダーは無いし、ハイマツトモードにもフルバーストモードにもなれません。

特にコックピットが異様な所にあるからな。俺の作ったロボットがこんなにMSな訳がない。

このガンタム……いいからガンタムだ。気にすんなハゲンぞ。中国のパクリみたい？いや、それよりかは断然イケメンだ。

で、このガンタムは俺と永琳が一ヶ月、暇な時に作り上げたものだ。それが今日完成したから三馬鹿のゲン、シュウ、サキも呼んで見ているわけだ。

「さすが八意様と零さんですね」

「なあ零！これ誰が乗るんだよ!?俺が乗ってもいいか!？」

興奮した状態で詰め寄ってくるゲン。こういったの好きだもんなあ、お前。

「ああ、元よりお前に乗ってもらおうつもりだった。あそこにリフトがあるだろう?そこに乗れ」

「おう!!」

俺達は正面から見ているが、リフトは後方の上部より伸びている。ちなみに全長十三メートルだ。

走って行くゲンを見ながら残った二人に話しかける。

「サキ、シュウ、急いで後ろの方に行くぞ。面白いものが見える」

「え?面白いもの?」

「なんででしょうね」

俺達も走って行き、リフトに乗ったゲンを追い抜く。そして後ろ全体が見える所まで

来た。

「見ろ、あれが面白いものだ」

そう言って見たものは、リフトがケツの部分に：いや、ゲンがケツの部分に入っている光景だった。ゲンも気付いたらしく、アレ？って顔をしている。

「うわあ……………」

「……………」

気持ち悪いものでも見たかのように顔を歪め、俺にくつついてきたサキと無言のシユウ。

「あいつ、今からあだ名を『うんこマン』にしようぜ」

「『賛成』」

目の前でケツに付いたドアが閉まっていく。それを見上げながら呆然としている俺達。いや、作ったのは俺と永琳だけだし、実際に見ると凄いのね。

『零！どういうことだよ！なんでコックピットがケツにありやがる!?!』

「落ち着け。頭部と胸部は真っ先に狙われると思ってそこにしてみたんだよ。どうだ？

うんこマン」

『うんこマン!?!』

スピーカーからゲンのやかましい声が聞こえる。お気に召さないみたいだ。

「ちなみに、自分が乗るとしたらどうだ？永琳」

「融かすわ」

融かすと来ましたか。即答などところを見るからに、よほど嫌だと分かるな。

「サキは？」

「取り敢えず、荷電粒子砲でも撃つかなく？壊れなかつたら核爆弾でも……」

なんて物騒な娘なのだろうか。

「シユウは？」

「興奮しますね。フフ……これは今夜にでもゲンさんとも……」

アディオス、ゲンの貞操。今夜でお別れか……そっちの道に目覚めないことを祈るぜ。

「ま、取り敢えず起動して動いてみるよ」

『……ああ、そうだな』

アレって股間部分から見えるんだろ？動きにくくないか？目線が違うから。今更すぎるな。

ウイイイイン……と駆動音がして小さく機体が震えて目に光が灯る。ふと、隣の永琳を見てみると手で何かチップのようなものを弄っていた。

「永琳、それなんだ？」

「なんかポケットに入ってたのよね。何かの制御チップだと思うの。これがないと使い手の言うことを聞かないはず…チップだから自ら動くものよね。ロボットとか？」

そう言いながら指先で弾く。回転しながら飛んだソレを、俺はキャッチする。見たことがあったのだ。

「これって…今ゲンが乗ってるヤツのじゃね？」

「「え……？」」

バツと、俺の手の中にある制御チップを見てくる皆さん。ということとは……

『おお！動いた！よし、歩け！』

耳に届いたのは、ゲンの興奮した声。目に届いたのは、命令を無視して勝手に動き出すガンタム。

『な、なんだ!?!勝手に動き出しやがった!!』

ガンタムは勝手に動き出す。バレエを踊っていた。勝手に動き出した結果がこれかよ……。バレエのテレビ番組でも受信したのか？うっわ、シユール過ぎる。

「これは…見るに耐えないわね…」

「おお、ゲンが踊ってるよ。完成度高いね」

「素敵ですよ、ゲンさん」

『言ってる場合か！なんでこうなったんだよ!?!』

「ああ、制御チップを入れてなかったらしい」

『馬鹿じゃね?! どうすんだよ!!』

未だ踊り続けるガンタム。今度はダンスし始めた。激しい踊りは、見るものを元気づける（笑って）ようだ。

「どうすんの?」

「大丈夫よ、零。こういう時のために自爆装置を付けているわ。これがそのボタン」

永琳から渡されたボタンは、いかにもこれを押すと爆発しますよってという赤いボタンだった。これはもう押すしか無いな。

「レイ? それなくに?」

「これはね、花火をするための必要なボタンだ」

「花火?」

「そうだ。サキ、花火見たいか?」

「うん! 見たい!」

「よしよし、見せてやろう」

いい笑顔なサキの頭を撫でながらボタンを押す。ポチツとな。

『くそ! 動け、動けよ……!! ガンタ………』

……イイイイイン……ドツカ……ンツツツ
!!!!!!

ボタンを押したら機体が光った後、凄まじい音と光と衝撃を発しながら爆発した。軍人の二人は耐えられるが、永琳は耐えられそうにないので抱きしめて盾になり目を塞いでやる。

俺は爆発したガンタムを見てみた。

メラメラメラメラ……

燃え上がられ、燃え上がられ、燃え上がられガンタム。

「あ、ありがとう零……／／／」

「ん？ああ、大丈夫か？」

「ええ、零が護ってくれたから大丈夫よ」

腕の中から永琳が顔を出してお礼を言ってくる。それを聞きながら再びガンタムを見る。

ゲン……死んでるんじゃない？

そう思つて当たりを見回すと、少し離れている所でゲンが気絶していた。心音を意図

して聴き、生きている気配を察知する。

多分、爆発の衝撃でコックピットの中から吹き飛ばされたのだろう。運のいいやつだ。

「シユウ」

「はい？何ですか零さん」

「ああ、ゲンが転がっているだろう？多分あれは夜中まで起きない。……好きにしろ」
「……………分かりました。それでは……………」

怪しく微笑み、ゲンのもとまで歩いて行く。終わつたな。

「む……………」

「なんだ、どうしたんだ？サキ」

「八意様だけズルい！私も！」

そう言つて飛びついて来るサキを受け止める。可愛いものだ。

「それでは、お先に失礼しますね。ありがとうございます、零さん」

ゲンを担いだシユウが頭を下げて出て行つた。……ゲンの顔が悪夢に苛まれたかのように歪んでいたが、気のせいだろう。

片付けを他の用務員や兵達に命令して俺達も出て行つた。

愛の形は人それぞれ……うえツぷ！

これが、数多くある内の一つの思い出だ。毎日こんな馬鹿なことばかりしていたかな。そのせいで月はいい所になったらしいし、馬鹿も役に立つものだ。

「ふう……これが後に『ガンタム暴走事件くゲンの貞操危ないよ』と呼ばれるものだ」
ちなみにゲンは本当に掘られたらしい。翌日、泣いていた。

「アハハハ！永琳達ってそんなことしてたのね！私も仲間に入ってそんなことしたかったわ」

笑っている輝夜だが、まさか三馬鹿が偉くなっていて月人から人気なんてな。ゲンが結婚、シユウが愛人、サキが独り身。知らなかった……ゲンって結婚したのか。シユウは……まあ、アレじゃね？うん。

唯一独り身のサキがこれまた美人で明るい性格のため、言い寄ってくる奴が後を絶たないらしい。永琳は俺がいるって周知の事実だからなんともないって。

『楽しそうな生活送ってたんですね』

『しかももう一人女が居たなんて……』

あ、そう言えば中の二人も聞いていたんだったな。

「確かに私が居た頃も四人は馬鹿ばっかりやってたわね。ゲンがいつも弄られてるのよ。もう可笑しくって」

「あいつは弄ってナンボだからな」

別に怒らないし、あいつ自身楽しんでいる節がある。Mじやなと願いたい…いや、思いたい。

最後の酒を飲み干して立ち上がる。そろそろ時間だ。

「さて、そろそろ帰るか。どうだった？」

「ええ、最高だったわ。また来てね」

「ああ。じゃあな」

空間の距離を消して一瞬で家に着く。今日はよく話した。話の中の主人公たちにはもう時期直ぐに会える。どんな感じに変わったか、俺が居ない間にあったことは何か…早く逢いたいものだ。

俺が能力でも使えば今直ぐにでも逢える。だが、それは面白くないし、味気ないだろう？年を経て、歳を得た果ての再会というモノも中々どうして甘美なものじゃないか。だから、今は大人しく寝ていよう…おやすみ。



あの初めて話した時からしばらく経った。その間、色んな事を輝夜に話した。一夜に一話みたいにな。

今日は永琳が月からやってくる夜。俺の予想だとあの三人も来るだろう。それも行ってみれば分かる話。輝夜に言われた時間はとっくに過ぎている。幽香と紫と過ぎている。していたら過ぎてた。

ま、しょうがないよね？過ぎてるものはしよーがないって。

「さて、行きますかね」

『はい。一体どんな人達なんでしょう？私、気になります』

『そうね。御主人様の大切な人なのでしょう？』

まあそうだな。ていうかアマテラス、そのセリフはやめとけって。

いつも通りの昔からの真つ黒装備で、いつも通り自由気ままに、気楽に行く。いつも通りの行き方で輝夜のもとに行けば、ほら、そこにはシユウがガチでムチな方といちゃいちゃ……ちや……ンン？

「……失礼しました。どうぞ、続きを続けてください」

空間を閉めて、ひと息つく。

「ふう……二人共、俺は……おかしくなったのか？」

『いえ、私にも見えましたよ……男の方が二人でいちや……』

『世の中には…色んな恋愛があるのね、御主人様……。私は御主人様を愛せて、幸せだわ……』

そうか、二人も見えたか……。ありがとう、ルーミア。俺もお前が好きだよ。だからもう一度逝ってみよう!

「さあ、行くぞ! シュウがアレなのは分かり切っているからな!」

『そうですね! 行きましょう、零さん!』

『頑張るのよ、御主人様! 気をしっかり!』

よし、行くぞ! なんて再会にこんな気合が必要かは知らないが、ゲイの道には行かない! ー!

再び空間を繋ぎ、一步踏み出す。

「たのもー!! 道場破り……もといゲイカップル破りに来た! いざ尋常に……くたばれ!」
勢いに任せて回し蹴りをした……ゲンに。

「尋常じゃないし、何故俺……ゲフォアツ!!」

勢い良く吹き飛び、庭先の池に突っ込んでいった。ゲンの傍らに居た女の子が呆然としている。世間一般から言ったら女性なんだろうけど、可愛い系で童顔だし、俺から見れば女の子でOK。

これがゲンのお嫁さんとやらだろう。いい子っぽいな。よかったよかった。

当たりを見渡すと、皆こちらを見てシーンとしている。あれ？どうした？取り敢えず、永琳と抱き合っていた輝夜を手招きでこっちに呼ぶ。

輝夜は永琳から離れて近づいてきた。

「なあ、皆どうしたんだ？」

「零があんな登場するからよ」

俺のせい？なんかあんだけ言ってた感動の再会とやらもおじやんになったな。

「でもな、当たり構わずイチャイチャしてるとムカつかない？それと気持ち悪いし怖かった」

「いや、まあ、そうね……あの二人だものね……しょうがないわ」

「だろう？」

「でも、なんでゲンを蹴ったの？いや、理由は大体想像つくけど……」

「多分、想像通りでいいさ。間違っでない」

ゲンは弄ってこそゲンである。理不尽にも対応するのがゲンである。

それよりシウだよ。

「シウ………久し振りだな。すっかり大人になって……色々と……」

「零さん……お久しぶりです。やはり生きていらしたのですね、嬉しい限りです。頑張っ

て崇め奉っただけありました」

「そうですねー」

「あ、紹介します！僕の彼氏の雅致武致 慶夢（がちむち げいむ）です」

「シユウに紹介された、慶夢だ。よろしくな！」

ニカツつと挨拶してきたムキムキの人間であろう何かはシユウを抱き寄せた。シユウは嬉しそうである……。気持ち悪くなってきた。

しかも慶夢…ゲイ夢だぞ！夢に出てくる〜！アッーーーーー!!!

「よ、よろしく……」

後ずさり、頬を引き攣らせる。全然感動しない…。オレハ、ナニモミテイナイ……

『零さん！しっかりとしてください！』

『御主人様！しっかりと！目から光が消えてるわよ！』

「……アマテラス、ルーミア……ハッ!?」

し、死んでた？俺死んでたよね!?いくら最強でも怖いものはあるんだよ!

「……アマテラス、ルーミア……」

小さな声で呟く。

今夜は、一緒に……

『はい！一緒に寝ましょう！』

『ええ！いつまでも付き合っただげるから！』

俺の自称最強の精神はどうにかかなりそうだった。これで大丈夫…なはず。

「輝夜はなんで平気なんだ？」

「慣れたのよ。そして意識をソコから外すの。私も、初めて見た時は吐いたわ」

「そうか…やってみるか」

そうして意図的に意識を外す。これなら何とかかなりそうだ。さて、ようやく二人の所に行ける。ゲン？知らないね。

約束と責任と普段通り

さて、一応、輝夜にゲンの様子を見てきてもらい、二人のもとに歩み寄る。行動がいつも通り過ぎたけどな。

永琳は俯いて震えていた。

サキはこちらをずっと見たまま涙を流していた。

これは随分と待たせてしまったらしい。別れ際、サキとは話したが永琳は無理やり気絶させて連れて行ってもらったからな、なんか怒られそうな予感。

「永琳」

目の前まで歩き、止まって名前を呼ぶ。俺の声に反応して一際激しく身体を震わせる。次の瞬間、顔を上げた永琳は涙で顔をぐしょぐしょにしながら睨みつけてきて手を振りかぶり、俺の頬を叩いた。

避けずにしっかりと受けた。この一撃に、永琳の気持ちが届められていたから。

叩き終わった永琳は、その勢いのままぎゅつと抱きついてきた。

「……………馬鹿」

「悪かったな……………」

簡潔な幕切れだったが、この短い間でお互いの気持ちはしつかり伝わったはず。これだけでいいんだから、俺達って凄いいよなあ……。

安心させるように、こういうのも変だが……身体全体で抱きしめた。比喻だよ、それくらい大きく抱きしめたってこと。二本の腕と胸で。

「おっと、そう言えば……サキ」

頭だけ上げてサキの方を見る。腕で何回も目を拭いていたが、俺に呼ばれたことでそれもやめて唇を噛み締めていた。

「……………おいで」

「……………ツ!!」

片腕を差し伸べて呼んでやる。一度だけ、ぎゅつと目を瞑ったサキは閉じた目を開けると同時に走って抱きついてくる。うんうん、サキはこうでなくちゃな。

「レ、イ……心配……したんだから……ツ!!」

「はは、悪い悪い。でも約束守ったろ?……死ななかつたぞ、俺は」

「ツ!!ばか……ばかばかばかツ!!当たり前なんだから!!破ったら私が殺すもん!!」

「破ってたら死んでるから殺せないけどな」

俺は小さく笑い、顔を上げさせて二人に……キスをした。

キザったらしい? 知るか、今はこれでいいんだよ。何も知らない奴が傍から見ればウ

ザイと思うだろうが、理由を知ってる奴からすればハッピーエンドだ。第一、ここに居る奴の他に人は居ない。ならいいじゃないか、俺がこんな感情になっても。

二人をまとめて抱きしめながら顔を上げれば、ゲンが居た。

「ああ、そう言えばお前も居たなあ」

「おいおい、忘れんなよ。ま、しようがないか?」

苦笑しながら濡れたゲンがやってきた。ピシヨピシヨって…格好つかないな。

「お前のせいだがな。ま、いいか……」

「そうだな。それより……苦劳かけたみたいだな。ありがとよ」

「お前から礼を言われるなんて…明日は雪か?それと気にすんな。対して苦劳はしてないさ…二人は強かったぞ」

「そうか……それと月神のことだが」

「ああ、俺達がもしかしたら神になったお前なら生きていられると思つて信仰してみたんだが…無事なれたみたいだな」

「俺はもともと不老だ。余計なお世話だぞ。ま、神も悪いもんじゃない。崇め奉れ、馬鹿野郎」

「ハハハ!!そうだな、アマギ神様。お会いできて光栄ですつてか?」

その後二人で暫く笑つてから、ふと気づいたように隣を見た。そこにはなぜか泣いて

いるゲンの奥さんがいた。

「うう…感動しました〜」

あ、ちゃんと俺達の事を見ていたんだな。

「そうだ、紹介するわ。こいつは俺の嫁の松岡弥生（まつおかやよい）っていうんだ」

「え、あ！弥生です！よろしくお願いします！あ、あのあの、アマギ神様にお会いできてほんとうに嬉しいです！」

「弥生は小さい頃からアマギ神…まあ、零のことが好きだったらしくてな」

わたわた慌てながら喋ってくるこの子は小柄で可愛い子だ。

「しかし…ゲンが結婚なんて…ありえねえ」

「おい。まあ、俺には勿体ないくらい、いい嫁さんだよ」

「ロリコンか……」

「ちよつと待て！今なんて言った!?俺はロリコンじゃねえ！それに弥生は成人だ！」

「いや、でも子供の頃から俺の信者ってことは…俺が神になる前から一緒に居たお前にとっては…なあ？」

「ぐっ……!!」

小柄っていうだけで子供には見えないが…成人にも見えねえ。

「弥生ちゃん？」

「ふえ!? は、はい! ……弥生ちゃん?」

「こんななりだけど、君より遥かに歳上だぞ?」

「そうでした!」

「さて、なんでゲンを好きになったかもわからないし、何がいいのかもわからない」

「馬鹿にしてんのか!?!」

「実際馬鹿だし、弄られるの大好きな奴だが……」

「ちよつと待とうか!」

ゲンうるせえ。本当のことだろうが。見ろ、弥生ちゃんは一生懸命聞いているぞ。

「こんな奴でも何かしらいいところはあるのだろう……こいつは良い奴だ。曲がつたことが嫌いなやつだ。でも自分のことが何にもできない糞野郎でもある。だから……誠意一杯支えてやってくれ」

「……………はい! 勿論です!」

「いい子だ。勿論、弥生ちゃん自身も自分を疎かにするなよ? ま、こんなやつだが、好きになってやってくれてありがとな」

本当にいい子だ。ゲンはいい子を見つけたなあ。頭を撫でてやると嬉しそうに笑った。ついでに最大級の加護も与えてやる。

「ぐすつ……」

「ん?」

なんか聞こえたからゲンの方を向くと……泣いてた。

「おいおい……どうした」

「うぐ……零にそんなに言われるなんて……嬉しかったんだよ、馬鹿野郎め!」
「何故罵倒されなければならん……」

もういい、暫く放っておこう。

「零さん、僕にはなにかないんですか?」

「うわっ!」

近くにゲイがいた! ついついサキと永琳にぎゅつと抱きついてしまった。

「お前には何も無いわ! こっちくん! 幸せになっちゃまえ!!」

「はい、幸せですよ。ありがとうございますね」

え……いや、そういう意味で言っただんじやないんだが……もうシユウとは関わら
ない。そっちの道に完全に堕ちてしまった奴はもうダメだ。前はバイで済んでたのに
……。

「はあ、やれやれ……相変わらず濃いメンツだ」

「いいじゃないの。面白そうで」

「輝夜か……」

いつの間にか輝夜が隣にいてこつちを見ていた。

「永琳もこんなにか愛くなっちゃって」

「姫様…お仕置きしますよ？」

「冗談よ、冗談。じゃ、私はちよつと用事を済ませて来るわね」

そう言つて輝夜は家の中に入つていった。多分、お爺さんとお婆さんに挨拶にでも言つたのだろう。不老不死の薬は渡すのか？

本当なら帝が集めた兵士なんか居るはずなんだが、俺のせいでそんな場面は無い。だが、俺が思うに輝夜が居ないことが帝に伝わり、貰つたのなら蓬莱の薬を献上するんじゃないか？

それでそのまま捨てに行つて途中で妹紅に盗られると。憶測だから真実は知らないし、これからのことだから尚更わからない。

ま、俺にはどうでもいい話だ。妹紅頑張れとだけ言つておく。

「さて、そろそろ離れてくれ、二人共」

「え、もう？」

「いいじゃないの、少し位。感動の再会なのよ？」

「自分で言つてる時点でもう感動味は無くなりました。いいから」

ぶつくさ文句を言い始める二人だが、引き剥がす。もうそろそろ疲れてきた。改めて

二人の顔を見る。少し濡れていたが、これくらいなら気にならないだろう。

「二人とも、本当に久し振りだな。しかし綺麗になったな」

「当たり前よ。いつ、零に会えてもいいように綺麗にしてたわ」

「綺麗だなんてく／＼／／」

サキも一層綺麗になって大人の色香が出てきている。喋ったら全部消えて可愛くなるけど。

永琳もなんか、知っていた永琳より美人のような？努力の賜物？

「あ、そうだった！責任、ちゃんと取ってね。永琳には許可取ってあるから今から私はレイのお嫁さんなんだからね！」

……まあ、約束だったしな。そんな気もしたし。それと、永琳と仲良くなったんだな。呼び捨てしてるしさ。

精神世界の二人がちよつとうるさいなあ……。

「じゃ、一応指輪でも渡しときますか？」

腕輪から指輪を取り出す。俺の加護付きの指輪だ。真ん中に小さなダイヤが嵌め込まれている。

「本当!？」

「やっと認めてくれるのね……長かったわね」

「まあまあ……ほいっと」

二人の指に着けてやる。二人の白く細長い指に指輪は大きかったが、嵌めた瞬間にサイズが変わり、ぴったしの大ききになる。

「よし。俺も同じのを持ってるからな」

俺の分も出して見せてから左手の薬指と中指に嵌める。

二人はうつとりと指輪を見てから再度、抱きついてきた。嬉しかったのかね？

『零さん！私が一番付き合い長いんですからお嫁さんにしてくれてもいいんじゃないですか!』

『ズルいわよ、御主人様!』

あくもう、うるせえ。叫ぶなつての。

それからゲンのもとに行つてちよつとこれからの話を聞く。どうやら輝夜の言つてゐる所で暫く過ごしてから月に帰るそう。腐った奴らは排除してるから大丈夫だとさ。

サキは残つて、四人で帰るらしい。そんな話をしてると、丁度輝夜が帰ってきた。

「お帰りなさい、姫様。どうでした？」

「ええ、お別れはちゃんと行ってきたわ」

永琳と輝夜が今度は話し合いを始めたので、シユウ達二人を除いた四人で雑談をしてた。

「サキも大きくなつたな〜」

「でしよう？背も胸も大きくなつたんだよ！」

まだ大きくなつたのか。

「私もサキさん位大きければ、ゲンくんを喜ばせてあげれたんですが……」

そう言つて自分の胸をペタペタ触る弥生ちゃん。

「ゲン……」

「え!?俺か?!いい、いや、小さい弥生も好きだぜ!俺は!」

この一言で沈んだ弥生ちゃん。これは酷い。

「ゲン……最低だよ。女の子に向かつてそれはないよ……」

「弥生ちゃん、しっかりするんだ。あいつはロリコン……だからそれでいいのさ。弥生

ちゃんのあるがままの姿で魅了するんだ」

「アマギ神様……私、頑張ります!」

「うむ」

「さて、弥生!色々騙されてるぞ!相変わらず口が巧いやつだな!そんなやつを信仰す

るな!」

あ?なんだとテメエ。

「縛つて吊るして二刀流木刀でボコつた後にセメントで固めて落書きして死にたいくら

「い恥ずかしい格好にしてから往来に晒すぞ」

「ごめんなさい!!!」

即効で土下座してきた。プライドの糞も無いのな。

頭をグリグリ踏みにじって笑ってやる。

「無様だなあ、うんこマン」

「うんこマン!?!くっそ、いつも通りか! いい加減離せ!」

「却下」

一蹴して更にゲンで弄っていたら輝夜と永琳がこっちに來た。話し合いは終わりか?

「今から姫様が言う住処に行くわ。それで、零は……」

「ああ、俺はついて行かない」

「ツ!?!それは……なんでかしら?」

「俺は今旅をしていてな。そろそろ此処も離れるし」

鬼が出るとか茶屋のおばさんが言ってたしな。妖怪の山には暮羽や文が居るからな。ちよつと心配なんだよ。

「でも、お前らのところにはちよくちよく帰るから、心配すんな。長くても数年って感じだからな。悲しむ必要はない、直ぐ会える」

「……………そう、分かったわ。零はそういう人だものね。それに、生きてるって分かったし、安心できるわ」

「うゝ…もつと触れ合っていたかったけど、我慢する……今度あつたらちちゃんと相手してね?」

「ああ。勿論だ」

月からここまで乗ってきたのであろう船に乗り込んで飛んで行く皆に手を振り、俺は家に帰ることにした。

行動に起こすのは明日からでいいだろう。約束通り、今夜は二人の相手をした。

山の頭と鬼との戦闘

朝起きてから、俺の知り合いなんかにお別れのあいさつをしてきた。勿論ルーミアもだ。紫は別に言わなくても俺を見ているだろうから大丈夫だし、幽香にも家に行っても居ないから会いたくなければ直接来てくれという旨を伝えておいた。

そして目指すは妖怪の山、少し遠いがまだ危険はなさそうだし、三人でのんびり歩いて行くことにした。左にルーミアで、右にアマテラス。アマテラスには動きやすいように改造した着物をプレゼントした。今までは足が見えないくらい長かったが、ミニスカくらいの長さに調節し、その芸術的なまでに美しい脚は白いニーソに包まれ、膝下まである黒の編み上げブーツを履いている。長い桜色の髪はポニテにして、本格的に動きやすそうにしていた。

「身に付けるものを変えるだけで劇的に変わるものなのね……」

「ああ、そうだな……俺もここまで化けるとは思わなかったぜ。マジで綺麗だ」

「あ、ありがとうございます……／＼／＼」

顔を真赤にして、長い振り袖から手を出して腕を組んでくる。そのまま顔を俺の腕に

押し付けて隠してしまった。

「いいわね……」

「ルーミアにもなんか作ってやるさ」

「本当!？」

「ああ、流石にいつもいつもその黒い服だけじゃ嫌だろう?」

ルーミアにもなにか考えてやらないとな。俺は万年一緒だけど、男は案外服装なんて気にしないだろ? だから何億と同じでも構わないだよ。

妖怪に絡まれることなく数時間、休憩を挟みながら散歩気分で歩いて行く。以外にも紫が山に入ってから覗き見をしなくなった。なんでだ? ま、べつにどうでもいいが。そして感じるのは膨大な妖気が二つ……暮羽と鬼のものだろう。更に妖力が高まり、それがぶつかりそうになっている気配がする。感じていいるだけでも暮羽のほうが負けていて、これでは確実にやられてしまうのではないだろうか。

「ん、なんかやばそうだな……助けてやろうかね」

「はい! そうしましょう!」

「そうね。行きましようか」

それを聞いて三人で走り出す。勿論、二人が着いてこれる速さだが、その速さは優に超音速を超えている。俺達は規格外も裸足で逃げ出すほどの規格外だからな。

瞬時に到着し、暮羽が鬼子母神であろう鬼に潰されそうな所を見て、俺だけ加速して右手で受け止める。

ドパアンツ！と途轍もない音が響き渡り、衝撃で木々が揺れる。それらを無視して暮羽に話しかけた。

「暮羽、大丈夫か？」

「え……？零さん……ですか？」

「なんだ？それ以外に何に見えるんだよ」

取り敢えず掴んでいた拳の持ち主さんを投げ飛ばして、飛び込んできた暮羽をキャッチする。着物も肌もボロボロだし……うん、いい眺めです。

それより周りの奴らだよ、どうしたんだ？鬼も天狗も俺の後ろ見て。振り向いてみると、ルーミアとアマテラスが俺の後ろに居たんだが、どうやらアマテラスを全員が見ているらしい。ああ……いつものことですね、はい。どうせ見惚れてるんでしようよ。

「なんか皆固まってしまったが、暮羽は無事か？」

「はい！零さんに助けてもらったので大丈夫です！それよりどうされたんですか？」

「ああ、なんか鬼が山に来るって言うのを噂で聞いてな、来てみたら丁度さっきの場面だったってことだ」

「そうですか……ありがとうございます。それにアマテラスさんですが……どうされたん

ですか？」

「動きやすい格好させたらああなった」

さて、話が進まないから皆を復活させよう。俺は一回だけ手をパン！と叩き、意識を此方に向けさせる。ビクツとした天狗と鬼どもは俺の方を見た。これでいいだろう。未だチラチラとアマテラスを見ている奴らがいるので、アマテラスと触れ合い俺の中に居させることにした。

「さてと…鬼の中で一番偉い奴は誰だ？」

「私だ」

俺がそう聞くと、手を小さく上げながら先ほど俺が投げた女の鬼が出てきた。多分だが、鬼子母神だろうな。桃色の髪を長く伸ばしたとても色っぽい美人さんだ。

コイツだけ保有している妖気の量が桁違いにあり、ルーミアに…遠く及ばないか。比べる相手がおかしかったな。

「ふくん…此処へは何をしに来た？」

「此処へは鬼が増えたから他の場所へ移動している最中に、丁度この山を見つけたから此処に住もうと来た」

ふむ…別に悪ささえしなれば、此処で済んでもいいんだが…鬼だからなあ、面倒くさそうだな。そんなことを考えていたら鬼子母神に話しかけられた。

「大体、なぜ人間ごときがこの山にいて口を出してくる？ 関係ないだろう？ 消え去れ」
「関係なくないです！ 零さんはこの山の、天狗の頭であり、山は零さんの所有物です！ ですよね！ 皆さん！」

「「「「オオオオオオオオオツツ！！」「」」」」

「……………あれ？ なんで俺が頭になっていて、なんで山が俺のものになってるんだ？ それで何で天狗共はそれに賛同してんの？ それでいいのか!？」

「いつの間にか天狗の中で不動の地位を築いていた件について、誰か助けてください。口々に「兄ちゃん是最強だもんな！」「兄貴！ 頑張ってください！」「ご主人様ー！ 抱いてー！」「頭アー！ やつちまっつてくませえ！」「久し振りに帰ってきたのですから、私達と一緒に遊びましょー！」などと言ってくる。ていうか誰だ、ご主人様なんて言ったやつ！ ルーミア一人で十分だわ！」

「……………らしいが？」

「そのようだな……………人間、名前は？」

「天城零だ。零でいいぞ」

「そうか、私は鬼子母神の麗鬼。零の山に入ったことについては謝罪しよう。だが、この山を受け渡してもらおうか」

「却下……………と言いたいが、無理だろう？ なら簡単に俺らに勝ったらやるよ。負けたら俺の

言いなりな」

「それでいいさ」

そう言つてニヤリを笑つてくるが、その前にやることがある。後ろの鬼どもにも力の差を分かせてやろうじゃないか、やるなら徹底的に反抗できない程にな。

そのことを本音を端折りながら麗鬼に言つてみると、了承したのでルーミアに任せて他の所で戦つてもらおう。

「ルーミア、殺さずに、徹底的に、反抗できないほどに……傷めつけてやれ。遠慮はいらん、潰せ」

「御意に……」

頷いてから鬼を引き連れ、どこかへ行つたが、麗鬼の後ろには二人だけ残つていた。ん？あれは……伊吹萃香と星熊勇儀じゃないか？向こうに行かなかつたのか。

「いいのかい？あの子一人に任せて」

「構わんよ、あの程度の妖怪なら瞬殺だ。それより、後ろの二人は何だ？」

「ああ、この子たちはアンタと戦いたいらしいねえ。三人になるが、構わないか？」

「お前から程度なら何人居ようが変わらないからな、別にいいさ」

「舐めやがつて……後悔しても知らないからな。萃香」

「はいよ」

まず初めに出てきたのは萃香か……どうやら一人ずつするらしいな。まとめてかかってきてもいいんだが、向こうがそれでいいならいいか。暮羽を後ろに下がらせ、俺は一步だけ前に出た。萃香だが、能力が面倒くさいので瞬殺しようかと思ってる。霧みみたいななられたら面倒くさいじゃん？

「随分と舐められたもんだね、人間のくせに言うじゃないか」

「それは悪かったな、おチビちゃん。一瞬で終わらせてやろう」

「……殺す。鬼の四天王が一人、伊吹萃香……死ぬ……人間！」

「お前が俺を人間だと思いついてる時点で、お前の負けは決まってるぜ？」

地面を強く踏み込み、俺に向かってきた萃香の一撃を躲して片方の角を右手で掴む。左手は指輪してるからな、これからは右手と脚しか使わないことにした。捕まえた萃香を突っ込んできた勢いを利用して、遠心力と俺の筋力も合わせて左上方に振り回し、そのまま俺ごと一回転して地面に叩き付けた。

途轍もない轟音と山を震わせる程の衝撃、土を大量に消し飛ばして隕石が衝突したかのようなクレーターを作り上げた。深さは五メートル程で大きさは十メートルくらいかな？ 死なないように萃香には、叩きつける瞬間に霊力で薄い膜を張ってやったが、意味あったかな？

クレーターの中心には俺と、身体を半分以上土に沈めて白目で気絶している萃香がい

る。心音を聞くからに死んでいないようだ。

「れ、零さくん……死んでませんよね？」

「ああ、生きてるよ。よいしょつと……」

再び角を掴んで引つ張りだすと、片方の角が折れていた。まあ、あれだけの衝撃なんだ……折れても仕方ないよな？

引きずりながらクレーターを登ると、麗鬼も勇儀も目を見開いて固まっていた。ただ、天狗だけは驚かずに、そうなるよね、みたいな感じで頷きながら見ていた。俺のことをよくわかっているようで。

「はい、鬼一人目討ち取ったり〜」

近くにあった木に角を深くぶつ刺し、ブランブランと吊るす。一応折れた角も掘り出してきたが……くつつけとくか。収納の腕輪から瞬間接着剤を取り出してむにゅと、折れた場所に付ける。ピトツとくつつければ、あら不思議！折れたって全く分からない！欲しい方は是非月までお越しくださいね。ついでにカシヤツと一枚記念写真。

うむ、と満足してクレーターを消し、再び今度は勇儀の前に戻ってくる。勇儀は純粋に殴り合いでいいか。

「零さん、下手すると山が噴火してしまうので地面に衝撃はもう少し……」

ああ……なるほど、アマテラスの言う通りかもな。次はもう少し手加減して今度は空

中にしよう。

サクツと終わるこの戦い

「じゃ、次のやつ」

「あ、ああ……鬼の四天王が一人、星熊勇儀だ。正直、勝てる気がしない……だから最初から全力で行かせてもらおう」

「ん……まあ、いいだろう。直ぐ終わるならいいさ」

勇儀は持っていたデカイ盃を投げ捨て、妖気を全力で出し始めた。ん……若いからこの程度か。しょうがない。

「ハアアアアア……ツツツ!!!」

ちよ、声でかいですから。ああ、でもさっきの宣言は撤回することになりそうだな。地面さん、ごめんなさい。

「三步必殺ツツ!!!」

マジで？初っ端からクライマックスですか？でも……それもそれで面白いなあ……いいだろう……俺もそれに乗ってやろうじゃないか！

ニヤリと笑い、勇儀に合わせて叫んで脚を踏み出す。

「一歩ッ!!」

共に叫び、共に踏み出し、共に弾幕を展開させる。勿論俺のほうが多く強いため、ぶつかり合った弾は俺の弾幕によって飲み込まれていった。地面が陥没し、罅割れた。目の前では勇儀が同じ事をしたのに驚き、視界の端では麗鬼も同様に驚いていた。それでも技を止めることはない。

「二歩ッ!!」

更に脚を踏み出し力を溜め、体勢を整える。衝撃が地面を奔り、互いにぶつかり合つて周囲のもの全てを吹き飛ばす。

「三步おおおおおおおッッ!!!」

最後の叫びでお互いの拳をぶつけ合う。凄まじい光と熱と音と衝撃波が生み出され、視界を奪った。少しの拮抗もなく、俺の拳が勇儀の拳を砕いて、振り抜いたと同時に腕を破壊した。足元が陥没し、振り抜いた拳による拳圧が勇儀と背後の木を襲う。吹き飛んだ勇儀の周りは消し去られたかのように何も無くなり、腕と口から血を流して気絶した勇儀だけが残されていた。

あ、今更言うがちやんと手加減はしたぞ？俺の本気は…なんだっけ、出したこと無いけど爺に言われたんだよな…えりつと、最低でも星が跡形もなく無くなり、宇宙が消えて新しく形成されるだろう、とかなんとか……。そんなわけないだろ、厨二みたいじゃ

ねえか。

まあ、能力ある時点で何も言えないがな。大体宇宙を新たに形成するとか、マジで意味が分からんし、そんなことできたら拳一つでなんでも出来るだろうが。

まあいいや、どうでも。それより勇儀だが、近づいて容態を確かめてみると、内臓破裂、各所粉碎骨折、筋肉断裂、多量内出血、右腕消失……いやいやいや、待て待て待て！右腕は原型を留めてないだけでまだあるから！骨が皮を貫き、筋繊維が見えて肉の塊にししか見えないけども！

「やっべ……やり過ぎた……」

死んではない……死んではないぞ？でもな？瀕死なんだよ。もう数分で死ぬんじゃないだろうか？

……さっさと終わらせるか！

「麗鬼」

「な、なんだ？」

「さっさと始めて終わらせるぞ、ちよつと用事ができた！」

勇儀治すという用事が！こう見えて結構テンパってるんだぞ？今までは殺しても良かったし、弱い奴らにはちゃんと加減ができていたけど、鬼が他の妖怪よりも強いのがいけないんだ。神は死んでも信仰さえあれば生き返れるからな。

「それじゃあ、始めようか」

「うむ！鬼神、麗鬼！いざ参る！」

「断るぜ！」

互いがぶつかり合い、拳と蹴りでラッシュをかける。拳で攻撃を弾き、蹴りで相手にダメージを与える。

「セイツ！」

「残念でした」

戦っていくうちに落ち着きだし、普段通りに戻っていく。ふう…これならちゃんと加減できるな。いやあ、勇儀のはアレだよ、技が初見殺しや必殺と言われるくらい強かったのにその全力以上の攻撃を受けたからだよな。予想外というやつだ。

「ぐう…やるねえ」

「だろう？だが、そろそろ終わらせないと死んじやうからな」

勇儀が。というところで終わらせることにした。隙を見て両膝を蹴り碎き、姿勢が低くなって頭が丁度いい位置になったので顎を膝蹴りで碎いた。

「おっと、結構飛んだね」

もう既に意識がないだろうが、宙に舞って落ちてきた所を回し蹴りでとどめ。吹き飛んで倒れた麗鬼はぴくりとも動かなかった。

それを見た天狗は雄叫びを上げて喜んでいた。

「アマテラス、後処理と萃香を頼む」

「はい！任せて下さい！」

俺の中から出てきて元氣よく返事をしてくれた。ルーミアも戻ってくるだろうが、アマテラスが居るからいいか。

勇儀をお姫様抱っこたるものをして持ち上げ、麗鬼を背負う。背中がいい感じですね。直ぐ様俺の部屋に連れて行き、二人を布団に寝かす。

「あくあ、永琳に組織修復剤貰つとけばよかったな」

アレがあれば傷は一瞬で治ったのに…残念だ。取り敢えず勇儀からだな。

「ちよつと失礼…下半身は大丈夫だが、問題は上半身ね。内蔵系が殆ど壊れて骨が粉々…妖力も無しか。うん…俺の能力使えばいいか」

【消す程度の能力】、これを使えばいいんだ。ほら、幽香のところの向日葵もそれで助けてやったろ？

「じゃあ、パパッと…」

『勇儀が傷ついたという事実』を『消去』した。能力を発動させた瞬間に勇儀の体は傷一つなくなり、綺麗なものと体に戻った。いやあ、便利便利。さっすが俺の能力。

「うん……」

あ、もう起きやがった。体が全快したから目が覚めたのだろうか……ま、どうでもいいや。

「おはよう、気分はどうだ？」

「……不思議と、いい気分だよ。体が軽い気がするね……」

そう言った勇儀は手を目の前に持ってきて握ったり開いたり確かめていたが、それで何がわかるの？よくアニメなんかでもキャラが掌見るけど……馬鹿なんじゃないだろうか、といつも思う。それと膝枕してもらっているのに気付いた勇儀が顔を赤くしていた。

さて、次に麗鬼だがこいつは放っておいても治るだろうが、さつさと鬼どもに説明して欲しいのでな。勇儀の横に寝転がっていた麗鬼も同じように治した。

麗鬼も時期に目を覚ますだろう。取り敢えず、タフな勇儀に説明だな。

「あの……さ……勝負はどうなったんだい？」

「俺の勝ちで、お前は死にかけた。右腕が潰れて内蔵が破裂して骨が粉碎されて出血が大量だった。なんというか……スマンな」

「いいさ、戦いで決まったことだからね」

なんという男前な……まあ、こういった奴は楽でいいから嫌いじゃないがな。一撫でしてから膝を抜き代わりに枕を挟み込む。

「……………あ」

「ん？……………まあそれより、お前はまだ寝ている。一応、もう大丈夫だが安静にしてろってことだ。俺はコイツと話を付けてくる、分かったな？」

「……………わかったよ」

布団をかけてやれば、布団の端を引っ張って頭まで被ってしまった。ま、寝てくれるならそれでいいか。

「はあ…ほら、起きろ。もう起きてんだろろうが」

隣に居た麗鬼の頬をペシペシ叩き、目を覚まさせる。叩かれた麗鬼は小さく唸ってから起き上がった。

「ここは……………そうかい、負けたんだねえ…」

「そうだ。というかいきなりフランクになったな？」

「ふらんく？」

「砕けた態度になったな」

「ああ、そういうことかい。負けて私には発言権が無くなったんだ、楽に行こうと思ったのさ」

見てみると、本当に緩んだ気になり軽い感じになった。ふむ……………結構いいやつっぽいな。

「それで、私達はどうなるんだ?」

「ああ、別に此処で暮らしていいがいざこざだけは勘弁な。面倒臭いことは嫌いだ、問題は起こすな。天狗共にも言っておく」

「それはありがたいね。子供たちにも言っておくよ…それと、なんで勇儀は布団被ってるんだ?」

「さあ?」

此方に背中を向けて俺の布団を被った勇儀は、さらに丸くなった。

「それとだね…零、アンタ私と結婚しないか?」

…ハア?いきなり何言ってるんだ、コイツ。あ、勇儀がビクつてなった。

「理由は?」

「私より強い男が好きなのさ。それに零が気に入ったっていうのが一番か?それでも男妖怪に言い寄られたのは数知れず、どうだ?」

「残念、もう二人と結婚してるぞ」

「二人?ならまだ増えてもいいってことだ」

基準がわからないんだが?なんで増えてもいいことになってるの?なんでニヤリと笑う?

「どうかねえ…俺が振り向くかどうか」

「言ったね？振り向かせてみせようじゃないか」

ほんと、鬼つてもんはよく分からんな。話し合いよりも戦いで語る……：：：気に入れば仲良くなり、それ以上なら自分のモノにしたくなる……どこまでも欲望に忠実でどこまでも妖怪らしいな。ま、そういう俺も妖怪ほどではないが自分に忠実だな。

さて、俺は外に行つて皆と話をしてこようかね。

「じゃ、俺は話つけてくるわ」

「私はもう少し休んでから行くよ。勇儀と話もしたいしね」

「構わんが……俺の部屋だからな、暴れんなよ。それとちゃんと寝かせてやれ」

「はいよ」

それを聞き、部屋を出る。相変わらず広く長い廊下を歩いて家の外に出れば、玄関の前には天狗全員が集まっていた。暮羽が先頭に居るということは、あいつが集めたのだろう。

そこで、ルーミアとアマテラスだけが俺の側に来た。

「どうだった？」

「コテンパンにしたわ。全員気絶してるけれど、死んでは居ない。放置してるけどね」

「よくやった」

頭を撫でてやると、嬉しそうに目を細めて頭を手を擦り付けてくる。可愛いやつだ

…っと、それより。

「あく、大体俺がいうことはわかっているだろうが、鬼がこれから住むことになった。問題は起こすな、何かあっても俺達が居るし、居なくても天魔と鬼子母神が解決する。鬼にも説明はするし…ああ、もういいや、お前ら！」

「…………ハッ！…………」

「仲良くしろ！以上だ！解散！」

「…………了解！…………」

こいつらにはこれでいいんだよ、まったく……。ノリが良い奴らは好きだぜ？

案外話が早く終わったので、もう一回麗鬼の所に行って話でもしてこようかね。今度はルーミアとアマテラスを連れて俺の部屋に入る。

「おや？その女が居るってことは…子供たちは負けたってことだね？」

「そうね。いい運動になったわ」

「ハハハッ！鬼全員を相手していい運動とは…おかしな妖怪だね！」

「そうかしら？」

なんか結構雰囲気良さそうだな。こいつらは大丈夫そうだが、後は他の鬼どもか…これはルーミアと麗鬼、それに勇儀に任せればいいだろう。それと、その勇儀だが布団から起き上がっていた。流石に昼だから寝れないか？

「そう言えば零……その二人は何なんだい？」

「ああ、こつちが俺の式のルーミアで、こつちがかの有名な天照大神だ。アマテラスに關しては普通に接してやってくれ、本人もそれを望んでいるから」

「はい、そうしてくださいね」

「わかつたよ。それと……三歩必殺のことなんだが、なんで出来た？」

「見様見真似さ。攻撃モーシヨンを一瞬で見切り、それを瞬時に真似た」

実際は知つてたからできたんだけどな、そのやり方でもできるから一応、嘘じゃない。納得してもらつた所で四人には鬼どもの所に説明に行つてもらふことにした。勇儀も寝てないなら別に構わんよな？

俺が何者かというのは、まあ、適當にはぐらかしておいた。俺は俺だからいいだろうが、的なることを言つたら麗鬼も納得してくれたし。

さて、誰もいなくなった俺の部屋で勇儀が寝ていた布団だけが残つた。布団には血が付いていたので能力で消し去り、畳んで部屋の端に置いておく。じゃあ、暮羽のところに行きますか。文や黒猫にも会いたいしよ。

名前付けと宴会と

廊下を歩いて他の所より豪華な作りの部屋についた。ここが天魔の暮羽の部屋であり、俺のくつろぎ場だ。日当たり風通し共に良く、縁側で寝たら最高だ。春になると桜で満開になり、庭で花見をしたりする。ノックもせずに勝手に入ると、着替えた暮羽と黒猫を抱えた文がいた。

「あ、零さん！先程はありがとうございます」

「いいってば。それより俺が頭になった件だが、もうそれでいいよめんどくさい」
「そう言っていたら嬉しそうです。天狗の総意でしたからね」

暮羽の近くに座り、久し振りに抱きついてきたので俺も抵抗せずに愛でてみた。暮羽は甘えん坊だからなあ……と言うか、俺の周りの奴らは皆そうだけど。

「というわけで、文もおいで」

「はい！零さん、お久しぶりですね！」

「にゃあ！」

暮羽共々文も抱きしめ、黒猫が頭に乗ってきた。なんだかんだで文と仲良いんだな。昔は引っ掻き回してたのに。黒猫だが、猫又になって妖力もしっかり増えていた。二本

の尻尾を自在に操り、俺の首にくるくる巻き付けてきたのだが、ちゃんと首を絞めていないところが愛情を感じられるな。案外ふわふわで気持ちいいわ。

暫く二人と一匹とじゃれあい、黒猫に名前を付けようってことになった。

「黒いからなあ……」

「黒と言ったら零さんですね」

「流石に同じ名前はアレですし……今まで一緒にいて黒猫で済んでましたしね」

「ふふ……文つたら何処にいても一緒に居たものね。そんなに猫が好きなのかしら？それとも黒猫を零さんだと思って……」

「そ、そそそんな訳無いじゃないですか天魔様！猫好きです！大好きですよー」

真つ赤になりながらそう叫んだ文から離れていく黒猫。身に危険でも感じたのだから。俺の膝の上でごろごろとした黒猫の喉を撫でながら、名前を考える。そもそもだ、こいつはオスなのか？メスなのか？

「ちよいと失礼」

「にやつ!!」

確認しようと思って股広げたら、瞬時に俺の手の中から脱出して離れた畳に着地した………女の子が居た。

「雌だったか」

「主様のえっち……………」

んなこと言われてもしようがないだろう。

黒髪ショートカットの15歳位の美少女。黒の短いワンピースを着ていて、今は真っ赤になってスカート部分を内股で押さえていた。猫の姿だったんだから関係なくない？猫耳がへにやりと伏せ、二本の尻尾が力なく揺れている。

「人化できたんだな」

「私も初めてみましたよ…」

ん？じゃあ今まで一度も人化したことなかったのか。

「主様に…最初に見せたかったから……………」

主様…まあ、俺が飼い主だし、それでいいか。お、ちょうどいいから名前のアンケートでも取ってみようか。

「なあ、名前は何かがいい？」

「ん…主様が付けてくれるなら、なんでもいい…」

「じゃあ、招き猫で」

「それでいい…」

「冗談だ」

適当に言ったら真面目に帰された…ちゃんと考えてあげよう。観察した所、物静かな

あまり表情を変えないタイプみたいだ。猫の時はテンション違うのにな。聞いてみたところ……

「猫の時は……なんて言うか……高ぶる?」

何がだ。よく分からん子だが、これからはコイツ含めて四人で旅することになるんだし、ちよつとずつ分かつて行けばいいか。

「にやあ……」

「俺のことが好きなのだけはよくわかった……」

擦り寄ってきて身体を擦り付け、尻尾を俺の腕に巻き付けて離れまいと現してくる。

「女の子だったんですね」

「文も擦り寄ればどうかしら?」

「天魔様!」

「あらあら」

そう言いながらもちやつかりくつついてくるんだな。それより名前名前……うん、

「まねき」

「うどんですか?」

「王将」

「ラーメン？餃子？」

「マルちゃん」

「正麺ですよね、それ」

「う〜ん……………」

「にやあ……………」

三人とも頭を抱えて考え出す。ただ一人、黒猫だけが俺をじつと見ていた。いかん、これはちゃんと考えなければ…………。

黒猫黒猫…………あ！

「黒歌！」

「アウトです！」

「じゃあ、五更瑠璃だ！」

「それもダメですよ！ストップ！他作品！」

「え〜」

じゃあ何にすればいいんだよ。ていうかメタイぞ暮羽、俺もだけどき。しかし、名前決めるのにこんなに時間かかるとは思わなかったわ。う〜ん…暮羽の大きな羽と、文の小さな羽をもふもふしながら考えること十分。疲れてきたので今度は暮羽に凭れ掛かり、後頭部で胸をもふもふ…………やべ、寝ちやいそうだぜ。すり寄ってくる黒猫の黒い耳

をもふもふしながら……閃いた！

「よし、決めたぞ」

「にゃん？」

「今日からお前は、富士山だ!!」

「ダメー……ツ!!」

俺が叫んだと同時に、文と暮羽が叫んで止めてきた。暮羽は俺の頭を抱きしめ、文は腹に突っ込んできた。どんだけ俺を止めたかったのだろうか……よっほど駄目らしい。ネタは駄目か……。

「わかったわかった……じゃあ、『三日月』でいいな？異論は認めん」

「別にいいですけど、何故です？」

「空を見てみる」

暮羽が名前に関して疑問に思っただけで聞いてきたので、その理由を教えてやる。俺に言われて三人は既に暗くなり月が昇っている夜空を窓から見上げた。夜空には三日月が輝いており、妖怪の山を照らしている。

「なるほど……月からとったんですね」

「そうだ。別にいいよな？」

「三日月……三日月……うん、私はこれから三日月。ありがとう、主様」

小さく名前を呟いてから、三日月をバックに綺麗な笑顔で笑ってお礼を言ってきた。どうやら満足してくれたみたいだな。めんどくさいから適当に決めたけど、よかったよかった。

それと、名前を付けられて存在が確定したらしく、妖怪としての力も強くなった。ついでに式にしといたしな。あ、ルーミアの件で反省は対してしてないが式の札を改善した。俺の式になっても力がそこまで増えないようにする感じで。せいぜい大妖怪くらいさ。三日月が文を超えちゃったよ。

さて、それから三人を引き連れてアマテラスたちの所に行っただが、なんとまあルーミアとアマテラスが鬼共を仕切っていた。さすがといふかなんと言うか……カリスマ?

あと、鬼と天狗で宴会をする事になったんだが天狗が着いて行けないです。鬼の飲む酒、マジパネエ……と言いながら潰れていく天狗達。オーケー、敵は取ってやるぜ! 度数99%を誇る、殆どアルコールみたいだが酒の味はするモノだ。どんなに酔わなような奴でも酔うようにした、これまた俺特製の酒。その名も【皆殺し】。ピツタリだろ? 鬼もろとも皆殺しだ。

「駆逐してやる」

「何物騒なこと言ってるんだい」

麗鬼に何か言われながらも、俺は誰にも見えないほどの速さで動いて鬼の持つ盃に『皆殺し』を注いだ。それを奴らが飲んだ瞬間、

「「「ぶふおあッ?!?!」」」

噴き出して屍と化した。99%位……なんて思う奴もいるかもしれないが、そこは俺手製の酒。一味も二味も違うのさ。唐辛子食ったと思ったらデスソース飲み干したぐらい違うのだよ、ワトソン君。

「ふう……静かになつたんじゃね?」

「確かにね……御主人様鬼畜過ぎワロタ」

「にやあ……」

残りは俺とアマテラスとルーミアに三日月。麗鬼に勇儀に角が折れたことを知らない萃香、それと暮羽と文。ただ、文がかなり危ない。

「ほらほら、もつと飲みなよ!」

「うえつぶ……我が人生は……悔いだらけ……げふつ」

「文……ッ!!」

萃香に勧められて飲みまくっていた文さんがログアウトしました。しかも悔いだらけなのかよ!

急いで傍により、抱きかかえて生死を確認してみると、白目で口から酒を流しながら

萃香が使っていた片方の瓢箪を床に置き、俺の伊吹瓢を……手首にでも括り着けとくか。

「あ、そうだ。なあ勇儀」

「ん？なんだい？」

「星熊盃くれ」

現在進行形で星熊盃で酒を飲んでいる勇儀に聞いてみた。酒のランクを上げることができるんだろう？伊吹瓢と相性いいじゃん。少し考え始めた勇儀を見ながら、俺の脚の中で猫の姿になって丸くなる三日月を撫でる。

「これは私が使ってるやつだからね……新しいのでいいか？」

「あ、それなら能力で何とかするからいいよ」

星熊盃を勇儀の手から取り、残っていた酒を飲み干してから二つに増やした。増えた片方がカランと音を立てながら床に転がった。それを拾いながらも片方を返す。

「……へえ、面白い能力だね」

「まあな、まったく同じものだからさつきまで使っていたのだ、わかるだろう？」

そう言いながら俺の持っている星熊盃を見せてやる。中は先程まで酒が入っていたということを表すかのように濡れている。あと俺達二人が口を着けていた場所。

見せ終わってから酒を注ぎ、飲んでみると確かに美味さが違う気がする。今度からこ

れで飲みますかね。

勇儀が何故か俺に背を向けて飲みだしたので、俺はアマテラスと暮羽の所に行つたんだが…暮羽は寝てるな。

ふむ…：そろそろ皆限界なのかね？アマテラスも眠そうだし、ゴミを消し去り綺麗な場所に寝させてやる。さて、残りは勇儀に麗鬼に…：つて、コイツらだけか。意外や意外、勇儀が残っているなんて…：と思つている時期が俺にもありました。

「御主人様、私を忘れてもらつたら困るわよ？」

「にや…：私もです」

忘れてないつて。ただ、ちよつと頭の中から二人のことが少しの間消えてただけだ。

ほら、俺つて能力があれだしさ、な？

「まあいいわ。それより、こう言つた時間も久しぶりなんだから、もつと味わいながら飲みましょう？」

妙に艶のある声音で言つてから擦り寄つてきて酒を飲む。ふう…と、熱の籠つた吐息を一つ吐くルーミアの顔を…：正確には目を見る。意識はしつかりしている…：つてことは、襲われなくてすむな。よし、それ以上酔うんじゃないぞ。

そう願いながら、口の端から一筋酒がこぼれて顎と唇を濡らしていたので、拭いてやる。それを目を細めてされるがままになっていた。凄い艶かしいが、慣れたものだ。

「むく……」

「にやあ……」

俺が再び摘みを食いながらルーミアと飲んでいると、今度は三人が頬を膨らませながら近寄ってきた。あれだな、可愛いね。だから残った俺達で仲良く飲むことにした。これで勇儀と麗鬼と仲良くなれたんだから、宴会と酒は凄いものだ。

再び旅へ

鬼がこの山に住み始めてからはや数年経った。特に何もなかったんだが、強いて言うなれば妹紅を拾ったくらいかな？なんか力の使い方に手を焼いてるようだったから、教えてやることにしたんだ。

あ、言っておくが少し気になったからわざわざ俺から妹紅の所まで行ってやったんだからな。

妖怪に返り討ちにあっていた所を拾ったってわけ。

まあ、その話は置いておいてだな、今は暮羽の部屋に向かっている。そろそろ旅を再開しようと思つてな。妹紅と三日月でも連れ回してやろうかなあ、と思つて。

「ということ、邪魔するぞ〜」

「何がということなんです？零さん。それで、どうなされました？」

「おお、零か。どうしたんだ？」

なんだ、麗鬼も居たのか。仕事をしている暮羽の前で酒を飲んでいた。邪魔してやんなよ、暮羽は真面目なんだから…多分。

それを一瞥しながら暮羽の隣まで歩いていき、座り込んだ。麗鬼に言っておいてなん

だが俺も酒飲むぞ。伊吹瓢から星熊盃に酒を注ぎ、飲み干す。あれから喉が乾いたらこの組み合わせで酒を飲むことが多くなり、今では水のように何時でもどこでも飲んでいい。

もう一回注ぎ直してから暮羽に話しかけた。

「なあ暮羽」

「はい？」

「いや、そろそろ旅にでようと思つてな。また此処を任せていいか？」

「もうそんな時期ですか……寂しくなりますね。ええ、分かりました、任せて下さい」
「頼むな。じゃ、またな」

最後に抱きしめながら頭を撫でてやり、部屋を出る。なんかもう娘みたいに思えてきた。俺父親？

ルーミアとアマテラスと三日月と妹紅は俺の部屋にいたので、そこに向かう途中で麗鬼が背後から来る気配を感じ取る。お前暮羽の所で呑気に酒のんでなかったつけ？

不思議に思い振り返った瞬間、麗鬼に捕獲されて何処かに拉致られた。何？なんなの？

それからどこかの部屋にドナドナされた。連れ去られた仔牛はこう言つてたぞ、「仔牛です。特技はく、食材です！なくんちゃつて、モく」。なんてユーモア溢れる仔牛なん

だ。自虐ネタは受けるとわかっていつているな？

麗鬼に拉致られるそんな仔牛を、俺は後ろからついていきながら見ていた。

「モ〜（ていうか、なんで自分ここに居るんでしょかかね？）」

「さあ、神隠しされた結果がこれじゃないか？」

「モ〜…（さぼってたのがバレちゃったのかな…）」

喰われても文句言えないこととしてんなよ。最近の牛つてサボるの？私、気になります！

それから部屋の中に連れ込まれて、俺も中に入ると萃香と勇儀が酒を飲んでいた。そんな二人が麗鬼に連れて来られた仔牛を見て驚き、酒を吹き出した。まあ、普通はそうだよな。ていうか、何で抱き心地と匂いで気づかんのかね？

「……母様、なんで仔牛つれてるのさ……」

「さすがに、予想外というかなんというか……」

「仔牛？……へアツ!？」

二人の言うことに疑問を持ったのか、手元を見てみると仔牛が鳴いた…もとい、泣いた。哀れだな。というかその驚き方……いや、なんでもない。

驚いて手放した麗鬼は海老のように飛び退った。

「なっ!?!零は……って、何故だ!？」

「質量のある残像」

ニヤリとしながら言い放つ。仔牛をどこから持ってきたのか？知らんな。勝手に持ってきてても大丈夫なのか？ふっ……

「大丈夫だ、問題ない」

「いや、問題しか無いよね？」

「萃香、それは質量のある残像だ」

「意味が分からないよ……」

安心しろ、俺もだから。

「それより麗鬼、何で俺を連れ去ろうと……いや、仔牛を連れ去ろうとした？」

「牛なんて連れ去る気は全くなかったんだがねえ……」

「だろうな」

どこか納得行かないような顔で此方を見てくる麗鬼。変わり身の術って知ってるか？牛バージョンだが。

聞いてみたところ、どうせ旅したら長い間会えなくなるのだから最後に一緒に酒でも飲もうと思って連れ去ろうとしたらしい。そんなことしなくても飲むのに。

酒を飲むのにはつまみが必要…なので俺は無情にも仔牛を捌いて焼いて食べることにした。ちなみに美味かったぜ。

「もう行くのかい?」

「まあな。他の奴らも待たせてるし、じゃあな」

「ああ、零。私は何時までもこの山で帰りを待つてるからな。気をつけて行ってこい」

「はいはい」

最後にキスを軽くされ、背を向けて飲み始めた。あとは萃香と勇儀だが、萃香酔いすぎじゃね?

「ヒック……零ほど強くもいい男は居ないからね……私も待つてるよ……ほれ」

酒を飲んだかと思つた萃香だが、それは違つたらしい。口に含んで口移しするだけだつた。麗鬼の真似か? 酒はなかつたが。

「ゴクツ……ふう、幼女にされても嬉しくねー」

「む……また幼女つて言つたなく!」

「うるせえ……もういいっつの、じゃあな」

抱え上げて麗鬼の所にボツシュート。萃香を麗鬼のもとにシュート! 超エキサイティン!!

ザマミロWWW。麗鬼の酒こぼして怒られてやんの。さて、そろそろ行きますか。次は何処に行こうかな?

「ちよつと待ちなよ!?!」

「あん?……ああ、勇儀かどうした?決闘と書いてデュエルと読む勝負ならしないぞ?」

「私もしないが!?!じゃなくて、なんで私だけ無視して行こうとするんだい」

「サーセンwww」

「馬鹿にしてないかい……?」

「してないが?」

不満顔で言う勇儀にサラリと嘘をつく。鬼に嘘つけるのなんて俺だけじゃね?どうせバレないし、どんだけ言ってもいいのさ。麗鬼なんて嘘つかれまくってるのに何年も気づいてないぞ。素直って言えば素直なんだが……それでいいのか。

それで勇儀だが、どうやら麗鬼と萃香の真似をしようとして口に酒を含んだ方がいいが、顔を赤くしたままオドオドしている。恥ずかしいならすんなよ、仕方ないな……

「ほれ」

「ン!?……コクン……あ、」

頭を叩いて無理やり飲み込ませてやった。飲んだことに気づいて小さく声を上げたが、普通はそれでいいんだぞ?なんで飲んじやった、みたいな顔をする?

「あのなあ……別に麗鬼や酔っぱらいの萃香なら心苦しくないが、勇儀はまともなんだからそういうのは好きな人ができた時にしなさい」

「……………馬鹿」

俺にしてはまともなこと言ったと思っただけど、なんか言ったら勇儀が不貞腐れて麗鬼達と飲み始めた。なんで麗鬼と萃香は勇儀を慰めてるんだ？

まあいいや、行きますかね。

部屋を出て自室に向かって四人を回収する。それから天狗の里…もとい、妖怪の山を出たんだが、行く宛もないのでふらふら彷徨ってるだけだ。アマテラスは俺の中にいるのが慣れてしまったため、入っているらしい。ルーミアは俺の隣でくっついて歩いていて、三日月は猫状態で頭に乗って寝ている。

妹紅も隣にいるぞ。結局、妹紅は不老不死になつて彷徨つているところを拾つてやったことになっている。まあ、俺の言うことはちゃんと聞かし、まだ言葉使いが荒れていないので敬語だし、いいんじゃない？

「ということ、妹紅よ、どこに行きたい？」

「何がということなんですか……それにこの服装は何ですか？」

「ん？ 気に入らない？」

「いえ、零さんがくれた服なのでそんなことはないですが……」

そういうながら、妹紅は自分の着ている服の裾を掴んで改めて見ている。俺があげた服装は所謂アレだ、黒のパンツスーツだ。だつてさ、似合つてない？ 想像してみ？ 妹紅のスーツ姿……更にはタバコでも吸わせたらイケメンじゃん。

いや、今の妹紅は普通に可愛いけど。勿論、タバコなんて吸わせない。それにだな、伸縮性抜群で耐熱防刃なんかで破れない燃えない強さ。性能も抜群なんだ。

「似合ってるぞ?」

「そ、そうですか……? えへへ……// //」

俺がそう言うのと、少し嬉しそうに頬を染めながら俺のコートの袖を掴んできた。

………何この可愛い生き物。お持ち帰りしていい?

『確かに可愛らしいですが、持ち帰りも何も連れ歩いてるんですから』

それもそうだな。いや、お持ち帰りいいいい、って言ってみたかった。

それよりもだ、かわいい妹紅を引き連れてそろそろ村に向かおうと思うんだよ。

『ちやつかり妹紅さんと手を繋いでますね』

大丈夫、気分は父親で行こうと思ってる。いや、そんなことより村だよ。俺の暇潰し

……ゲフンゲフン、食料とか見つけなくちゃいけないからな。

『暇潰しを見つけるんですか?』

「そう、暇潰しだ」

「声に出てるわよ? 御主人様」

イインダヨ。さて、そんなこんなで村につきましましたが家がない。だから都みたいに離れている所にある古い家を使おうと思ったが、入ってみると先客が居た。

しかも、その人物はでかい角生やした少女であり、慧音に似てるような……あ、今日満月だわ。まあいいか。

「じゃあ、今日はここで夜を過ぐすか」

「そうね、そうしましょう」

「いいですね、夜の外は危ないですし」

「にやあく」

驚く少女慧音を無視せずかかと家に上がり込んで、妹紅に火のついていない囲炉裏に火をつけさせる。妖怪に囲まれて過ぐしてたんだからこういつた術の扱いも自然と上手くなるのだ。しかも俺が色々を使い方を教えたからな。

「ありがと、妹紅」

「いえいえ」

火によって部屋が明るくなり、全貌があらわになる。部屋の隅にボロボロの棚があり、それ以外はなにもないのだが、ゴミや埃なんかはないようにこまめに掃除してあるということが、床を見て分かった。こんなボロボロの小屋に住んでるのに掃除はするんだな。一回壊して立て直したほうが良くないか？

そんなことを考えながらも、収納の腕輪からいろんな食材を取り出して鍋にする。その周りに魚を差して焼くことにした。三日月が魚好きだから少し多めに。

鍋がぐつぐつという音と、魚から滴り落ちる油が火に当たりジュウジュウと音を立てている。既に良い匂いを出しており、部屋全体に充満している。それとアマテラスも既に出て俺の隣に座っているぞ。

「それにしても、この家ボロすぎないか？一回壊してしまおうか」

「それはいいわね」

「え？此処に住むんですか？」

「いや、住まないけど？」

「「え？」」

アマテラスが疑問に思うのと驚くのは分かるのだが、なぜ慧音まで？

あ、いやそうか、さすがに自分の家が壊されると言われたらそう思うよな。知ったこつちやないが。

「では…何故壊すのですか？」

「それはまあ…こんなボロ屋に住んでいるであろう、貧乏で惨めな奴に更なる追い打ちをかけようと思ってだな」

「ちよつとまで鬼畜すぎるだろう！というか人の家を壊すな！」

「え、お前誰？人の家で何してんの？」

「私の家だが!?勝手に入ってきたのはお前たちだぞ！」

わはは、何言ってるの。お前のものは俺のもの。俺のものは誰にも渡すわけないから勿論、俺のもの。ジャイアニズムっていい言葉だよな。素直にジャイアンに尊敬する今日此の頃。

おっと、そろそろ鍋も出来たみたいだし、魚もいい感じだ。それぞれの皿に入れて渡していく。ついでに魚もな。三日月の前にだけ魚が三匹いるけど、猫だもん、しょうがない。

「おっと、仲間外れのぼっちは嫌だもん。お前にも分けてやるよ」

「言うことが一々心に来るが……ありがとう」

「え、罵倒に対して礼言ってるの？（・ 皿、）キモッ」

「違うわ！と言うかやはり罵倒だったのだな!」

ぎやーぎやー騒ぐ慧音を落ち着かせて、その手に魚を持たせる。さすがに食べ物を粗末にしたくないのか、直ぐに大人しくなった。なんだ、こいつもチョロイのか。

それはさておき、食事をしながら慧音に何でこんな所に住んでいるのか聞いてみた。ちなみに俺が聞いたんじゃない。アマテラスと妹紅が聞いたんだ。俺は十分コミュニケーションを取ったからな、若いものに譲るのさ。え？何ルーミア、アマテラスも十年取ってるじゃないかって？いやいや、こんなのまだまだ若いほうさ。俺にとってはだけど。というかそのこと絶対にアマテラスに言うなよ。不貞腐れるから。

それで、慧音のことなんだが、なんかその満月の日に出る角を見られて以来虐げられているようだ。石ぶつけられるのは当たり前で、食材なんかも売ってもらえないから自給自足生活。何それ遅しい。

呪われてるだ、妖怪だ、化物だ……色々言われて遠ざけられているが、一部の強い男や陰陽師が慧音の身体目当てで襲ってくるそう……確かにナイスバディだもんな。それも何とか逃げ切つて今に至ると。そろそろ本気でこの村から討伐されそうというわけだ。まあ、この時代の人間は思い込みが激しいからな、勘違い野郎もゴキブリ並みに居るんだろうさ。

「酷いですよ、そんなのって……」

「そんな妹紅に質問。どの辺がどう酷いんだい？」

「えつとですね、自給自足をするにしては此処ら辺の山ではキツイです。もつと自然豊かで綺麗な川が流れているとこでしないと、体に悪いですね」

「そういうと思つたよ」

「期待した私が馬鹿だつたよ……」

あらあら、落ち込んだじゃつた。妹紅も俺が色々仕込んだせいか、考え方も変わつちやつたんだよね。貴族であつた頃の妹紅なんて何処にもいない。輝夜への復讐？そんなものとうの昔に置いてきたらしい。具体的には腐りかけの漬物と一緒に壺の中に。

腐ったんだね、輝夜への復讐。

よく考えれば、お父様の人生はお父様のもの、私がどう言ってもいいものじゃなかったのかなんとか……最初から気づいてろよ馬鹿がって話だよな。それを言ったら涙目だったけど。ちゃんと藤原不比等の亡骸は埋葬してきたぞ。妹紅と一緒にアーメンハレルヤピーナツバターって言いながらだけど。

「まあそれはいいとして」

「良くないけどな」

「いいとして。これからどうするんだ？死ぬの？『ピーーツ』されるの？」

「表現が生々しいぞ!?やめてくれ！」

「だが断る」

『ピーーツ』の部分は各自想像してくれ。慧音好きの人が好きに想像すればいいと思う。ただ、同意やらなんやらを求めて来ないでくれ。対応に困るから。いやマジで。

んなことはいいとして、結局俺たちの旅に誘うことにした。慧音も了承したし、妹紅のいい友達になってくれればと思うぜ。取り敢えず俺達の名前も教えといて、構成メンバーが神と妖怪だということを伝えたら、パタリと倒れて動かなくなつた。何処に驚く要素があつたのだろうか……神か？妖怪か？それとも実力のことか？

それからすることもないので寝ることになつたのだが、慧音を横たわらせても、あと

二人ほどしか寝転がれない。座っていてギリギリだったもんな、寝るのはさすがに無理か。空間を広げてもいいが面倒くさいので、ルーミアとアマテラスは俺の中で寝てもらうことにした。後は三日月が猫になれば大丈夫だ、問題ない。

囲炉裏を囲むような感じの部屋なので、『コ』の字で寝ることにした。上から慧音俺妹紅って感じ？

うん？もう一箇所寝れるところがあるじゃないかって？そこは柵が置いてあるし、寝ている二人の足で端っこが埋まるから無理だ。

「さて、寝ますか」

「はい。おやすみなさい」

「にゃ〜……」

俺の呟きに妹紅が小さく答え、三日月が俺の胸元で丸くなった。俺の顔の横に慧音の頭があるが、なんかいい匂いがする。この時代に風呂は出回ってないし、石鹸なんかもないから……フェロモン？いや、どうでもいいか。三日月を抱きまくらにおやすみだ。

迷子は俺達じゃない、断じてだ。

翌朝、頭に軽い衝撃が伝わってきて起きた。見てみると慧音の寝返りによる頭突きだった。まさか、この時から慧音の頭突きは健在だったのか……んなわけないか。

当の本人はというと、そのことを知って慌てて起きて後退り、謝り倒してきた。自分は石頭だからとか……自覚あるんだな。

「じゃ、行きますか」

「本当に着いて行ってもいいのか……？」

「いいのいいの」

『それにしてもどこに行くのですか？』

『あ、私はまだ寝てるわね。ふあ……』

ルーミアはまだ寝るらしい。それにしても何処に行くかって？そんなもの例によって決めていないに決まってるだろう。俺が決めるのも面倒くさいので、妹紅に聞いてみた。

「妹紅、何処がいい？」

「私が決めてもいいんですか？」

「ああ、言ってみろ」

「えつと…それじゃあ、命蓮寺っていうお寺に行ってみたいです。妖怪の山に居るときにちよくちよく噂で聞いてたんです。妖怪の駆け込み寺って」

「にやあ…私も聞いた」

「ん、そこにするか。慧音もいいか？」

「私は零に着いて行くだけさ」

あら、そう。それにしても命蓮寺ね…えつと、誰がいたつけ？確か聖と鼠と船長と……雲？ああ、忘れた……見れば思い出すだろうさ。

それにしてもここから遠いな……歩いて三日は掛かりそうだ。ま、自由気ままな気楽な旅だ。時間は腐るほどあるんだからのんびり行こうかね。

じゃあまずは方角。この村から南西に真っすぐ歩けばいいんだな。途中大きな山をひとつ越えることになるが、俺達は全員まともじゃないので大丈夫だろう。

慧音の持つて行きたいものとかを俺の腕輪に収納して早朝からレッツゴー。今回はアマテラスも出てきて慧音と話しながら歩くそうだ。妹紅も慧音のところに行つたし、ルーミアと三日月が俺の所にきて共に前を歩いている。三日月は頭の上でルーミアが左隣。

さて、既に村から出て二時間ちよつと経ったけど、後方の三人と別れた。つまりは迷子だ、三人が。俺達ではなく三人が。もう一度言おう、三人が迷子だ。

「何処行つたのかしら？」

「さあ。でもアマテラスとは繋がってるし、直ぐに来ると思うんだけど、ルーミア」

「なに？」

「闇でも操つて連れてきて」

「しようがないわね……」

はあ……と溜息をついてから闇を自在に操りだすルーミア。だって自分でするの面倒くさいもん。本来、こういうことをさせるためにルーミアを式にしたんだし。働いてくれ。

ルーミアが闇で何かを創り出したんだが、なんだろうな。ぐにやぐにやと不自然に歪んで、形になってきてから止まったんだが、出来た姿が馬鹿でかい鴉。大きさで言えば普通の鴉の約三十倍くらい？それくらいだと思う。視覚を共有させて見つけさせるのだとか。

んじやまあ、見つかる間も暇なので歩き続けておこうか。どうせ追い付いてくるでしょう。三日月弄りながら歩くこと二時間。山を抜けてそこそこ広いところに出て道を歩いている。そして見つけたのが、なんか丸い玉に屋根がついた物。どうも脚で踏み

つぶしたらしく、粉々一步手前になってるけど。

「ルーミア…なんか踏んだんだけど」

「なにを？…つて、なにそれ？」

「宝塔…だと思いたかった物」

「へえ…誰かのかしら？」

「とりあえず証拠隠滅」

安定の隠し事。破片を拾い集めて収納の腕輪の中に入れておいた。腕輪の中が一番安全だからな。俺以外に取り出せる奴は絶対にいない。

さて、踏み潰したことも忘れ去っててく歩く歩いてみると、少し向こうになんか虎みたいな発見。虎なんて珍しい…こんなところにいるわけないのに。ルーミアに少し断りを入れてから木々の合間を縫ってそこに行き、フリフリと動く虎柄を目にしながら……

「せいー」

「ふぎや!」

近くの木を引っこ抜いてフルスイングした。勿論、殺さずに手加減したから、大丈夫だ、問題ない★

よし、これで何処かに売りつけて金でもぼったくろう。見世物小屋に直行してから、

毛皮として売られる運命……いい夢見ろよ。

「よしよし……ゴチになります」

アマテラスが見ていたら、悪どいと言うだろう笑みを浮かべながら、茂みに隠れたソレの首根っこをむんずと掴んで持ち上げる。なんか首が異様に細いような……本当に虎か？タイガーか？もしかして某運命のゲームに出てくるトラじゃないだろうか？

よいしょと持ち上げて顔の前にぶら下げてみると……

「きゅ……」

「……………虎？」

なんか目をバツテンにした女だった。ギャグ補正？なにこれ可愛いお持ち帰り。というかどこが虎……ああ、そういうことね。

体をジロジロ見てみると、腰のあたりに虎柄の布があった。もしかしたらなにか探しものをしていた時に、ソレが見えただけかもしれない。そして勘違いで木をぶち当てたと。……………罪悪感？なにそれ美味しいの？

まあいいや。ルーミアのところに戻ろう。木をポイツと捨てると、ズズウン……と地面を揺らして倒れた。それにしてもなんで虎柄……そしてこの顔何処かで見たとあるような。

こいつも大阪のおばちゃんみたいな精神を持つてるのかもしれない。起きたら注意

だな。もし仲良く慣れたのなら、虎のきぐるみでも着せてみようか……いや、パジャマ的なのがあったな。昔にサキがいろいろ買ってきたんだよな。

フードに耳と黒い目がついていて、手と足にはその動物のもふもふ手足、尻尾があればそれもお尻のところについている。

因みに、ゲンがゴリラでシユウが犬、サキが猫で永琳がウサギ。そして俺が狐。誰だ尻尾九本も付けた奴。とまあ、こんなかんじでそのシリーズが腕輪の中に入ってるんだよ。動物パジャマシリーズ。女二人はガチで可愛かったが、ゲンのゴリラは異様に似合っていた。でも気持ち悪い。吐き気がするくらい気持ち悪い。大事なことだから二回言った。

お、ルーミアいた。

「おくい、ルーミア」

「あ、御主人様。ネズミ捕まえたわよ」

「ネズミ？汚いから捨てなさい」

「それが少し違うネズミなの」

なにになに？そんなに珍しいネズミなのか。見せてもらうことにした。

ルーミアが腕を上げると、そこには首根っこ掴まれた涙目のネズミ少女……ナズーリンがいた。いやまあ……確かに違うネズミだ。しかし俺も対抗するものがあるんだよ。

「それなら俺もあるぞ。 見ろ、頭に花咲かせた虎柄のものを着た大阪のおぼちゃんみたいなやつ。 きつと頭がパーなのか、花畑なのだろう」

「うわ……なにそれ怖い」

「ご主人!？」

突然ジタバタしだしたナズーリンを、ルーミアがひと睨みして黙らせると、マリオのごとく小さくなつて黙りこんでしまった。 それからそいつらが住んでいるという寺に案内してもらおうことに。 肩に担ぎながら歩き、ルーミアが掴んだまま運ばれているナズーリンのネズ耳と尻尾を片手で弄る。 耳もふもふしたり、尻尾をくにくにしたり。

寺に着く最後らへんには、ナズーリンの声が聞こえなくなつてきて小さく荒い息遣いしか聞こえなかった。 ルーミア、ずっと首根っこ掴んでるから息できなくなつてきてるんだよ。 気づいてあげて。 俺は言わないけど。

「やつと着いた。 よし、田舎に泊まろう!」

「周りに住宅街がないんだけども」

「……………突撃! 隣の晩御飯!」

「隣に家がないわよ」

「となりのバナナ!」

「だから……………」

「となりのト○ロ！」

「……………」

「文句多いな、ルーミア」

「何も言っていないんですけど!？」

となりのアクバル、隣のイケメン、となりのウチナーンチュ、隣の駅、となりのペドロ、となりのグリルなどなど…隣のほにやらシリーズはまだまだある。レッツほにやららら。

さて、気配でも探つて人がいるところに行つてみようか。うくむ…どこかの部屋の中に知ってる気配がある。これはあれだ…アマテラスと妹紅と慧音だ。よし、三日月。猫に不法侵入という概念はない…行つて来い。

「にゃあー！」

頭から飛び降りた三日月はすぐさま走つてどこかに消えた。降りてきた際にナズーリンが怯えてたけど、猫は苦手なのだろうか…まあいいか。少しするとパタパタと迷子三人組と聖白蓮がやって来た。

どうもあのかいカラスはここに案内したらしい。いや、もしかしたらすでについていたのかもしれない。というか待て、俺って昔に聖白蓮にあったことがあるんじゃないか？なんか少しだけ覚えている。

子供の頃から婆一步手前まで一緒に居たような……命蓮も知ってるぞ、そう言えば。
「零さん、離れてしまつてすみません」

「いやいゝ」

「あ、それと私は零さんの中に入っていますね」

そう言つて俺の中に入り、中で入つた理由を教えてください。寺で本物の神の名前言つたら面倒臭いことになりそうじゃね？ということですな。俺つてさ、他の世界では既にめちやくちや有名だけど、この世界ではまだあまり広まつてないんだよな。知ってるのは神だけじゃないか？ 広まるのは未来だと思ふ。

ふと、聖白蓮を見てみると、いつの間にかナズーリンは開放されていたのか、なんかナズーリンを慰めていた。よほどルーミアが怖かつたのだろうか。妖怪のトツプレベ
ルを優に超えてるから仕方がないかもしれないけど。

「聖く、誰か来たの〜?」

「またお客さん?」

「今日は多いわね」

ん? また誰か来た。三人くらい来て、聖の方に向かつていったが、一人見覚えがある。

アレは確か……

「あああああああああッッ
!!!!!!」

「ぬ、ぬえ!? どうしました!」

そんな聖の心配する声もなんのその。無視してダッシュしてロケットずつき。だが甘い……見切った!そこだ!

「質量のある残像ツ!」

「無駄無駄無駄無駄無駄ア!!」

「ゲホオアツ!」

「一二星——(ご主人) ツ!!」

ぬえのロケットずつきを肩に担いでいた虎柄女でガード。脇に手を入れて目の前にかざしたのに、そのガードさえ突っ切って突撃してきた。ガード?一瞬目を覚ましたけど再び沈んだぜ。足元に転がっている。

仕方なくぬえを食らい、衝撃を逃がすように抱きしめたあとにくるくる回る。それから止まった。まったく……久しぶりだけど少しはしやぎ過ぎじゃないだろうか。

都にいた時に、うるさかったので俺がはたき落として屈服させたあとにしばらく一緒に遊んだのだ。何して遊んだか?それはまあ……イタズラしまくったに決まってるじゃないか。一ヶ月……都是混沌としていた。妖怪の仕業じゃないかと言われていたが、残念。神の仕業だ。

イタズラの範囲はかなり広く、一般人は勿論、陰陽師やかぐや姫、帝までなんでもご

ざれだ。俺をあまりナメないでほしい。やると言ったらやる男：ソレが俺だ！

ある意味それを考えると、ぬえは凄いやつ妖怪といえるかもしれない。アベノミクス……じゃなくて安倍晴明をイタズラ漬けにして帝を嵌めまくる。歩けばタライ、歩けば黒板消し、歩けば落とし穴……一緒に遊びまくったぜ。警備を増やしても意味なかったな。

「おっと……まったく、もう少しゆっくり来いよ」

「嫌！それにしても久しぶり！最後に会ったのは帝を厠でお尻を便器に嵌めて、お風呂で脱毛剤を使わせて、夜に枕を巨大豆腐に変えるっていうイタズラをして以来だね！」

「懐かしいなあ……」

アレは楽しかった。八意印の超即効性脱毛剤を使わせた時は二人で笑い転げた。髪を触るたびに抜けて、全身つるつるになっていった。泣いてたな。豆腐は頭が沈んで偉いことになっていった。窒息死しないために食いまくっていたのを憶えている。

「「「「うわあ……」」」」

全員ぬえの言葉を聞いてドン引きしている。アマテラスはその時俺の中にいたので知っている。勿論大爆笑。腹筋崩壊したとか。大丈夫だ、俺とぬえもだから。

そうだ、せつかくだからぬえと一緒に足元のこいつをイタズラして起こすか。それをぬえに伝えると、ニヤリと笑って頷いた。それを言う俺も笑っていたらしく、ぬえに頬を触られながら指摘された。他の奴ら？なんか青くなっている。

さて……何をしようか。